

平成13年度第21次発掘調査報告

平成13年度第21次発掘調査報告

1 調査の概要

第21次調査は野外調査を平成13年5月16日から12月20日まで行った。調査対象面積は2.150m²である。調査は市道秋成線建設に伴う事前調査として平成9年度からの継続調査であり、最終年度の13年度は本線部分の東西約150m、最大幅20mの範囲を調査した。本調査区は林前遺跡群の南西部に位置する。現状は大部分が畠地であるが、東部と北部は民家、南東部と北側の一部は倉庫が建っていた。また、調査範囲に含まれる市道は付替え道路を作ることができないため調査対象からははずした。標高はおおよそ東部で42m、西部で40m、市道付近が最も高く東西に緩やかに下る地形である。

調査は建物の立ち退き等の都合によりいくつかの地区に分けて行った。便宜上、調査した順にA～G区とし、遺構番号も検出順に付した。遺構番号は20次調査からの連番とし、本報告でもそのまま使用している。A～G区の位置は遺構配置図に示した。B・C区、D・E区はそれぞれ同時に調査を行うことができたが、その他の地区は残土を反転させながら単独で行った。D区とE区は農道で分断されていたが、途中でそれを削平したため、最終的にはつながることとなつた。

空撮も全体を撮る事はできず地区ごとに行つたが、撮影することができない地区もあった。調査は12月半ばに及んだため、最後に調査したG区については降雪により遺構の掘り上げを断念し、遺構確認にとどめざるを得なかつた。

2 基本層序

調査区が東西に長いため、基本層序にも若干の違いが見られる。調査区南東部のA区では工場跡地ということもあり、全体に搅乱が激しい。盛り土をした地表面から1m以上の基礎が打ち込まれていた痕跡がある。パイプなども縦横に走っており、深い搅乱の下に遺構は存在しないと判断し、現地表面から約30cm～1mの地山面を検出面とした。それ以上深く入る搅乱は旧地山が出るまで掘り下げることはしなかつた。A区の層序は以下の通りである。

表上層 砂利層

I層 10YR2/3 黒褐色土やや砂質土。褐色土・炭化材粒少量含む。粘性なし、しまりあり。厚さ25～30cm。

II層 10YR5/6 極色シルト質土粘性なし、しまりあり。厚さ25～30cm。この層の上面が検出面である。
III層 10YR4/6 極色砂質シルト。粘性なし、しまりあり。

最も広い調査区を設定したB区は、東から西に緩やかに傾斜し、すぐ西を旧天神川が南流する。現状は畠地であった。西に行くほど表土は薄く、最西端では20cm弱で検出面に到達した。

I層 耕作土

II層 極色土粘土質土

C区は畠地と家屋を移動した跡地で、土層はB区とほぼ同じである。

D区は宅地造成の際に盛土をしている。ブロック塀の基礎が地山まで入っている。土層はB区と同じである。G区も宅地であり、層序はB区と同じである。

中央や東寄りのE区では表面はアスファルト、下は地業の盛土、その下に古い建物の基礎がある。

I層 10YR3/3 暗褐色土。褐色土多く混じる。炭化材粒含む。粘性なし、しまりあり。厚さ10cm。

II層 10YR4/6 極色砂質土。粘性なし、しまりややあり。厚さ25cm。この層の上面が検出面。

III層 10YR5/6 黄褐色シルト質砂質土。粘性なし、しまりややあり。厚さ20cm。

IV層、10YR5/6 黄褐色砂質土含む礫層。

F区は東端で、他の地区とは市道で分かたれている。住宅の跡地で、パイプなどの跡が走る。表土には砂利等が混じる。地山は褐色のシルト質土である。遺構の残りはよくなかった。

3 検出遺構と遺物

検出した遺構は竪穴住居跡16棟、上塙跡49基、井戸跡2基、溝跡6条、堀跡1条、掘立柱建物跡は古代の1棟を含め25棟、不明遺構が17基である。

縄文時代の遺構は細長いタイプの陥し穴状遺構が21基ある。B区の西側からD区、E区まで調査区全域に渡って東西方向に並列していた。

平安時代の遺構には、竪穴住居跡16棟、土塙跡25基、井戸跡1基、溝跡3条、掘立柱建物跡1棟、不明遺構3基である。竪穴住居跡については、すべて方形である。B区では作りかけの住居跡SI0140を検出し、北側半分を検出したSI0145からは内外黒色の耳皿が出土した。C区のSI0191の床面からはロクロビットを検出した。C区のもう1棟の住居跡SI0192は遺存状態が極めて悪かった。D区で検出したSI01100は規模は小さいが北東コーナーに大きいカマドを持ち、多量の遺物がカマド付近から出土した。

土塙跡のうち、SK0133土器溜りからは多くの土師器が出土したが、検出は表土下20cmであり、削平されているものと考えられ遺構自体も浅かった。他の土塙跡からは数量が少ないが、平安時代の土師器が出土している。

また、SX0153はあまり深くない素掘りの井戸跡で、天水をためた井戸であると考えられる。大量の土師器が出土している。

溝跡については時代がはっきりしないところもある。B区で検出した東西溝SD0131はG区で北に折れることが分かった。

掘立柱建物跡は1棟で、方形の掘り方に円形の柱当りをもつ。

中世の遺構は20次調査から続く堀跡SD0190で、13次調査で検出した溝SD06と同一の遺構である。この堀に区画された内部に関係する遺構は掘立柱建物跡20棟でこれらは概ね5期に分けられる。

井戸跡はSK0148で、井戸枠の残りと思われる木片が出土している。円形である。

時代を確定できなかった遺構には最近の土塙跡や溝、風倒木もある。SX0130は埋土から比較的多くの土師器が出土したが、同時にビニールひもなども出土した。地元の人の話では最近の上取り穴であるという。

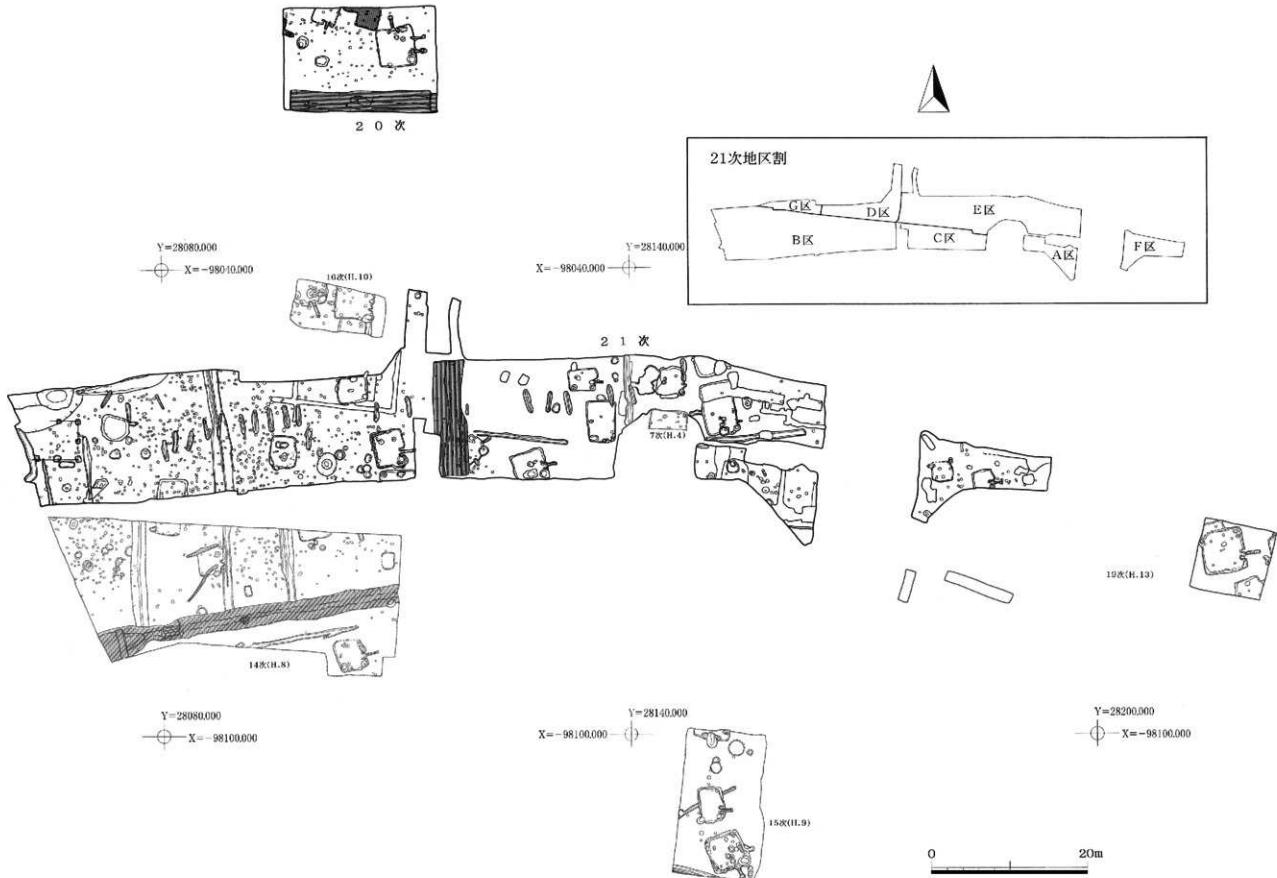
掘立柱建物跡に組み合わせることができなかつた柱穴状ビットも多いが、その大半は共通する特徴から中世であろうと推測される。柱穴状ビットは最後に一覧表にした。

ところで、調査区を区切って調査したことは前述したが、遺構密度の高い地区はB区中央部で、竪穴同士の重複はないが、陥し穴や土塙跡、柱穴状ビット（掘立柱建物跡）とは重複がある。柱穴状ビットはB区中央部が多く、東に向かって数が減り、堀の東側ではC区にわずかな数が検出されただけである。E区では西側には全くなく、東側で数個検出したのみである。

以下で、縄文時代・平安時代・中世の順で各遺構について詳しく述べる。

(1) 縄文時代・陥し穴（第54～63図・写真図版48～52）

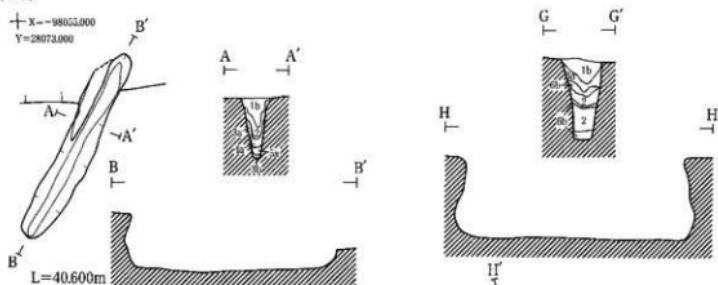
土塙跡SK0155、SK0158～SK0166、SK0168、SK0173、SX01101、SK01102、SK01104～SK01109、SK01124は、縄文時代の陥し穴である。B、D、E区において、21基見つかった。陥し穴は、一般に、“Trap”的頭文字を取って「Tビット」と呼ばれる。形態はいくつかあるが、今回の調査で検出され



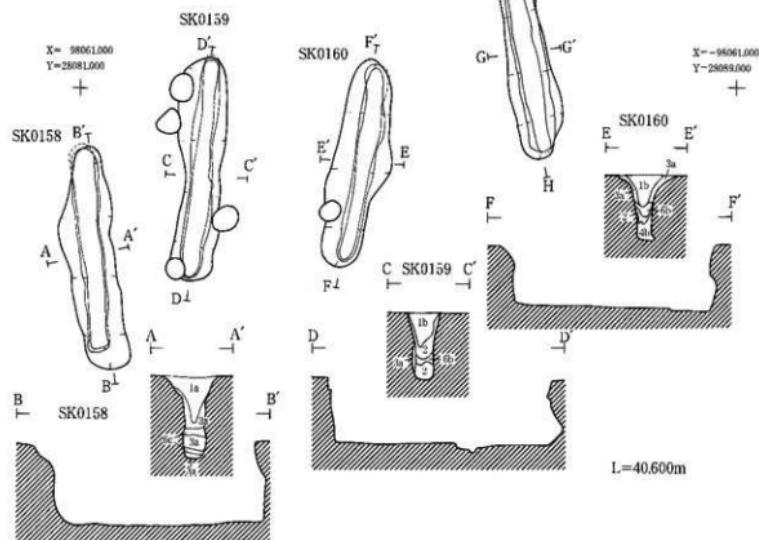
第53図 遺構配置図

たものはすべて細長いタイプの土壙跡であった。さらに、多少のずれはあるもののすべて南北方向が長軸で、調査区西側の旧天神川に向かって東西方向に並列して作られていた。配置の間隔は0.8~8mとまちまちだが、西側ではほぼ1m間隔で10基検出された。Tピットの形状は、開口部の形は同じだが底部で若干の相違がある。壁が中端で外側に入り下端は上端より内側に収まるものと、下端で抉れるタイプである。底面に逆茂木を立てるような小穴の存在は全く確認できなかった。埋土はどれもほぼ同じで、褐色土の下に黒色土が入り、さらにその下に褐色土が入るパターンが基本的な埋土である。SK01124はSD0190と重複しているが、他のTピットに比べて小さく、完成されなかった土壙跡のようである。遺物はいずれのピットからも出土しなかったが、SK0155周辺で石錐が1点出土している。

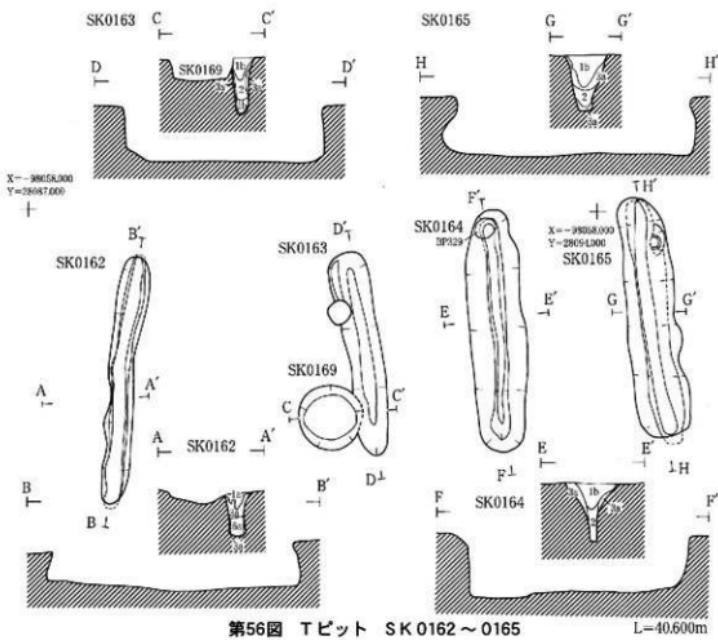
(213)



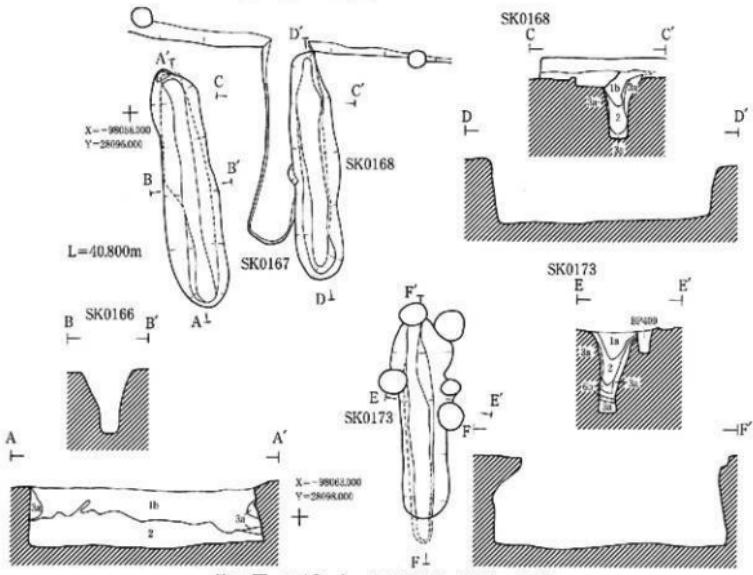
第54図 Tピット SK0155



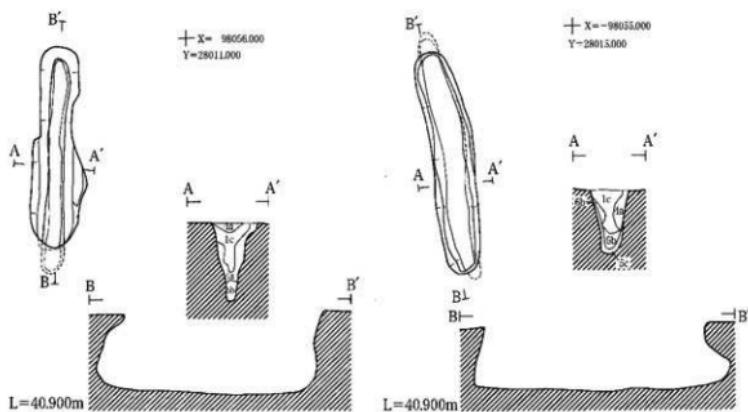
第55図 Tピット SK0158~0161



第56図 Tピット SK0162～0165

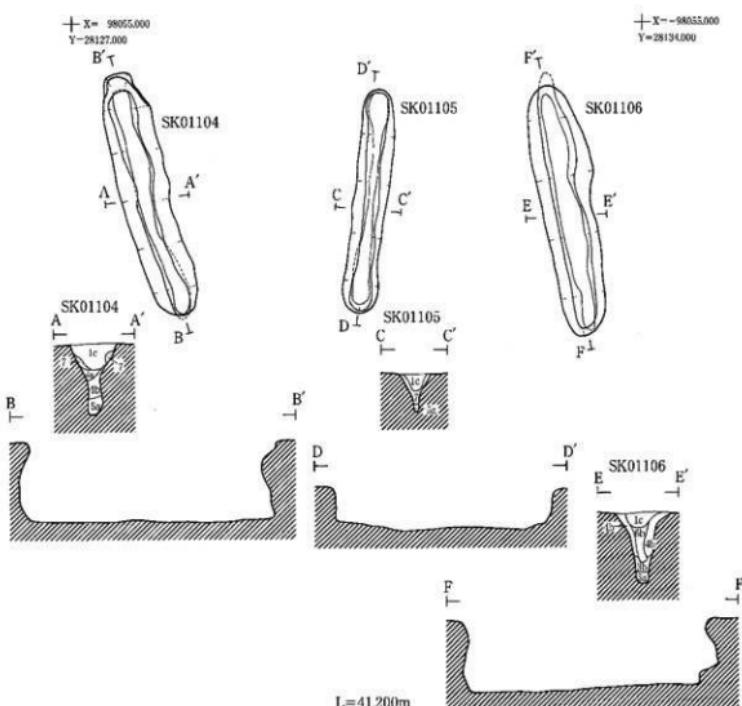


第57図 Tピット SK0166・0168・0173

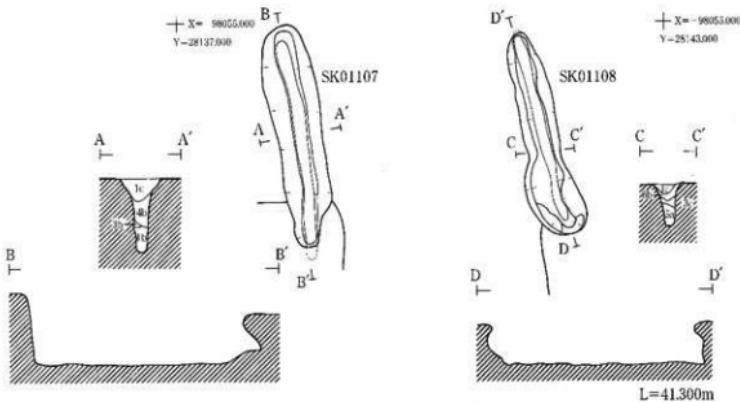


第58図 Tピット SX01101

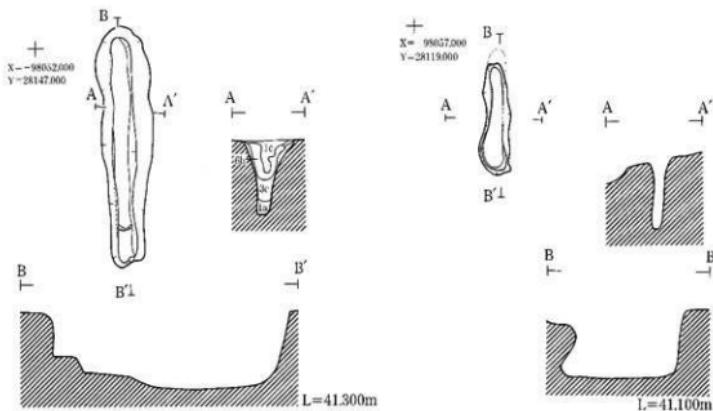
第59図 Tピット SK01102



第60図 Tピット SK01104～01106



第61図 Tピット SK01107・01108



第62図 Tピット SK01109

第63図 Tピット SK01124

Tピット鉢記

- 1a. 103317～31 黒色土焼鉢。
- 1b. 103317～31 黒色土焼鉢。先付上部じる。
- 1c. 103317 黑色土。
2. 黒色土と茎部付近じる。
- 3a. 103310 勾撃土1.074m層鉢上。折れしめる。
- 3b. 103310 勾撃土1.074m層鉢上（一部破壊）。
- 3c. 103310 勾撃土1.074m層鉢上。空筒鉢上内付近じる。
- 4a. 103344～45 黒色土焼鉢。
- 4b. 103344 黒色土焼鉢じる。
- 5a. 103333 黒色土焼鉢。
- 5b. 5aに茎部上部じる。
- 5c. 103334 勾撃土焼鉢。
- 6a. 103329～30 黒色土焼鉢。折れ。
- 6b. 6aに茎部との内側裂じる。
- 6c. 103324 勾撃土と茎部の混合土。



213

第64図 Tピット周辺出土遺物

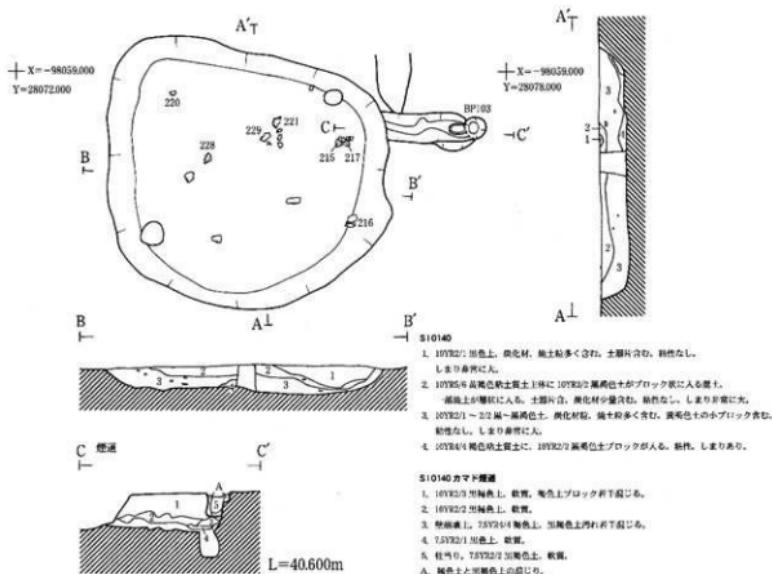
(2) 平安時代

i) 穫穴住居跡

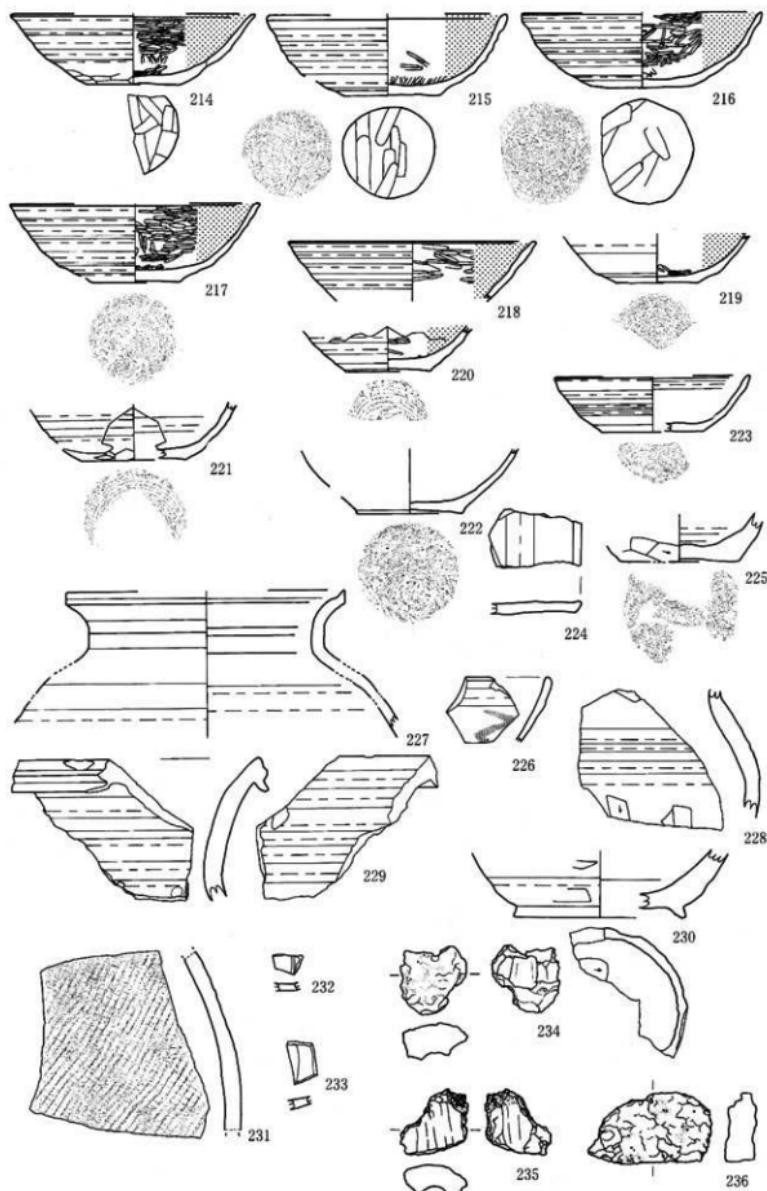
S10140 穫穴住居跡 (第65図・写真図版53)

B区西端寄りに検出した畝穴住居跡であるが、建造途中で放棄され、実際には住居として利用されなかった造構であると考えられる。東西3.4m×南北3.25mの歪んだ隅丸正方形である。床面は地山を掘り込んであるが、深さは20~30cmと一定しない。煙道は北東隅に設けられ、1.05mの長さがあるがカマド本体を作った形跡は見られない。焼上や炭化材なども検出できなかった。煙道自体は40~45cmの深さがあり、煙出し部では75cmにもなる。煙道は北側にSK0156と、また先端部ではBP103と重複している。住居に伴う柱穴はない。SB1-3を構成する柱穴が床面で検出されている。

出土遺物 (第66図・写真図版88) 出土遺物は多く、土師器、須恵器、須恵系土器、縄釉陶器、羽口、鉄滓があり、種類も豊富である。本住居跡は建設途中で放棄されたことから、土器は他のゴミなどとともにここに投棄されたと推定される。遺物はすべて破片である。土師器の比率は70%と高く、壺、甕がある。壺は底部糸切り無調整とヘラケズリ調整の2種がある。内面ミガキは口縁部横位、見込み放射状が基本であるが、217のみ口縁部は連弧状ミガキである。内面は黒色処理されるが、215は非内黒壺である。224の口縁部外面には墨書の一部がみられるが、字形は不明。甕はロク口形成。須恵器は壺、甕、小型甕、高台付甕230、短頸甕227がある。壺は221のみで、底部糸切り無調整、体部下端を不定方向にヘラケズリする。須恵系土器は糸切り無調整で、壺のみである。223は堅緻な焼成で内面はコテ当てで平滑に仕上げる。縄釉陶器にはII 232、椀233がある。色調は皿が透明な若草緑、椀はくすんだ若草緑で、素地段階に内外とも緻密に磨かれる。235は羽口、234と236は鉄滓である。



第65図 S10140 穫穴住居跡



第66図 S10140 穫穴住居跡出土遺物

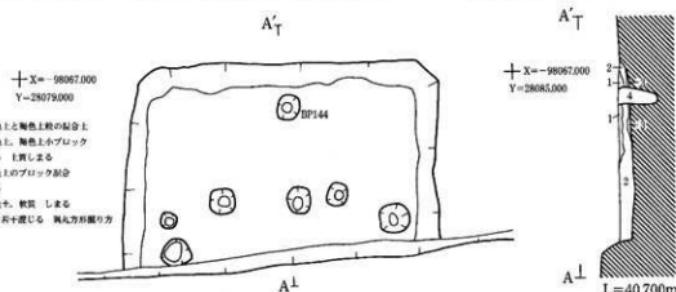
No.	出土地	器種	口径cm	底径cm	基高cm	底面	胎土	焼成	色調	調査		固定場号	固 定 等	備考	
										外面	内面				
214	SH0140 墓土	土師器坏	(15.0)	(5.0)	4.35	ケズリ	やや密 石英含	四い	灰黄褐	ロクロ、ケズリ	ミガキ後黑色處理	66	88		
215	SH0140 墓土	土師器坏	(14.0)	5.8	5	ケズリ 陶軸孔切痕	やや密 石英含	四い	にぶい黃褐	ロクロ		66	88	非内里	
216	SH0140 墓上	土師器坏	(14.0)	(6.0)	4.65	ケズリ 陶軸孔切痕	やや密	普通	にぶい黄褐	ロクロ	ミガキ後黑色處理	66	88		
217	SH0140 墓上	土師器坏	(15.0)	5.6	4.95	回転糸切	やや密	普通	浅黃褐	ロクロ	ミガキ後黑色處理	66	88		
218	SH0140 墓土	土師器坏	(15.0)	—	(3.7)	—	やや粗 石英含 少量含	青褐	ロクロ	ミガキ後黑色處理	66	88			
219	SH0140 墓上	土師器坏	—	(5.0)	(3.1)	糸切痕陶軸孔	やや粗 石英含	固い	青褐	回転ハケズリ	ミガキ後黑色處理	66	88	ミガキ不鮮明	
220	SH0140 墓土	土師器坏	—	(5.2)	(2.8)	回転糸切	陶 石英 含	普通	灰白	ロクロ	ミガキ後黑色處理	66	88	ミガキ不鮮明	
221	SH0140 墓土	酒造器坏	—	6.4	(3.0)	回転糸切	やや密	普通	浅黃褐	ケズリ	ロクロ	66	88		
222	SH0140 墓土	漆底系土器坏	—	6.4	(4.0)	回転糸切	やや密 小石多含	普通	外:灰 内:にぶい青	ロクロ	ロクロ	66	88		
223	SH0140 墓土	漆底系土器坏	(12.0)	(8.0)	3.45	回転糸切	粗、小石 少量含	固い	青	ロクロ	ロクロ	66	88		
224	SH0140 墓上	土師器坏	—	—	(5.6)	—	やや粗 石英含	固い	青	ロクロ	ロクロ	66	88	黒底か	
225	SH0140 墓土	土師器坏	—	(7.0)	(3.0)	回転糸切	粗、石英 含	普通	外:青褐 内:青	ケズリ	ロクロ	66	88		
226	SH0140 墓土	土師器坏	—	—	(6.0)	—	密	固い	青	ロクロ	ロクロ	66	88	被熱により内裏 とぶ	
227	SH0140 墓土	漆底器坏	(17.0)	—	(8.1)	—	やや粗	青	外:青褐 内:灰	ロクロ	ロクロ	66	88		
228	SH0140 墓土	酒造小形器	—	—	(7.0)	—	やや密 石英含	固い	灰	ケズリ、ロクロ	ロクロ	66	88		
229	SH0140 墓上	漆底器坏	—	—	(8.0)	—	粗、小石 少量含	固い	外:オーバー 内:灰	ロクロ	ロクロ	66	88	外表面自然触	
230	SH0140 墓上	漆底器高台盘	—	(10.0)	(4.0)	回転ケズリ	粗、小石 含	固い	黑灰	ロクロ、ケズリ	ロクロ	66	88		
231	SH0140 墓土	漆底器要	—	—	(11.0)	—	やや密	固い	暗青灰	平行タキ	不明	66	88		
232	SH0140 墓土	縦輪陶器底	—	—	(6.0)	—	密	固い				66	88		
233	SH0140 墓土	縦輪陶器底	—	—	(0.9)	—	やや密	固い				66	88		
No.	山 地	器種	長径cm	幅cm	厚さcm	重 量	材 质	固	草叢圖版	そ の 他					
234	SH0140 墓土	鉄滓	4.2	4.1	2.2	28.44	鐵	66	88						
235	SH0140 墓土	羽口	4.0	4.1	1.95	21.86	土質	66	88						
236	SH0140 墓土	鉄滓	4.5	7.7	2.5	118.18	鐵	66	88						

S10145 穫穴住居跡（第67図・写真図版54）

B区西寄り、調査区南壁に接して検出した住居跡で、南半分は調査区の南外側に広がる。現況では東西3.75m×南北(2.45)m、深さは15cm、壁の立ち上がりはなだらかに外傾する。床面に土壌跡や焼土ではなく、カマド位置も不明である。また柱穴を検出したが、この住居に伴うものではなく、すべて住居より新しい掘立柱建物跡を構成する柱穴である。

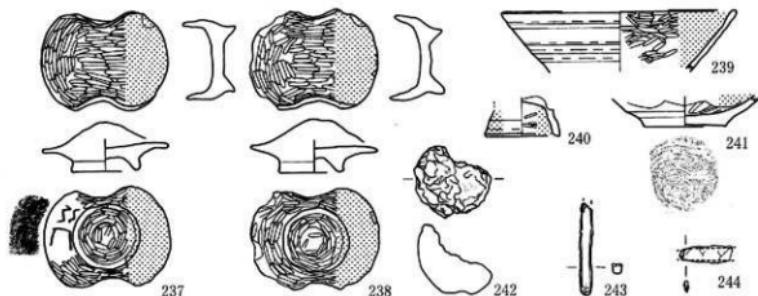
出土遺物（第68図・写真図版88） 出土遺物は少なく、土師器、刀子、鉄滓がある。土器は土師器のみで坏、高台耳皿がある。

坏は底部糸切り無調整、内面は口縁部横位、見込み放射状ミガキで、黒色処理される。237・238・



第67図 S10145 穫穴住居跡

240は高台耳皿で、前2者は完形で調整手法も同じ。内外面とも緻密に磨かれ、黒色処理されるB類土器である。237の外面には直線と波状の線刻がある。鉄製品では刀子244と鉄滓242がある。



第68図 SI0145 穫穴住居跡出土遺物

No.	出 土 地	器 物	口径/cm	底径/cm	高さ/cm	重 量	胎 土	施 装	色 彩	規 格		固形通号	備 考
										外 面	内 面		
237	SI0145 墓土	土師器耳皿	7.6	4.1	1.7		やや硬 石英質	圓い		ミガキ後黒色處理	ミガキ後黒色處理	68	SS 内外黒色、 外側無光
238	SI0145 墓土	土師器耳皿	7.8	4.0	2.4		やや硬	圓い		ミガキ後黒色處理	ミガキ後黒色處理	68	SS 内外黒色
239	SI0145 墓土	土師器耳皿	6.0	—	(3.7)		軟	にがい黄褐色	口クロ	ミガキ後黒色處理	ミガキ後黒色處理	68	SS
240	SI0145 墓土	土師器耳皿	—	5.6	(2.45)		やや硬	圓い		ミガキ後黒色處理	ミガキ後黒色處理	68	SS 内外黒色
241	SI0145 墓土	土師器耳皿	—	5.0	(1.85)		堅軟無光	やや硬	普通	口クロ	ミガキ後黒色處理	68	SS
No.	出 土 地	器 物	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重 量 g	材 質	回	手 先 国 領	その他の			
242	SI0145 墓土	鐵序	4.4	4.7	4.15	6661	鐵	68	SS				
243	SI0145 墓土	鐵序	3.6	6.8	0.6	519	鐵	68	SS				
244	SI0145 墓土	刀子	3.2	10.5	9.3	261	鐵	68	SS				

SI0150 穫穴住居跡、SK0154 土壙跡・SK0170 土壙跡（第69図・写真版図54・55・75）

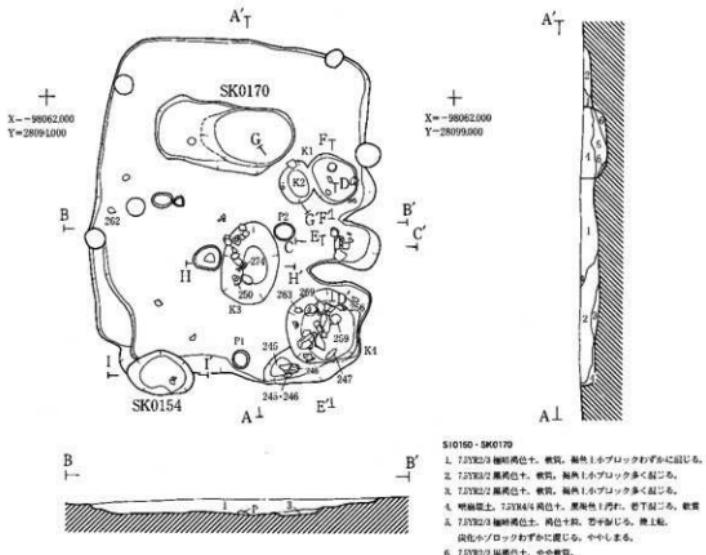
B区中央部に検出した、東カマドの住居跡である。規模は東西3.2m×南北4.1m、検出面からの深さは15cmである。南西壁をSK0154に切られる。床面北側のSK0170もSI0150が埋没した後に作られた土壙跡である。また、いくつかの柱穴群とも重複し、柱穴群が新しい。

カマドは東壁やや南寄りに作られ、右袖と左袖の一部が残っている。煙道はない。焚き口部からは土師器瓦片が出土している。支脚は土器と石を利用している。石製支脚は大きな石を割って使っている。左袖の芯材にも石が使われているが、支脚と同じ種類の花崗岩質の石である。また、カマドの埋土上位には灰白色火山灰と白色粘土が少量含まれていた。

向かってカマドの右手と手前に土壙跡が作られており、埋土からは遺物が多く出土している。向かってカマド右脇灰溜りピット(K4)は円形で開口部径100cm×95cm、深さ27cm、カマド手前灰溜りピット(K3)はやや楕円形で開口部径100cm×80cm、深さ10cmである。カマド左手前には径25cmの範囲で粘土の塊が検出され、その下に45cm×43cm、深さ15cmの土壙跡が1基作られていた(K2)。SK0170の南隣にも65×53cm、深さ10cmの土壙跡を1基検出した(K1)。床面は一部貼り床で、住居に伴うと考えられる柱穴は2個である。

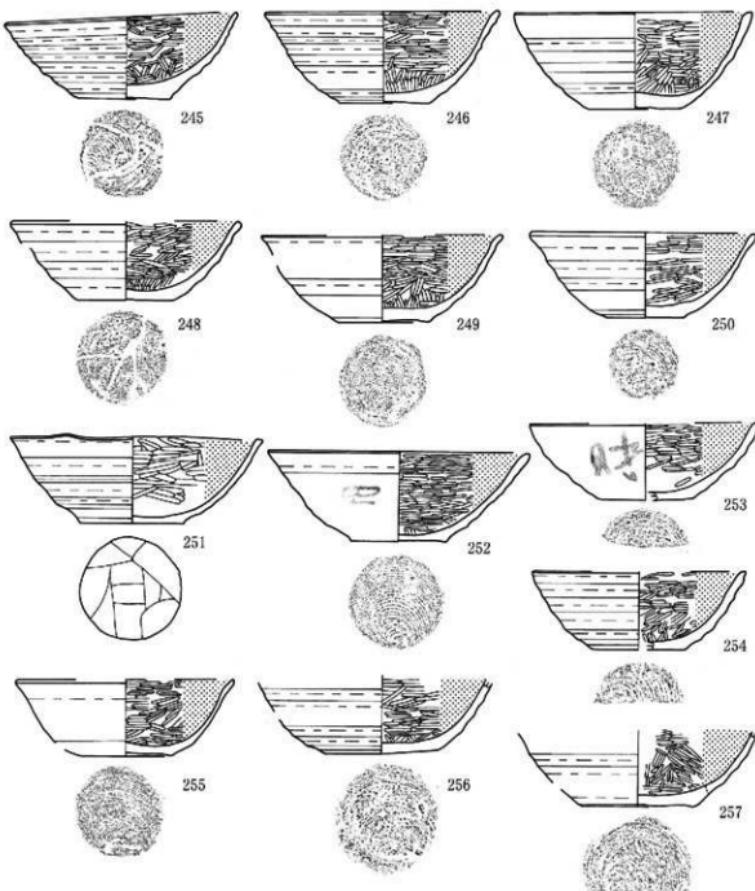
SK0154 土壙跡はSI0150の南壁に重複し、開口部径東西0.8m×南北0.55m、深さ20cmである。埋土は黄褐色ブロック混じりの黒褐色土である。土師器の破片が出土している。

SK0170 土壙跡はSI0150の埋土に掘り込まれており、開口部径東西1.7m×南北0.8mの長方形で、SI0150床面からの深さは20cmある。底面に方形に炭化材が集中する範囲が見られた。土師器の破片が少量出土した。

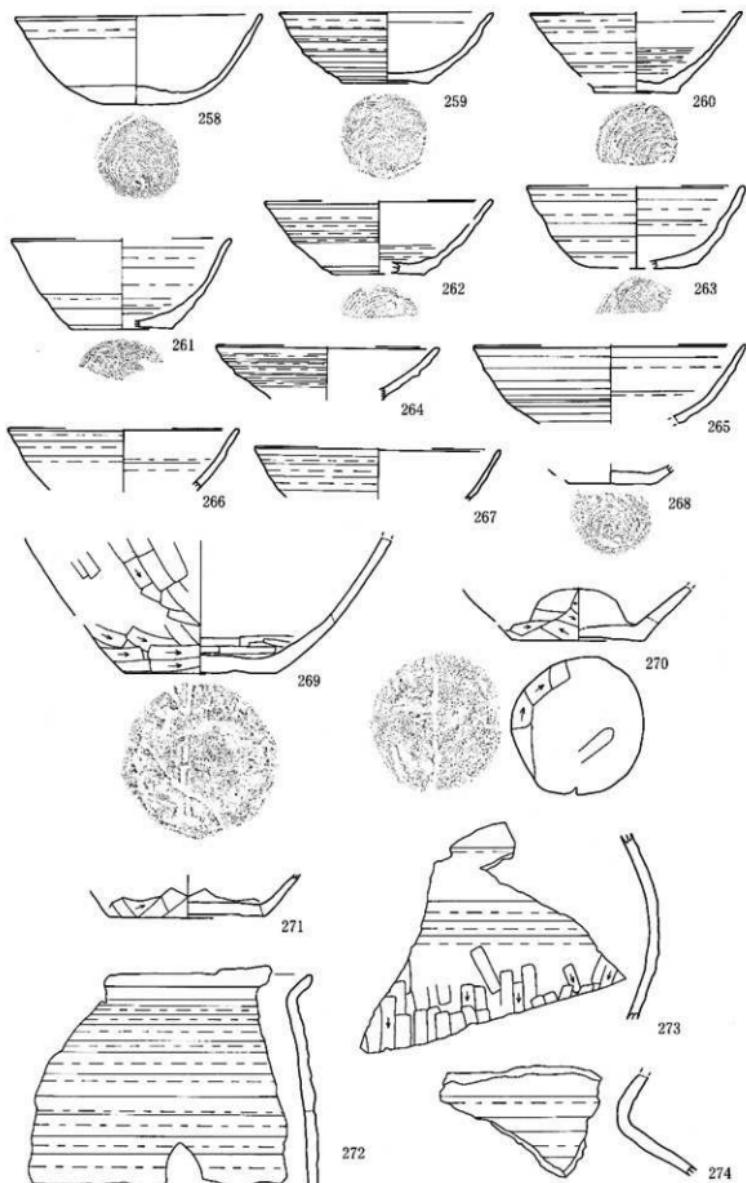


第69図 SK0150 穴式住居跡、SK0154・0170 土壙跡

出土遺物 (第70・71図・写真図版88・89) 出土遺物は土師器、須恵器、須恵系土器がある。比率は土師器 57%、須恵系土器 30%、須恵器 13%である。土師器には坏と甕があり、多くは焼成が良い。坏は糸切り無調整、内面ミガキは口縁部横位、見込み放射状で黒色処理されるが、247は口縁部ミガキが横位と斜位になされ、251は底部一定方向へラケズリ、内面全面にミガキが及ばない坏である。246と249は口径 14.3 ~ 14.6cm の楕形式の土器、253の口縁部外面には「財」が、252には「弓」がそれぞれ墨書きされる。甕 269 ~ 271は底部粘土板で無調整だが、270のみ底部外周をケズリ調整する。後2者は胎土、焼成、手法が同一である。須恵系土器は糸切り無調整で、内面はほとんどが平滑だが、259、265はコテ当てで平滑仕上げとする。須恵器には坏、甕があり、坏は底部糸切り無調整、261は焼成による歪みがある。甕は同一個体。



第70図 S10150 積穴住居跡出土遺物 (1)



第71図 SI0150 積穴住居跡出土遺物 (2)

No.	土 壤	古 時	D1径cm	底深cm	露高cm	底 部	物	土	焼成	色 調	調 量		地図番号	写真	考	
											外 面	内 面				
243	SK0150 地上・K4	上耕跡	142	55	54	回転系切	やや粗 糞合	固い	乾	ロクロ	ミガキ地黒色透輝	70	88			
244	SK0150 地上・K4	上耕跡	143	54	57	回転系切	やや粗 糞合	固い	灰黄褐	ロクロ	ミガキ地黒色透輝	70	88			
245	SK0150 地上・ K3・L	上耕跡	145	57	59	回転系切	やや粗 糞合	普通	にぶい緑	ロクロ	ミガキ地黒色透輝	70	88	外面手掘れ		
246	SK0150 理土	土耕跡	046	58	48	回転系切	やや粗 糞合物多	普通	にぶい緑	ロクロ	ミガキ地黒色透輝	70	89			
247	SK0150 理土・K4	土耕跡	046	55	53	回転系切	密	普通	にぶい黄褐	ロクロ	ミガキ地黒色透輝	70	89			
250	SK0150 地上・ カマド裏面	土耕跡	139	45	53	回転系切	やや粗	普通	にぶい黄褐	ロクロ	ミガキ地黒色透輝	70	89			
251	SK0150 地上・K4	土耕跡	154	53	58	ケズリ	密	普通	にぶい黄褐	ロクロ	ミガキ地黒色透輝	70	89	難なミガキ		
252	SK0150 地上・K4	上耕跡	159	58	54	回転系切	やや粗 糞合石含	固い	黒灰	ロクロ	ミガキ地黒色透輝	70	89	外側墨書き		
253	SK0150 地上・K4	土耕跡	139	50	47	回転系切	やや粗	固い	にぶい黄褐	ロクロ	ミガキ地黒色透輝	70	89	墨脱		
254	SK0150 地上・K4	土耕跡	131	50	48	回転系切	やや粗 糞合石含	固い	綠	ロクロ	ミガキ地黒色透輝	70	89			
255	SK0150 地上・K4	土耕跡	132	54	47	回転系切	砂質 やや粗	普通	にぶい黄褐	ロクロ	ミガキ地黒色透輝	70	89			
256	SK0150 地上・K1	土耕跡	-	68	150	回転系切	近 小石 砂質	固い	にぶい緑	ロクロ	ミガキ地黒色透輝	70	89			
257	SK0150 地上・K4	土耕跡	-	68	147	回転系切	密	固い	にぶい黄褐	ロクロ	ミガキ地黒色透輝	70	89	内面墨脱		
258	SK0150 地上・K4	底底土層跡	152	47	56	回転系切	やや粗	軟質	乾	ロクロ	71	89				
259	SK0150 理土	底底土層跡	152	53	44	回転系切	密	固い	綠	ロクロ	71	89				
260	SK0150K4	底底土層跡	132	53	59	回転系切	やや粗 糞合石含	固い	にぶい緑	ロクロ	71	89				
261	SK0150K3	底底土層跡	032	62	58	回転系切	やや粗	固い	青苔綠	ロクロ	71	89				
262	SK0150 理土	底底土層跡	040	56	55	回転系切	粗 糞合石含	普通	外：薄 内：青	ロクロ	71	89				
263	SK0150K4	底底土層跡	030	62	51	回転系切	やや粗 糞合石含	固い	青苔	ロクロ	71	89				
264	SK0150 地上	底底土層跡	030	-	633	回転系切	やや粗 糞合石含	固い	青苔	ロクロ	71	89				
265	SK0150 地上・K3	底底土層跡	069	-	430	無	石英 等々	普通	淡黃褐	ロクロ	71	89				
266	SK0150 地上・K3	底底土層跡	042	-	633	無	やや粗 糞合石含	固い	綠	ロクロ	71	89				
267	SK0150 地上	底底土層跡	069	-	613	無	無	秋葉	綠	ロクロ	71	89				
268	SK0150 地上	底底土層跡	-	53	120	回転系切	やや粗	固い	青苔	ロクロ	71	89				
269	SK0150 地上・K3	上耕跡	-	94	840	點土板	やや粗 糞合石含	固い	青苔	ロクロ	71	89	外側墨脱			
270	SK0150 地上・K3	上耕跡	-	82	1259	點土板・ タケリ	やや粗 糞合石含	固い	青苔	ケズリ	71	89	外側墨脱			
271	SK0150K1	上耕跡	-	95	1250	點土板・ タケリ	やや粗 糞合石含	固い	青苔	ケズリ	71	89				
272	SK0150 地上	土耕跡	-	-	1322	無	やや粗 糞合石含	軟質	綠	ロクロ	71	89	内面一端墨脱			
273	SK0150 地上・ カマド右地・K3	底底土層	-	-	1130	無	やや粗 糞合石含	固い	暗灰	ロクロ・ケズリ	71	89	外面自然崩			
274	SK0150 地上	底底土層	-	-	623	無	やや粗 糞合石含	固い	緑灰	ロクロ	71	89	外側自然崩			

SI0151 積穴住居跡、SK0172 土壌跡（第72図・写真図版56・57・76）

B区東端に検出した住居跡で、規模は東西4.1m×南北4.6m、深さは20cmである。南東にSK0172と、北壁ではBP465との重複がある。SK0172はSI0151が埋没した後に掘り込まれたものである。

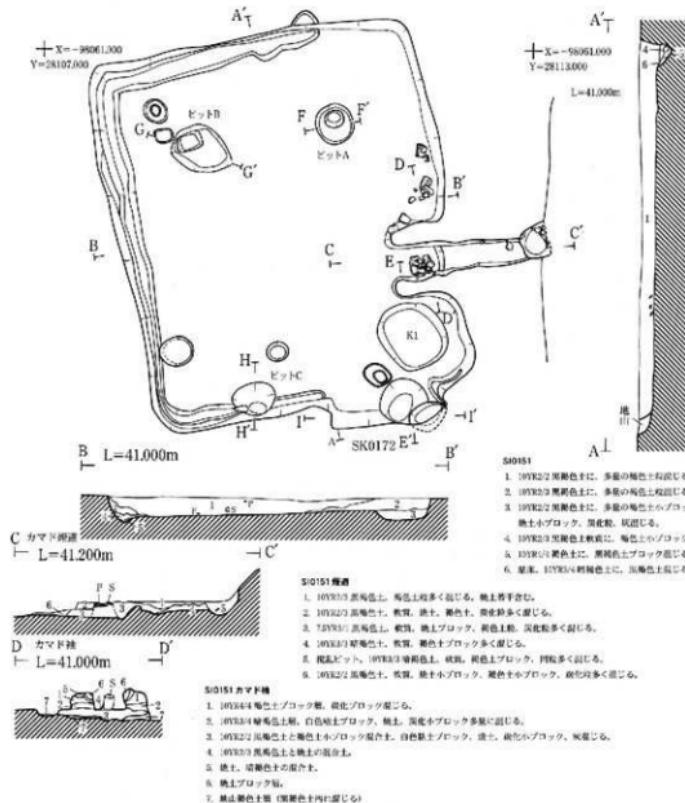
床面は黒褐色混じりの地山。西壁と、北、南壁際の一部に周溝がめぐる。溝幅約20cm、深さ5cmである。床面には貼り床が施されており、床面下から柱穴状ピットを1基(ピットC)検出した。南壁東寄りは新しく掘り込まれていて、立ち上がりがはっきりしない。

カマドは東壁や南寄りに作られており、煙道の長さは1.3m、深さは10cmである。煙出し部は深さが15cm、内部から土器片が出土している。支脚は石製で、細長い石を途中で切断して使っており、被熱している。焚き口部からは多くの土器片が出土し、カマドの芯材に土器が使われていたことが窺える。袖は地山で構築されるが、白色粘土も少量含まれていた。向かってカマド右手に開口部径100cm×90cm、深さ40cmの灰溜りの土壌跡が1基あり(K1)、埋土下層には焼土ブロックが含まれている。

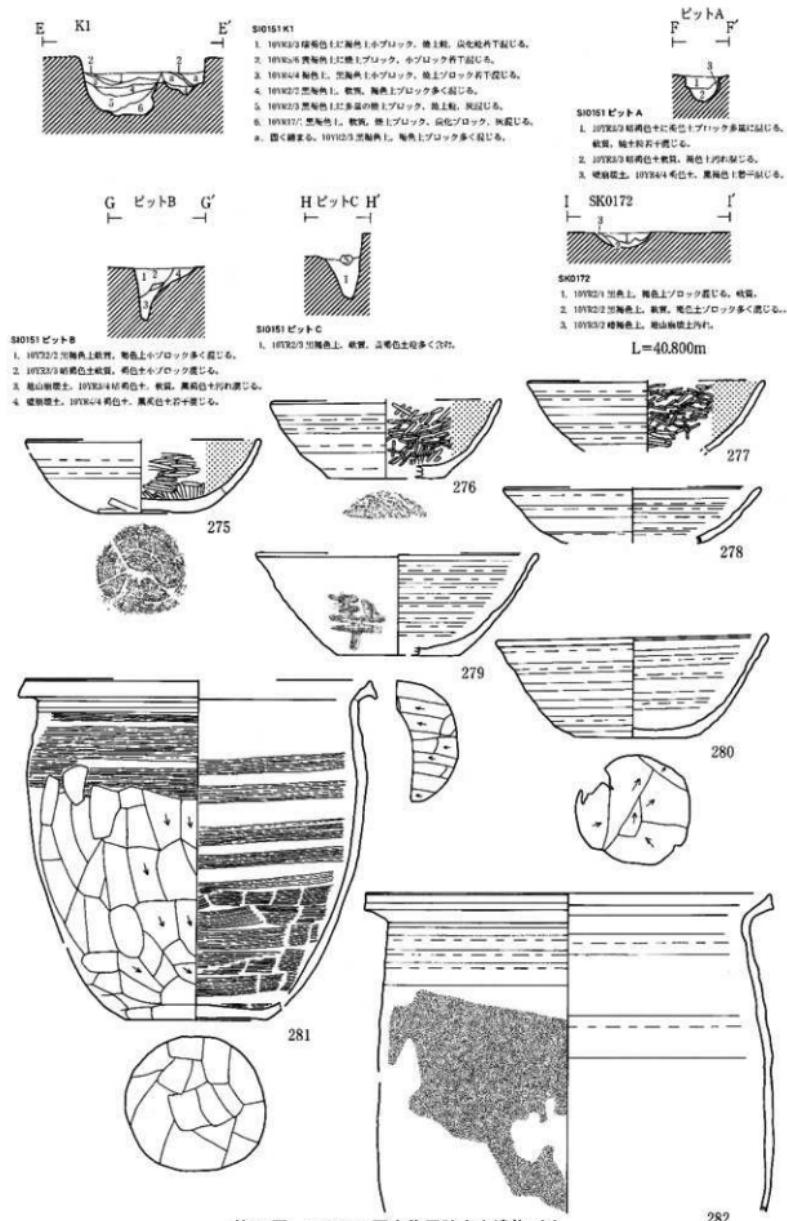
北側にはピットを2基(A、B)検出した。

SK0172 土壙跡は住居跡SI0151の南壁に重複し、SI0151精査途中で気づいたため全容は明らかではないが、住居よりも新しい構造である。開口部は東西0.75m、底面径不明、深さ20cmである。埋土は褐色土混じりの黒褐色土である。285土師器壺の口縁部が出土している。

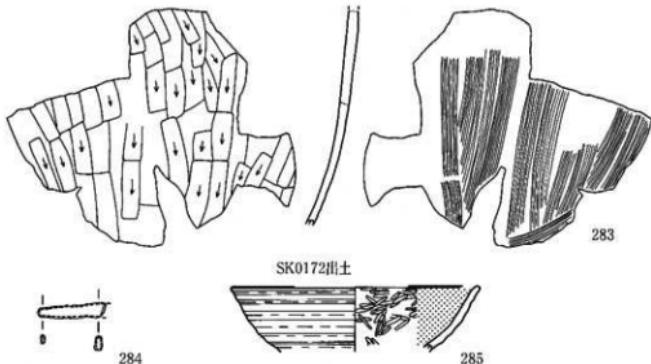
出土遺物(第73・74図・写真図版90) 出土遺物は少なく、土師器、須恵器、刀子があるが、大半は土師器ロクロ甕である。甕は外面に煤の付着する例が多く、調整は外面ケズリ、内面ロクロ搔き目281、ナデ282、ハケメ283などがある。壺は糸切り無調整、内面ミガキは口縁部横位、見込み放射状で黒色処理される。須恵器は壺278～280があり、279、280の底部は全面一定方向ケズリ調整で、279外面部口縁部には「圭」字に似た墨書きがある。今次調査で須恵器の墨書きある例はこれのみである。284は刀子であろう。



第72図 SI0151 壁穴住居跡、SK0172 土壙跡



第73図 SK0151 壁穴住居跡出土遺物(1)

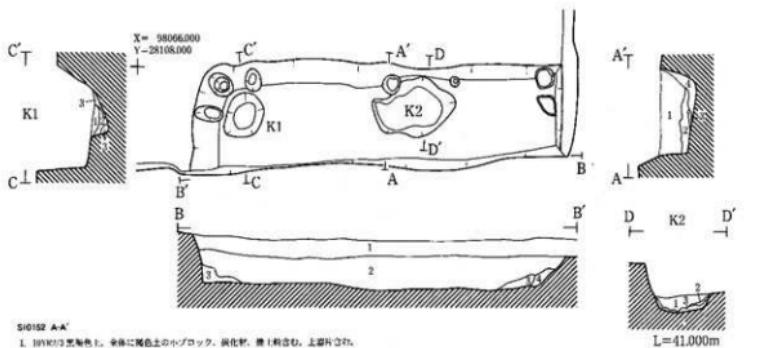


第74図 SI10151 穫穴住居跡出土遺物 (2)

No.	出 土 地	基 構	口 隆 cm	底 隆 cm	高 度 cm	底 面	地 土	構 成	色 調	調 整		回復序号 回 写真	備 考	
										外 面	内 面			
273	SI0151 壁上	土壁部分	14.2	3.6	4.5	周輪系切	やや粗	圓い	にぶい黒	ロクロ・ケズリ	ミガキ後深色處理	73	90	外面塗付着
276	SI0151K1	土壁部分	14.0	17.0	4.75	周輪系切	粗 石英	圓い	浅灰黒	ロクロ	ミガキ後黒色處理	73	90	外面塗付着
277	SI0151 カマド南辺	土壁部分	14.6	—	4.55	前	圓い	にぶい黒	ロクロ	ミガキ後深色處理	73	90	外面手掛け	
278	SI0151 壁上	土壁部分	15.6	—	3.40	やや粗	石英含	普通	灰白	ロクロ	ロクロ	73	90	
279	SI0151K1, 北壁間隔中	窓櫛部分	17.1	7.0	6.25	ケズリ	やや粗	心形含	圓い	ロクロ	ロクロ	73	90	外面塗着
280	SI0151 壁上, カマド北端	土壁部分	16.6	7.0	6.4	ケズリ	やや粗	石英含	外:灰白 内:灰	ロクロ	ロクロ	73	90	
281	SI0151 壁上, カマド	土壁部分	21.0	20.75	2.75	ケズリ	粗	石英含	普通	ハケメー・ケズリ	ハケメ	73	90	外面塗付着
282	SI0151 壁上, カマド	土壁部分	21.8	—	(19.65)	—	中や粗	普通	灰黄	ロクロ・ケズリ	ロクロ・ナデ	73	90	外面塗付着
283	SI0151 壁上, 植出し	土壁部分	—	(13.3)	—	やや粗	石英多含	普通	にぶい黒	ケズリ	ハケメ	74	90	外面塗付着
No.	出 土 地	基 構	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重 量 g	石 貨	回 写真	回復版	そ の 他	回復序号 回 写真	備 考		
284	SI0151 壁上	刀子	4.1	1.0	0.4	342	—	24	90					
No.	出 土 地	基 構	口 隆 cm	底 隆 cm	器高 cm	器 高	地 土	構 成	色 調	調 整		回復序号 回 写真	備 考	
										外 面	内 面			
285	SK0172 土上	土解部分	13.2	—	(4.05)	—	やや粗	圓い	普通	ロクロ	ミガキ後深色處理	74	90	

SI10152 穫穴住居跡 (第75図・写真図版57・58)

住居跡 SI10151 のすぐ南隣に検出した住居跡で、大部分は南側調査区外に伸びている。検出範囲では東西 4.3 m × 南北 1.3m あり、比較的大きな住居跡であると推定できる。深さは 40cm。中央部床面と北西隅に土壤跡がある。中央部の土壤跡は不整形で 100cm × 70cm、深さ 25cm。北西隅の土壤跡は 55cm × 45cm、深さ 20cm である。また、北西隅に柱穴状ピット 3 個と重複する。ピット群のほうが新しい。出土遺物 (第 75 図・写真図版 90) 出土遺物は少なく、ほとんどが土師器で壺、高台壺、鉢、甕がある。壺の底部は糸切り無調整と全面不定方向ケズリとがある。内面調整、黒色処理は他の例と同様である。290 は外面に墨痕あるが字形は不明。288 は見込みに「×」を 5 つ連ねた線刻がある。291 は高台壺の高台部で高台内を黒色処理する。鉢 292 は底部全面ケズリ調整で、内面は横位と放射状のミガキが施される。

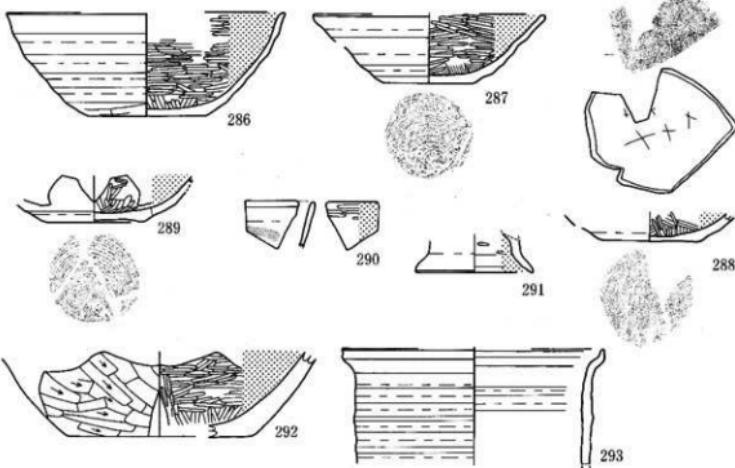


S10152 AA'

1. 10YR2/2 黄褐色土。全体に褐色土の小ブロック。炭化物、根、木含む。上部片付か。
粘性なし。しまりあり。
2. 10YR2/3 黑褐色土。褐色土層。無化物少量含む。粘性なし。しまりあり。
3. 10YR2/3 黑褐色土。褐色土層。無化物含む。粘性あり。しまり弱。
4. 10YR2/3 黑褐色土。褐色土やや多く含む。(ブリック) 下位に地層少部分含む。無化物少量含む。
粘性。しまりやや弱。

S10152 BB'

1. 10YR2/1 黄褐色土。(P冲土)
2. 10YR2/2 黑褐色土。上部はやや軟弱。全体に褐色土層が散在する。
3. 10YR2/2 黑褐色土。黄褐色土小ブロック多く混じる。やや軟弱。
4. 10YR2/2 黑褐色土。軟弱。褐色土小ブロック若干混じる。



第75図 S10152 穫穴住居跡

No.	出土地	層 標	口径cm	底径cm	高さcm	表 部	斜 上	地 域	名 称	調 査			() は推定地、残存認定
										外 面	内 面	回復地帯	
286	S10152 内	土師器跡	(16.0)	7.0	6.3	ケツリ	やや粗 石英含	普通	にぶい黄褐	ロクロ・ケツリ	ミガキ後黒色處理	75 90	
287	S10152 地上	土師器跡	(14.0)	6.1	4.2	圓軸形切	やや粗	普通	にぶい黄褐	ロクロ	ミガキ後黒色處理	75 90	
288	S10152 地上	-	(6.8)	(3.0)	1.8	圓軸形切	細	にぶい黄褐	ロクロ	ミガキ後黒色處理	75 90	内側(×××) 標準地	
289	S10152 地上	土師器跡	-	5.8	(2.6)	圓軸形切	やや粗	普通	西黄褐	ロクロ	ミガキ後黒色處理	75 90	人きり工具で 削いたガキ
290	S10152 地上	土師器跡	-	-	(2.0)	圓軸形切	細	にぶい黄褐	ロクロ	ミガキ後黒色處理	75 90	外側留着	

No.	地 帯	種 種	口径cm	底径cm	壁高cm	床 部	床 上	構成	色 製	断面		断面積cm ²	備 考	
										外 面	内 面			
291	SH052 地土	土師器窓 台脚	—	(7.2)	2.4	やや厚	普通	にぶい黄褐色	ロクロ	黑色處理	75	90	ミガキ不鮮明	
292	SH052 地土	土師器体	—	(11.2)	(5.2)	ケズリ	やや粗 石密合	普通	にぶい橙	ケズリ	ミガキ後黑色處理	75	90	
293	SH052 地土	土師器裏	(16.0)	—	(7.1)	やや粗 石密合	普通	浅黃褐色	ロクロ	ロクロ	75	90		

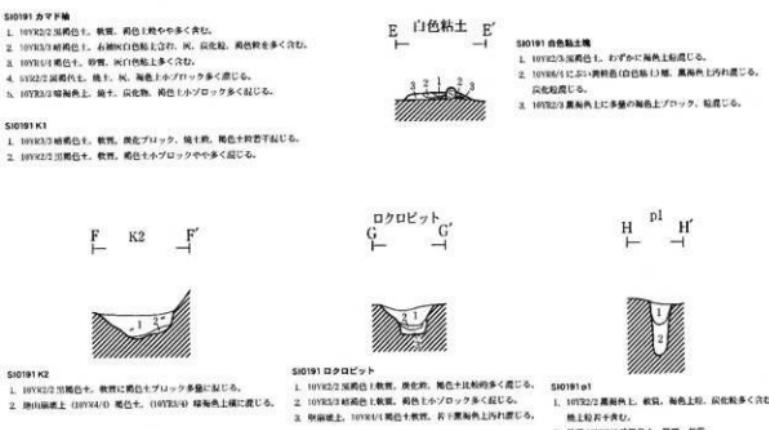
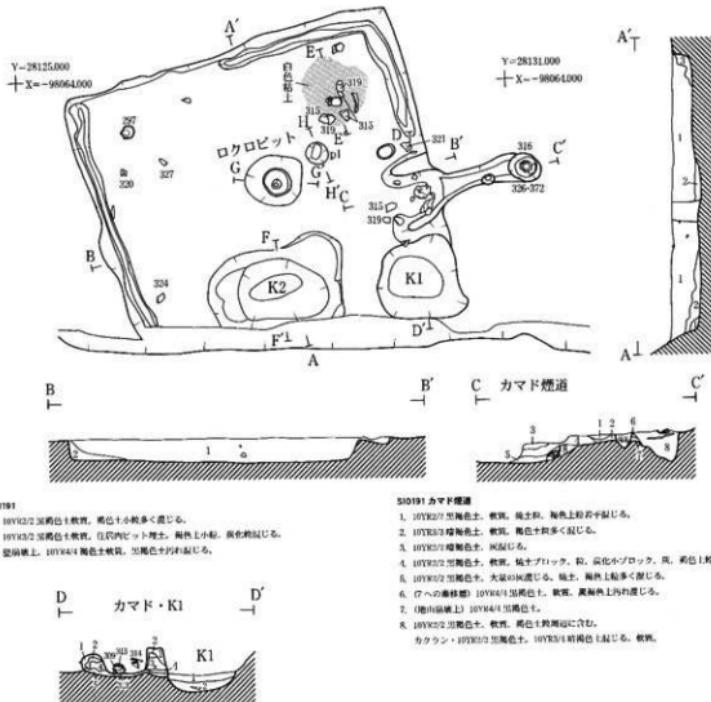
S10191 穫穴住居跡（第76図・写真図版58～60）

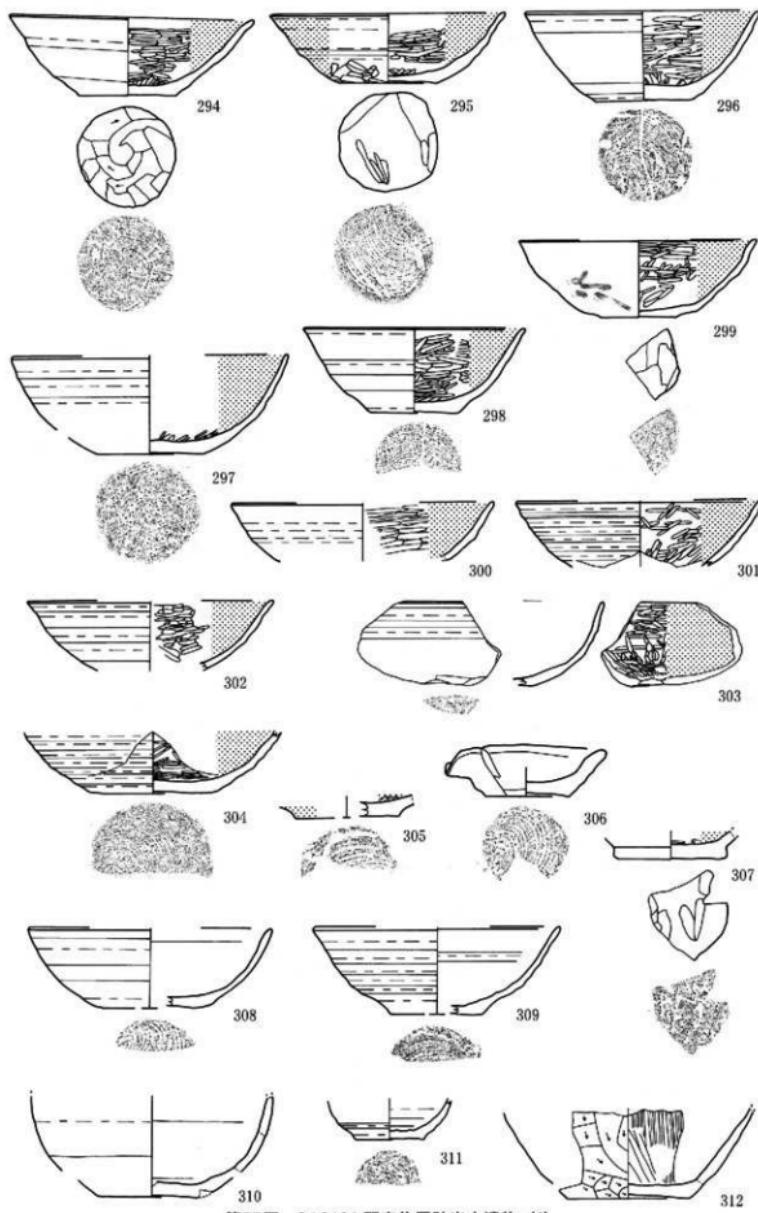
C区南端に検出した東カマドの竪穴住居跡である。一部南側調査区外に伸びている。規模は東西4.15m×南北4.0m、深さ20cm。西壁際に幅10cm、深さ4cmの、北東角に幅20cm、深さ4cmの周溝がみられる。床面全体に貼り床が施されている。

床面中央には、底面に小孔を持つ土壤跡が検出され、ロクロを掘え付けるための土壤跡、すなわちロクロピットと判断した。開口部径30cm、底部径25cm、深さ20cmの底面の中央に径10cm、深さ20cmの小孔が穿たれている。粘土などで固めた様子はなかった。さらに、床面北東部には白色粘土の塊も径80cmの範囲で検出され、この中に土器や石も混じっていた。

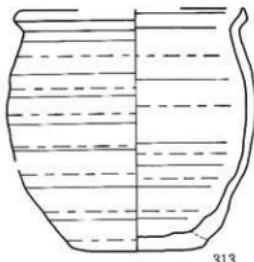
カマドは東壁やや南寄りで、煙道は1.2m、煙出しは幅35cm、深さ30cmで、土器が出土している。袖の残りはよい。この住居の特徴のひとつは、カマドの支脚として土師器窓のほかに土師器壺を何枚も重ねて使っているところにある。向かってカマド右手には開口部径95cm×95cm、深さ35cmのやや方形、カマド手前には開口部径120cm×100cm、深さ20cmの楕円形の灰溜り土壤跡を検出した。(K1、K2) ロクロピットの東に深さ60cmの柱穴を検出した。深い柱穴だが、住居跡に伴うかは不明である。床面には他に柱穴はなかった。

出土遺物（第77～80図・写真図版91・92）出土遺物は多く、土師器、須恵器があり、器種も豊富である。ほかに磨石がある。主にカマド内およびその周辺から集中して出土した。支脚に使われた土師器は壺294、小型甌317、313、須恵器壺309などがある。294は底部糸切り後、不定方向ケズリ調整、317の底部もケズリ調整されるが、313は糸切り無調整である。309は還元されない焼成不良品で、須恵器壺はこれのみである。325、326は煙道出土の須恵器大甌片である。埋土出土には土師器では壺、片口土器、甌がある。壺の底部は糸切り無調整と不定方向ケズリとがある。内面調整、黒色処理は他の例と同様であるが、294、295、298の口縁部は速弧状ミガキである。305は内外黒色のB類土器であるが、外面のミガキは無い。297は口径16.8cmの楕形式、299外面には字形不明の墨書がある。306は淡黄色の片口土器で内面はコテ当て平滑仕上げ。器壁が厚く須恵系土器の可能性もある。甌の大半は底部粘土板無調整で外面は縱方向のケズリが行われる。311は小甌のミニチュア土器で瓶の可能性がある。307は非ロクロ甌で、内面はミガキ後ていねいな黒色処理がなされる。327は磨石・敲石である。

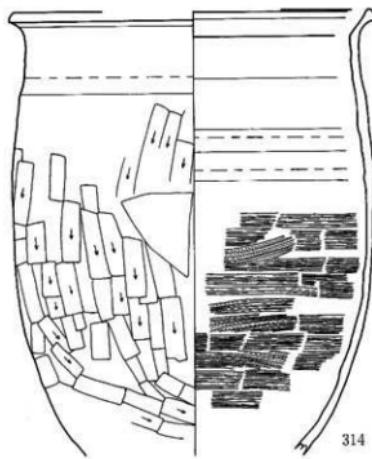




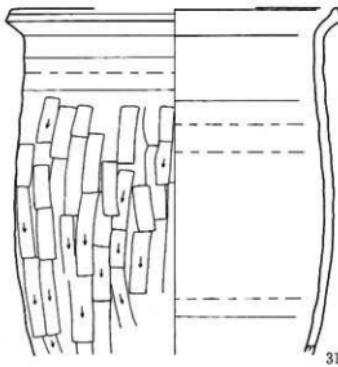
第77図 SI0191 竪穴住居跡出土遺物 (1)



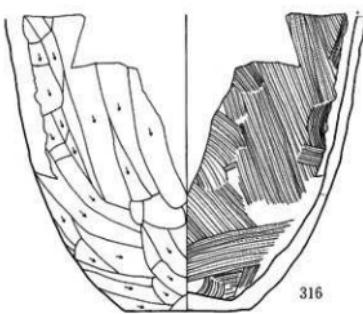
313



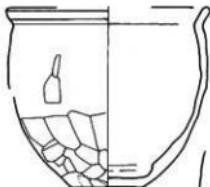
314



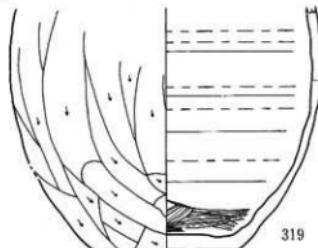
315



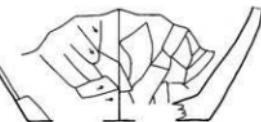
316



317

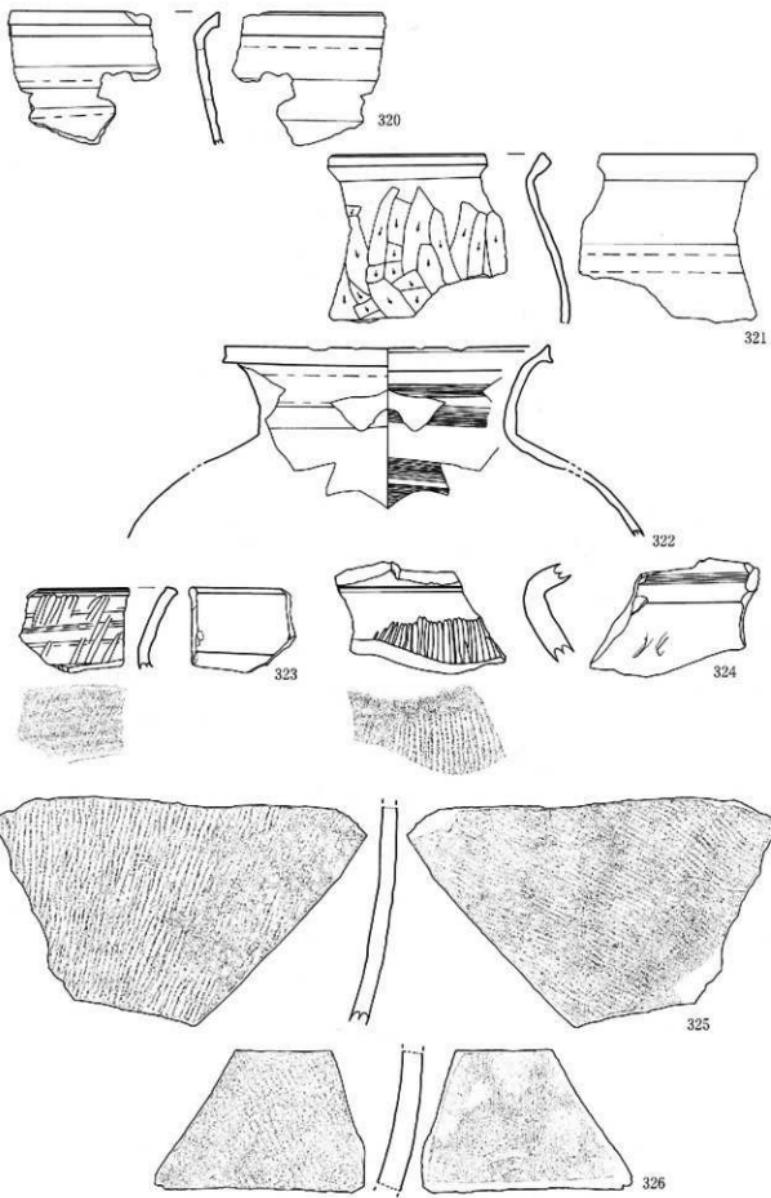


319

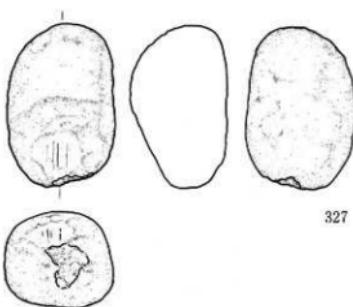


318

第78図 S10191 壁穴住居跡出土遺物 (2)



第79図 S10191 竪穴住居跡出土遺物（3）



327

第80図 S10191 穫穴住居跡出土遺物 (4)

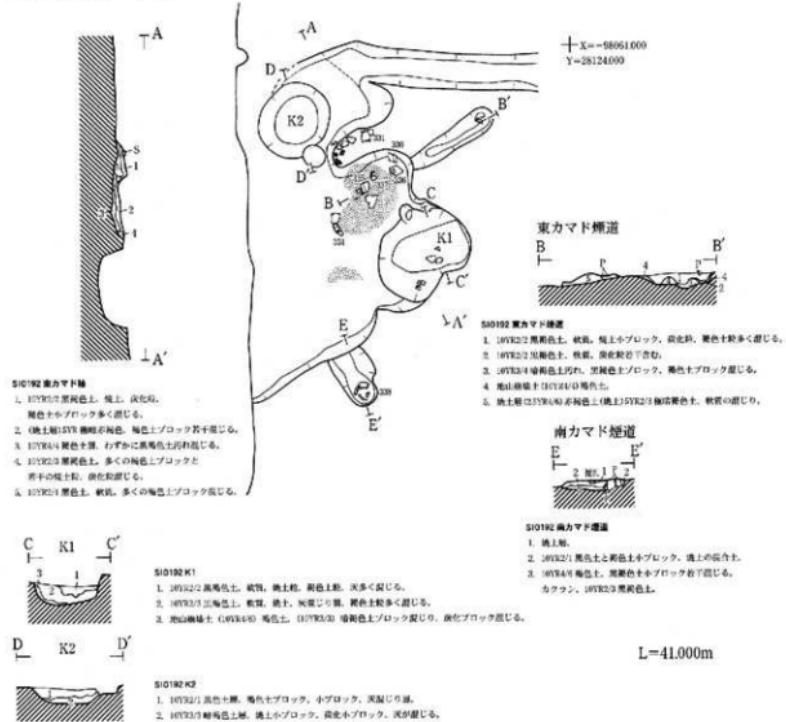
No.	出上地	器種	口径cm	底径cm	高さcm	底溝	底	底成	色調	調査		回収番号	参考	
										外観	内面			
294	S10191 カマド支脚	土師器环	15.0	6.9	5.0	切削鋸ケズリ	やや密合	圓い	黒	ロクロ	ミガキ後黑色處理	77	91 内外面塗付着	
295	S10191 土	土師器环	14.3	5.9	4.85	回転鋸切縁 タナリ	やや密合	圓い	黒	ロクロ→ケズリ	ミガキ後黑色處理	77	91	
296	S10191 地土、ロクロ ビット	土師器环	14.3	5.9	5.5	回転鋸切縁	やや密合	圓い	にぶい黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	77	91 内面一部擦れ	
297	S10191 地土	土師器环	6.88	6.5	6.0	回転鋸切縁	粗、小石 含	圓い	黒	ロクロ	ミガキ後黑色處理	77	91 内外面塗付着	
298	S10191 地土	土師器环	13.6	5.2	5.2	回転鋸切縁	粗、小石 含	圓い	にぶい黒	ロクロ	ミガキ後黑色處理	77	91	
299	S10191 地土	土師器环	6.40	(4.0)	4.75	回転鋸切縁 ケズリ	やや密合	圓い	にぶい黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	77	91 内面擦れ	
300	S10191 カマド	土師器环	6.12	-	6.85	-	やや粗	圓い	外：棕	ロクロ	ミガキ後黑色處理	77	91	
301	S10191 カマド、地土	土師器环	6.20	-	6.12	-	やや密合	圓い	黒道	ロクロ	ミガキ後黑色處理	77	91	
302	S10191 土	土師器环	12.6	-	(4.35)	-	密	圓い	黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	77	91	
303	S10191 地土	土師器环	-	-	5.15	回転鋸切縁	やや粗	圓い	浅黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	77	91	
304	S10191 土	土師器环	-	(2.6)	0.85	回転鋸切縁	粗	圓い	浅黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	77	91	
305	S10191 土	土師器环	-	(6.2)	0.31	回転鋸切縁	やや粗	圓い	浅黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	77	91	
306	S10191 地土	片口土器	3.8	5.3	3.2	回転鋸切縁	粗、石英 含	圓い	黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	77	91	
307	S10191 地土	土師器環	-	(7.6)	(1.7)	ケズリ	粗、小石 含	圓い	浅黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	77	91	
308	S10191 地土	土師器環	(4.9)	6.0	4.95	回転鋸切縁	やや粗 石英含	圓い	浅黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	77	91 暖熱で内面とぶ	
309	S10191 カマド支脚	泥芯器環	15.2	6.8	5.35	回転鋸切縁	やや粗	圓い	浅黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	77	91	
310	S10191 地土	土師器環	-	6.5	6.2	粘土塊→ 黒斑	粗、小石 含	圓い	黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	77	91 尊敬者	
311	S10191 地土	土師器環	-	(4.2)	2.55	回転鋸切縁	粗、小石 含	圓い	外：明黄色 内：こぶし	ロクロ	ロクロ	77	91	
312	S10191 地土	土師器環	-	7.5	(5.5)	粘土塊→ 黒斑	粗、小石 含	圓い	外：明黄色 内：こぶし	ケズリ	ハケメ	77	91	
313	S10191 カマド支脚、 煙草	土師器環	(13.8)	8.0	16.3	回転鋸切縁	やや粗 石英含	圓い	外：明黄色 内：灰白	ロクロ	ロクロ	78	91 内外面塗付着	
314	S10191 地土、カマド 支脚	土師器環	22.7	-	27.0	-	やや粗 石英含	圓い	浅黄緑	ロクロ→ケズリ	ロクロ・ハケメ	78	91 内外面塗付着	
315	S10191 地土、ロクロ ビット	土師器環	(23.0)	-	(23.0)	-	粗、小石 含	圓い	浅黄緑	ロクロ・ケズリ	ロクロ	78	91	
316	S10191 地土、地土	土師器環	-	7.7	(18.0)	粘土塊→ タナリ	粗、小石 含	圓い	青緑	ケズリ	ロクロ→ハケメ	78	92 内外面塗付着	
317	S10191 カマド支脚、 煙草	土師器環	(12.5)	4.5	11.05	ケズリ	粗、石英 含	圓い	外：青緑 内：灰白	ロクロ→ケズリ	ロクロ	78	92 内外面塗付着、 外側に擦れ	
318	S10191 地土	土師器環	-	(11.2)	(6.9)	ケズリ	粗、小石 含	圓い	青緑	浅黄緑	ケズリ	ケズリ	78	92
319	S10191 地土	土師器環	-	8.8	(15.05)	粘土塊→ 黒斑	やや粗 石英含	圓い	青緑	内：淡青緑	ケズリ	ロクロ→ハケメ	78	92 内面塗付着
320	S10191 地土	土師器環	-	-	0.95	-	粗、小石 含	圓い	青緑	粗	ロクロ	ロクロ	78	92
321	S10191 地土	土師器環	-	-	16.35	-	粗、小石 含	圓い	青緑	ロクロ→ケズリ	ロクロ	78	92	
322	S10191 地土	土師器環	-	-	0.95	-	粗、石英 含	圓い	外：淡青緑 内：深青緑	ロクロ	ロクロ	78	92 自然緑	
323	S10191 地土	泥芯器環	-	-	0.55	-	粗	圓い	外：深青緑 内：深青緑	タタキ→ロクロ	タタキ	79	92	
324	S10191 地土	泥芯器環	-	-	0.29	-	粗	圓い	外：にぶい青 内：青緑	タタキ	タタキ	79	92	
325	S10191 鰐骨	泥芯器環	-	-	0.23	-	粗	圓い	オリーブ黒	タタキ	タタキ	79	92	
326	S10191 横浜	泥芯器環	-	-	0.23	-	粗	圓い	青緑	タタキ	ハケメ	79	92	
No.	出上地	器種	直径cm	厚さcm	深度cm	重量g	石質	周	写真回数	その他				
327	S10191	礫石	10.0	6.7	5.5	560.43	-	80	92					

SI0192 穹穴住居跡 (第81図・写真図版60・61)

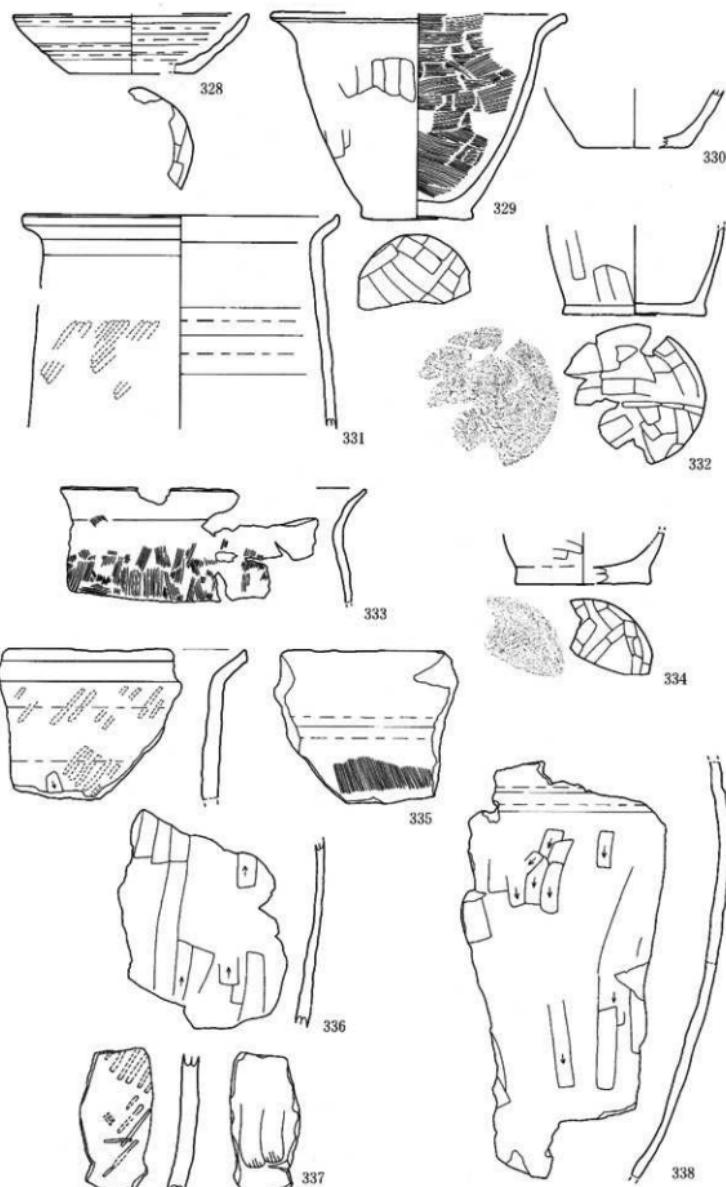
住居跡 SI0191 の西側にあり、堀跡 SD0190 に西半部を破壊される遺構であるが、削平が激しく北壁はほとんど立ち上がらない。規模は推定で $3.4m \times 3.35m$ 前後、深さは 20cm ある。検出段階で焼土が一面に広がっていた。煙道は東と南に認められ、カマドに時期差があるとすれば、残りがよい東カマドが新しいと考えられる。東カマドの煙道は長さ 1.15m、煙出し部の深さは 4cm、左袖がわずかに残存し、焚き口付近には焼土が広がり土器が出土した。南カマドはカマド本体の痕跡はなく煙道だけが残っており、長さ 0.7m ある。煙出し部と思われる部分から土師器甕が出土している。(338)

凹凸のある床面には東カマドの両脇に灰溢りの土壤跡がある。向かって左手の土壤跡は開口部径 95cm × 85cm、深さ 20cm(K2)、右手の土壤跡は開口部径 120cm × 100cm、深さ 20cm(K1) で、土器が出土している。柱穴群が検出されたが、SI0192 に伴うかは不明である。

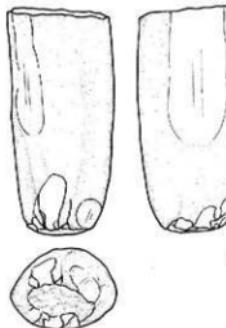
出土遺物 (第82・83図・写真図版92・93) 住居跡の削平で出土遺物も少ない。土師器、須恵器、磨石がある。図化できたのは上師器は甕、須恵器は壺がある。甕はロクロと非ロクロ成形とがある。前者は 331、337 が外面斜位の平行叩き、内面ロクロナデ、指ナデ調整。後者には 329、332、333、334 があり、333 は外面胴部に幅 1cm 前後の粘土紐作り痕をとどめる。壺 328 は底部ケズリ調整である。339 と 340 は磨石である。



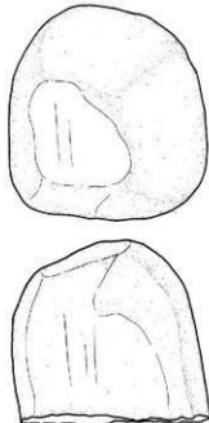
第81図 SI0192 穹穴住居跡



第82図 S10192 積穴住居跡出土遺物 (1)



339



340

第83図 SI0192 積穴住居跡出土遺物 (2)

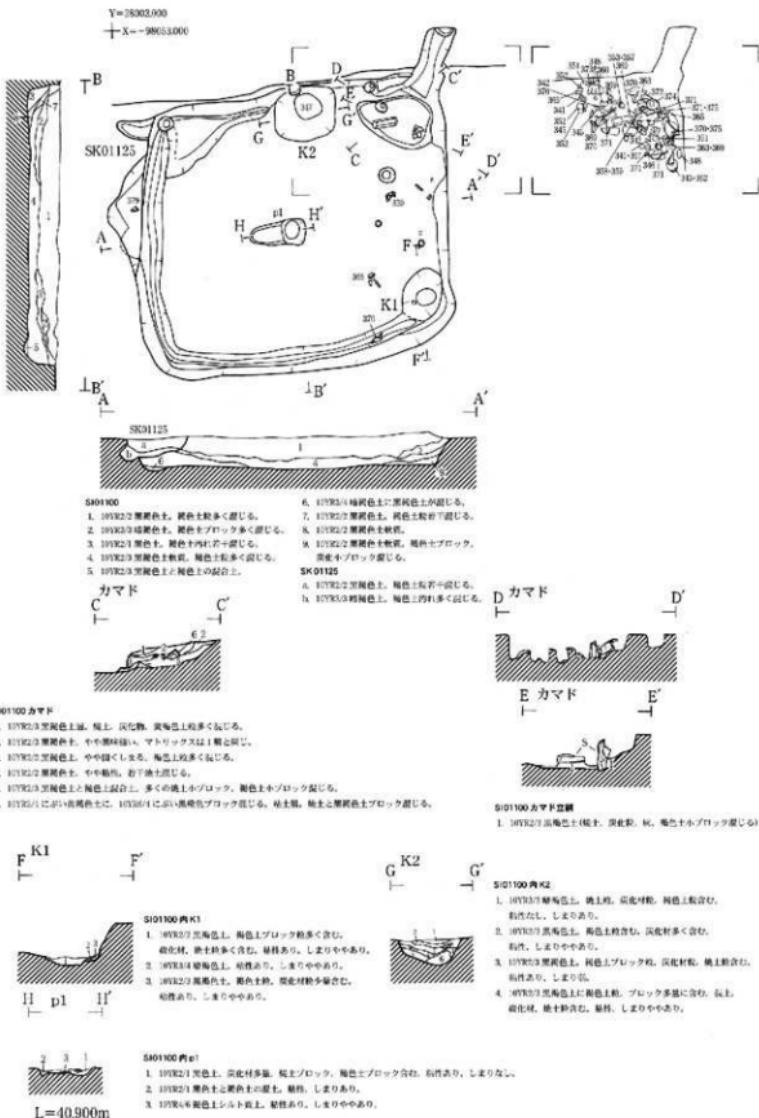
() は推定値、残存部高

No.	底上地	器種	口径cm	底径cm	高さcm	芯部	底上	焼成	色調	測量		区分番号 回鳥	参考
										外面	内面		
328	SI0192 燻出し	直筒型杯	(14.0)	(7.0)	36	ケズリ	壺、石合	普通	灰白	ロクロ	ロクロ	82	92
329	SI0192 カマド、K1	土師器質	(15.0)	(7.0)	126		壺、石合	普通	外・内 に赤い斑	ケズリ	ハケメ	82	92 番口クロ
330	SI0192 烧土	土師器質	—	(6.0)	(37)		壺、小石合	軟質	紅			82	92
331	SI0192 カマド	土師器質	185	—	(132)		壺、小石合	普通	紅	タタキ・ロクロ	ロクロ	82	93
332	SI0192 カマド	土師器質	—	(8.0)	(5.0)	ケズリ	壺、石合	軟質	外：浅黄褐 内：褐	ケズリ	指ナデ	82	92 番口クロ
333	SI0192 カマド	土師器質	—	—	(0.1)		壺、小石合	圓い	褐	ハケメ	小口焼き取り	82	93 番口クロ
334	SI0192K1	土師器質	—	(8.0)	(2.0)	ケズリ	壺、小石合	普通	外：赤褐	ケズリ	様子取り・三色見残	82	93 番口クロ
335	SI0192 烧土	土師器質	—	—	(0.0)		壺、小石合	普通	外：浅黄褐 内：褐	タタキ・ロクロ	ハケメ・ロクロ	82	93
336	SI0192 烧土	土師器質	—	—	(1.0)		壺、石合	軟質	褐	ケズリ		82	93 推察難い
337	SI0192 烧土	土師器質	—	—	(0.7)		壺、石合	圓い	に赤い斑	タタキ	指ナデ	82	93
338	SI0192 南カマド	土師器質	—	—	(2.5)		壺、石合	普通	浅黄褐	ロクロ・ケズリ	小口焼き取り→ ナデ	82	93
No.	底上地	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石質	回	写真回数	その他			
328	SI0192 南西土	壺石	144	6.6	4.5	6613		83	83	カマドに転用か			
340	SI0192 烧土	壺石	132	12.2	11.2	2840		83	93				

SI01100 積穴住居跡、SK01125 土壙跡 (第84図・写真図版61~63)

住居跡 SI0151 の北側から検出された、東西 3.9 m × 南北 3.55 m の小型の住居跡で北東隅にカマドをもつ。西壁で土壙跡 SK01125 と重複し、SK01125 が新しい。

住居の埋土は黒褐色土・主体で下位ほど褐色土が混じる、しまりのある粘性土である。深さは約 40 cm。床面はしまった褐色土であり、西壁と南壁際に幅 20 cm、深さ 3 cm ~ 5 cm の周溝がめぐる。カマドは北東コーナーに作られている。住居の規模に比してカマドが大きい。袖ははっきりしなかったが須恵器の短頭壺を半分にして左右の袖の芯材に使っていた(375)。また、芯材には土器や川原石を多量に使い、支脚には細長い割り石を縦に埋め込んで使っていた。煙道は北東に伸び、調査区外に続いている。埋土には白色粘土が少量含まれていた。煙道の長さは現存長で 0.8 m、煙出しの深さは 30 cm 以上にな



第84図 SI01100 竪穴住居跡、SK01125 土壌跡

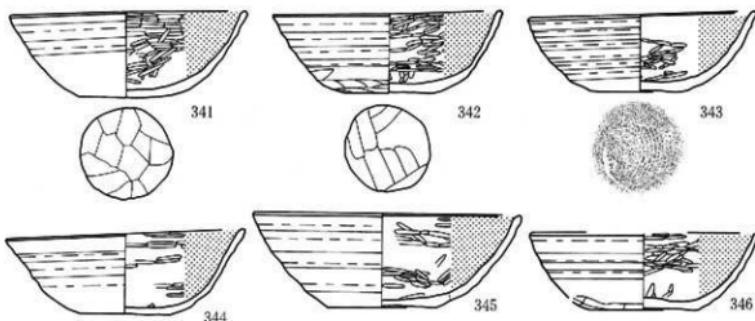
る。芯材に使用されたと思われる大量の土器は比較的残りがよい。前述の須恵器短頸壺のほかに土師器甕や高台坏等、20個体以上の土器が出土した。

北西隅から北壁際の土壤跡K2までは幅広く貼り床になっている。南は南東隅の土壤跡K1で止まる。K1は開口部 65cm × 45cm、深さ 10cm の浅い土壤跡である。K2はカマド左脇のやや方形の土壤跡で、開口部径 75cm × 65cm、深さ 35cm、埋土に大量の炭化材と焼土を含み、遺物の出土も多かった。柱穴は、床面中央に深さ 10cm のピットがあるが(p1)、SB2-1 を構成する柱穴である。カマドの手前的小ピットも柱穴とは考えられない。

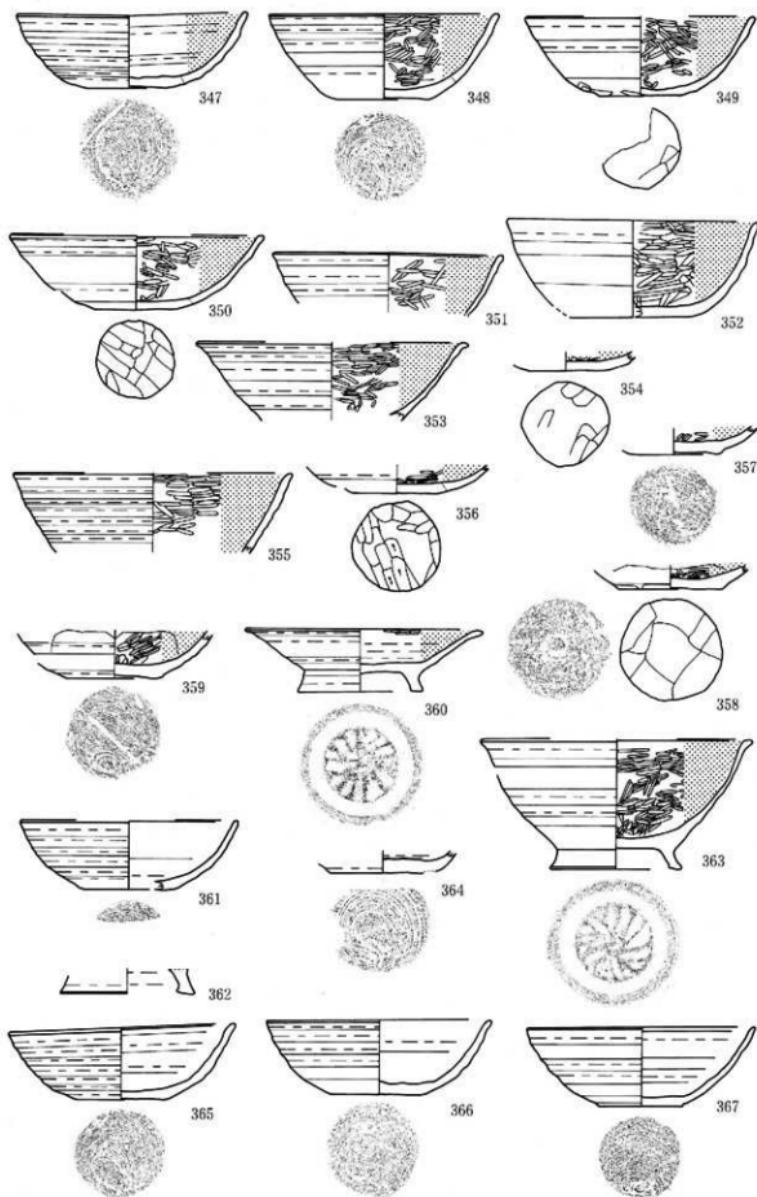
SK01125 土壤跡は住居跡 SI01100 の西壁に重複し、SI01100 を切る。東半分は SI01100 の埋土にかかるため全形は不詳だが、底部近くの壁がわずかに抉れる土壤跡である。計測できたところで開口部南北 1.5 m × 東西 0.4m、深さ 20cm である。379 は外面部下端が回転ケズリで、内面黒色の土器。

出土遺物(第85～87図・写真図版93～95) カマド焚口を中心に多量の土器が出土し、大半はカマド構築材に使われたと推定される。土師器、須恵器、土錐、鉄製品、石器がある。土器の比率は 89% が土師器で、坏、高台坏、鉢、甕がある。坏の底部は糸切り無調整と回転ケズリ、不定方向ケズリとがある。内面調整、黒色処理は他の例と同様であるが、359 の口縁部は連弧状ミガキである。また 358 は底部ヘラ切り後ケズリ調整を加える例で、類例が少ない。坏 345、352、353 は口径 15.7～16.6cm の椀形式で、底部は糸切り無調整と回転ヘラケズリがある。高台坏 363、360 は高台内を菊花状文に調整し、前者は緻密なミガキの椀形式、後者は坏身の低い形式となる。362 も同種だが、高台部のみの遺存。鉢は 371 が底部不定方向ケズリ、369 と 370 が回転ケズリ調整で、後 2 者は口縁部が短く「く」字に外反する特徴ある形式である。甕では 373 の糸切り無調整の小甕、374 の粘土板無調整の非口クロ甕、372 の器壁の薄いロクロ成形がある。須恵器は坏と甕がある。坏は 364、367、368 すべて糸切り無調整。短頸甕 375 はカマド袖の芯材に使われていた。

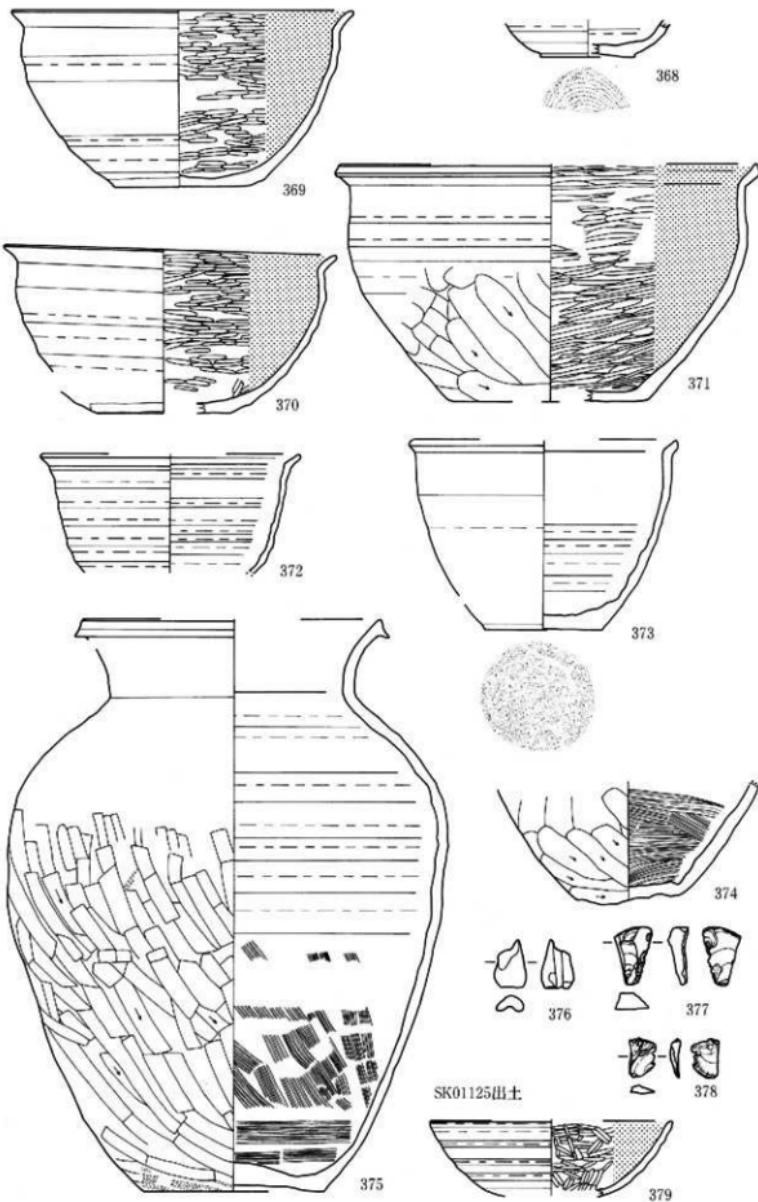
ほかに土錐破片 376、剥片石器 377、378 がある。



第85図 SI01100 積穴住居跡出土遺物 (1)



第86図 S101100 壁穴住居跡出土遺物 (2)



第87図 SI01100 竪穴住居跡、SK01125 土壌跡出土遺物

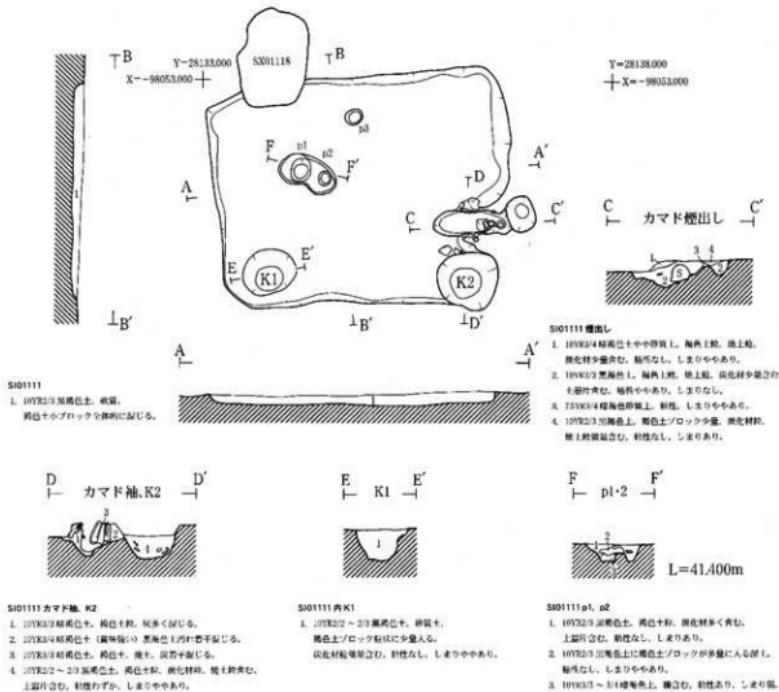
（）は概定期、既存部

No.	当 土 地	器 様	口径 cm	底径 cm	高さ cm	重 量 g	施 工	施 成	色 製	開 整		民 間 施 工 用 具	案 考
										外 壁	内 壁		
341	SI01100 カマド	土師器坏	14.3	5.6	5.25	ケズリ	やや粗	普通	黒	ロクロ	ミガキ純黑色處理	85	93
342	SI01100 カマド	土師器坏	13.9	5.2	5.05	ケズリ	やや粗	綿い	黒	ロクロ・ケズリ	ミガキ純黑色處理	85	93
343	SI01100 カマド	土師器坏	13.9	6.0	4.9	回転切削	密	綿い	にぶい黄緑	ロクロ	ミガキ純黑色處理	85	93 内面油付着
344	SI01100 カマド、 理土、K2	上師器坏	14.6	5.8	5.3	内側削	密	普通	紅	ロクロ	ミガキ純黑色處理	85	93 被熱により変色
345	SI01100 カマド、 理土、K2	土師器坏	16.3	6.5	5.9	回転切削	密、石英 等多合	普通	浅黄緑	ロクロ	ミガキ純黑色處理	85	93 外面厚底、樹脂着
346	SI01100 カマド	土師器坏	14.0	6.6	4.65	回転切削 回転ヘラケズリ	やや密	綿い	にぶい黄緑	ロクロ・ケズリ	ミガキ純黑色處理	85	93 被熱により変色 内面と水
347	SI01100 K2	土師器坏	14.2	6.2	4.7	回転切削	密	普通	外：浅黃色 内：にぶい黄緑	ロクロ	ミガキ純黑色處理	86	94 内面油付着
348	SI01100 カマド	土師器坏	14.6	5.6	5.25	回転切削 ケズリ	やや粗	普通	浅黄緑	ロクロ	ミガキ純黑色處理	86	95 变色、外面有毛
349	SI01100 カマド	上師器坏	14.0	5.0	4.9	ケズリ	やや粗	綿い	にぶい黄緑	ロクロ・ケズリ	ミガキ純黑色處理	86	94
350	SI01100 カマド、理土	上師器坏	14.0	4.8	4.65	ケズリ	密	普通	にぶい黄緑	ロクロ	ミガキ純黑色處理	86	94 おが牛の幅広い
351	SI01100 カマド、理土	土師器坏	14.1	—	6.7	密	綿い	浅黄緑	ロクロ	ミガキ純黑色處理	86	94 外面厚底着	
352	SI01100 カマド	土師器坏	15.05	7.6	5.2	回転ヘラケズリ	やや粗 等多合	普通	暗	ロクロ	ミガキ純黑色處理	86	95 外面厚底着 一部被熱
353	SI01100 カマド	土師器坏	16.6	—	4.95	密	普通	にぶい黄緑	ロクロ	ミガキ純黑色處理	86	94 一部被熱	
354	SI01100 カマド	上師器坏	—	5.6	6.2	ケズリ	後、石英 等多合	普通	暗	ロクロ・ケズリ	ミガキ純黑色處理	86	94
355	SI01100 カマド、理土	上師器坏	17.0	—	4.95	密	普通	にぶい黄緑	ロクロ	ミガキ純黑色處理	86	94 おが牛の幅広い	
356	SI01100 カマド、理土	土師器坏	14.1	—	6.7	密	綿い	浅黄緑	ロクロ	ミガキ純黑色處理	86	94 外面厚底着	
357	SI01100 カマド	土師器坏	—	—	—	回転ヘラケズリ	やや粗 等多合	普通	暗	ロクロ	ミガキ純黑色處理	86	95 一部被熱
358	SI01100 カマド	土師器坏	—	—	—	ケズリ	後、石英 等多合	普通	暗	ロクロ・ケズリ	ミガキ純黑色處理	86	94
359	SD1100 カマド	土師器坏	—	—	—	回転切削	やや粗 等多合	普通	暗	ロクロ	ミガキ純黑色處理	86	94 一部被熱
360	SD1100 カマド	土師器坏	—	—	—	回転切削	やや粗 等多合	普通	暗	ロクロ	ミガキ純黑色處理	86	94 外面厚底着
361	SD1100 カマド、理土	土師器坏	—	—	—	回転切削	やや粗 等多合	普通	暗	ロクロ	ミガキ純黑色處理	86	94 おが牛不詳
362	SD1100 カマド	土師器坏	—	—	—	回転切削	やや粗 等多合	普通	暗	ロクロ	ミガキ純黑色處理	86	94 おが牛不詳
363	SD1100 カマド	上師器坏	19.0	8.1	5	高台内：黄色 吹灰吹き	やや密	普通	浅黄緑	ロクロ	ミガキ純黑色處理	86	94 内外面厚底着
364	SD1100 理土	土師器坏	—	—	—	回転切削	やや粗 等多合	普通	暗：浅黄 内：白色	ロクロ	ミガキ純黑色處理	86	94
365	SD1100 カマド、理土	土師器坏	13.9	5.5	4.7	回転切削	やや粗	普通	暗	ロクロ	ミガキ純黑色處理	86	94 被熱により変色
366	SD1100 カマド、理土	上師器坏	13.85	5.6	4.6	回転切削	やや粗	普通	暗	ロクロ	ミガキ純黑色處理	86	94 被熱により変色
367	SD1100 カマド、理土	底座器坏	14.1	5.1	4.9	回転切削	やや粗	綿い	外：浅黃 内：吹灰吹	ロクロ	ミガキ純黑色處理	86	95
368	SD1100 理土	底座器坏	—	5.8	6.25	回転切削	やや粗	綿い	外：浅黃 内：吹灰吹	ロクロ	ミガキ純黑色處理	86	95
369	SD1100 理土、 K2、カマド	土師器坏	20.8	7.9	10.8	回転ヘラケズリ	やや密	普通	暗	ロクロ	ミガキ純黑色處理	87	95 内外面被熱
370	SD1100 理土、 K2、カマド	土師器坏	26.1	7.8	19.3	回転ヘラケズリ	密	普通	暗	ロクロ	ミガキ純黑色處理	87	95 一部被熱着
371	SD1100 カマド	上師器坏	15.02	(12.0)	14.5	ヘラケズリ	密、砂質	普通	暗	ロクロ・ヘラケズリ	ミガキ純黑色處理	87	95 内外被熱
372	SD1100 カマド	上師器坏	15.6	—	7.3	—	砂質、 石英等多合	軋質	浅黄緑	ロクロ	ミガキ純黑色處理	87	95
373	SD1100 カマド	土師器坏	16.2	7.1	11.2	回転切削	やや粗 等多合	軋質	暗	ロクロ	ミガキ純黑色處理	87	95
374	SD1100 カマド	土師器坏	—	—	—	回転切削	やや粗 等多合	軋質	外：灰白 内：吹灰吹	ケズリ	ハケメ	87	95 内外被熱付着
375	SD1100 カマド、理土	底座器坏	19.2	10.0	35	不明	密、小石 等多合	軋質	外：浅黃 内：吹灰吹	タタキ・ケズリ	ハケメ・ロクロ	87	95
376	SD1100 理土	土師器坏	11.5	—	—	—	やや粗	普通	浅黄緑	ロクロ	ミガキ純黑色處理	87	95
377	SD1100 理土	調片	35	2.3	1.0	—	—	普通	—	—	—	—	—
378	SD1100 理土	調片	24	1.6	0.45	1.06	—	普通	—	—	—	—	—

S101111 穫穴住居跡 (第88図・写真図版63・64)

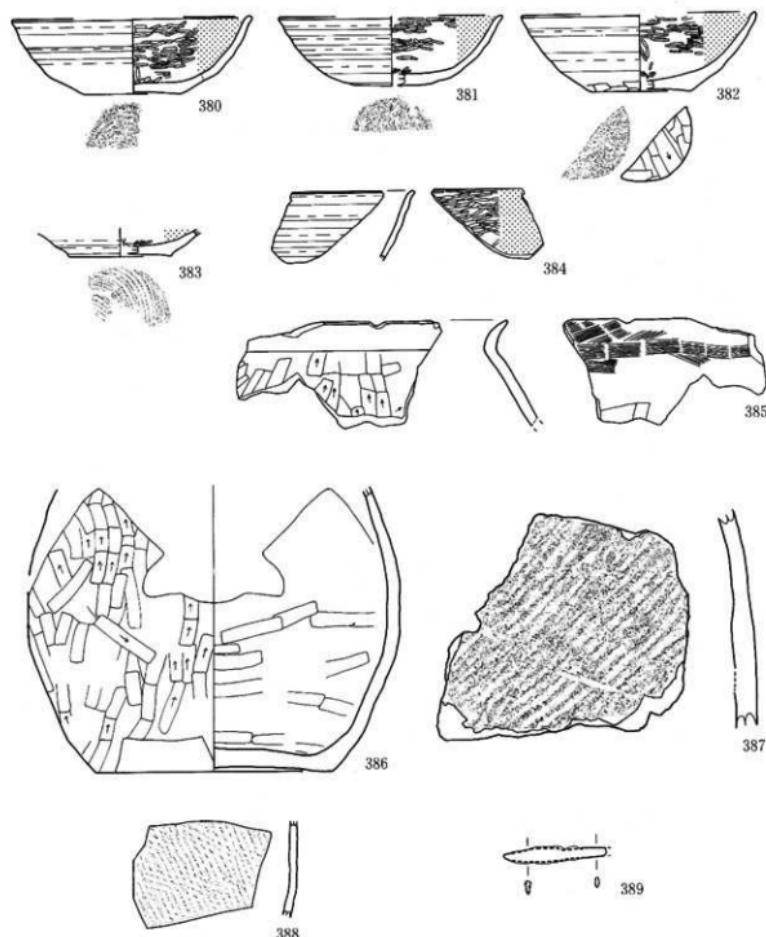
E区にある、東西3.1m×南北2.8m、深さ10cmの竪穴住居跡である。東カマドをもち、煙道はない。北壁に新しい土壤跡SX01118との重複があり、住居跡が古い。埋土は黒褐色土、床面は褐色土混じりの黒褐色土で、硬くしまっている。一部分で薄い貼り床が見られる。床面では土壤跡2基、柱穴ピット3個を検出した。土壤跡K1は南西隅にあり、開口部65cm×55cm、深さ40cm、埋土は黒褐色の砂質土である。柱穴については、埋土は住居と同じだが、3個いずれも浅く、住居を支える柱かどうかは不明である。

カマドは東壁やや南寄りにあり、袖に芯材と考えられる石をはめ込み、しまりの弱い砂質土で構築している。芯材の石は割り石で、火を受けた痕跡が見られる。支脚には細長い川原石を使う。焚き口部は炭化材と焼土が広がり、それを取り除くと窓みになっている。煙道はなく、カマドからすぐ煙出しが立ち上がる。向かってカマド右手にある灰だまりピットK2は開口部75cm×70cm、深さ40cm、焼土が含まれる黒褐色土の埋土から土器片が出土している。

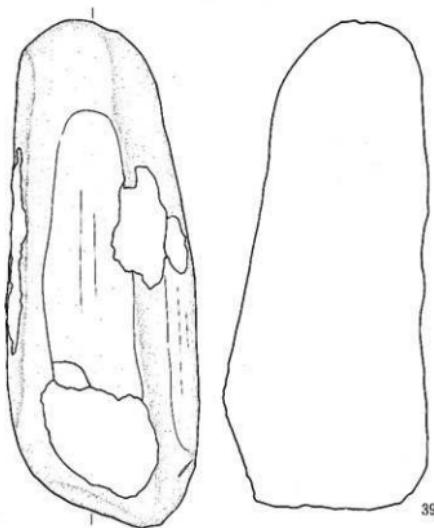


第88図 SI01111 竪穴住居跡

出土遺物（第89・90図・写真図版96） 遺物は少ない。土師器、須恵器、刀子がある。土師器は壊、甕がある。壊の底部は糸切り無調整で、内面調整、黒色処理は他の例と同様であるが、380 の口縁部は横位と斜位のミガキ、382 は底部全面一定方向ケズリである。甕 385、386 はカマド袖の芯材に使われた非ロクロの同一個体で、口縁部は横ナデで短く外反し、胴部は外面縦方向ケズリ、内面横位の小口搔き取り、底部は粘土板ナデ調整される。須恵器は甕があり、387、388 は胴部破片である。388 は器壁が薄く焼成は堅緻。389 は刀子、390 は磨石を転用したカマド支脚である。



第89図 S101111 積穴住居跡出土遺物（1）



390

第90図 SI01111 穫穴住居跡出土遺物 (2)

() は推定。複数ある

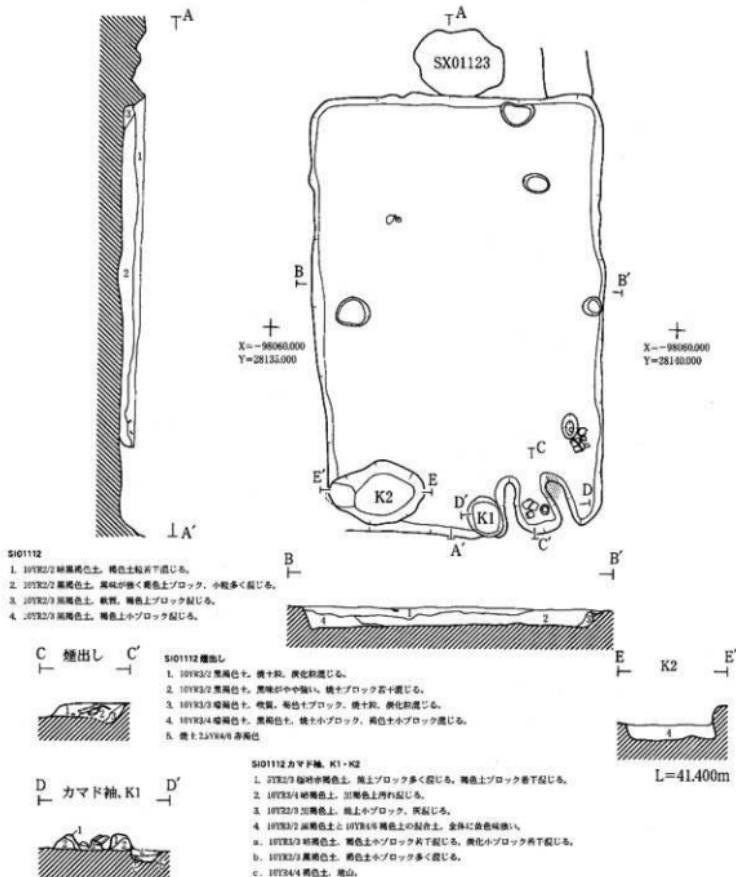
No.	出 土 地	器 物	寸 法 cm	底 面 cm	高さ cm	底 溝	附 上	施 成	色 調	開 窓		固形番号	貯 貨	備 考
										外 面	内 面			
389	SI01111 壁上 カマド跡、K2	土師器環	(14.0)	(6.2)	4.65	圓軸系切	やや密	圓い	に赤い黄褐	ロクロ	ミガキ後黒色処理	89	96	外壁手掘れ
391	SI01111 K2	土師器環	(13.0)	(4.8)	4.75	14軸系切	やや密 石糞合	普通	緑	ロクロ	ミガキ後黒色処理	89	96	
392	SI01111 壁上、K2	土師器環	(14.0)	(6.0)	4.7	ケズリ	やや粗 石糞合	圓い	に赤い黃褐	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黒色処理	89	96	
393	SI01111 K2	土師器環	-	(6.2)	(1.7)	18軸系切	やや密	圓い	に赤い黄褐	ロクロ	ミガキ後黒色処理	89	96	被熱により内側 とぶ
394	SI01111 カマド	土師器環	-	-	(4.8)		やや密	圓い	に赤い黄褐	ロクロ	ミガキ後黒色処理	89	96	
395	SI01111 壁上 カマドで被 電	土師器環	-	-	(6.0)		やや粗 小石多合	圓い	外：刷毛 内：刷毛刷	椎ナデ・ケズリ 刷り	椎ナデ・手口擦き	89	96	扉クロ
396	SI01111 カマド被 電	土師器環	-	(14.0)	(17.0)	ナデか	やや粗 小石合	圓い	明褐色	ケズリ	ナデ・手口擦き取 り	89	96	扉クロ
397	SI01111 破壊し 痕跡	消音器環	-	-	(13.0)		粗、石糞 合	粗、石糞 合	外：鉛灰 内：サリーブ	タタキ		89	96	
398	SI01111 K2	須恵器環	-	-	(6.0)		やや粗 小石合	圓い	灰青灰	タタキ		89	96	
No.	出 土 地	器 物	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重 量 g	石 斧	圓	等 真 国 标	そ の 他				
399	SI01111 壁上	刀子	6.3	1.1	0.35	4.19	致	89	96					
400	SI01111 カマド丸脚	磨石	31.3	11.9	12.5	7520		90	96	支脚に軋用				

SI01112 穫穴住居跡 (第91図・写真図版65・66)

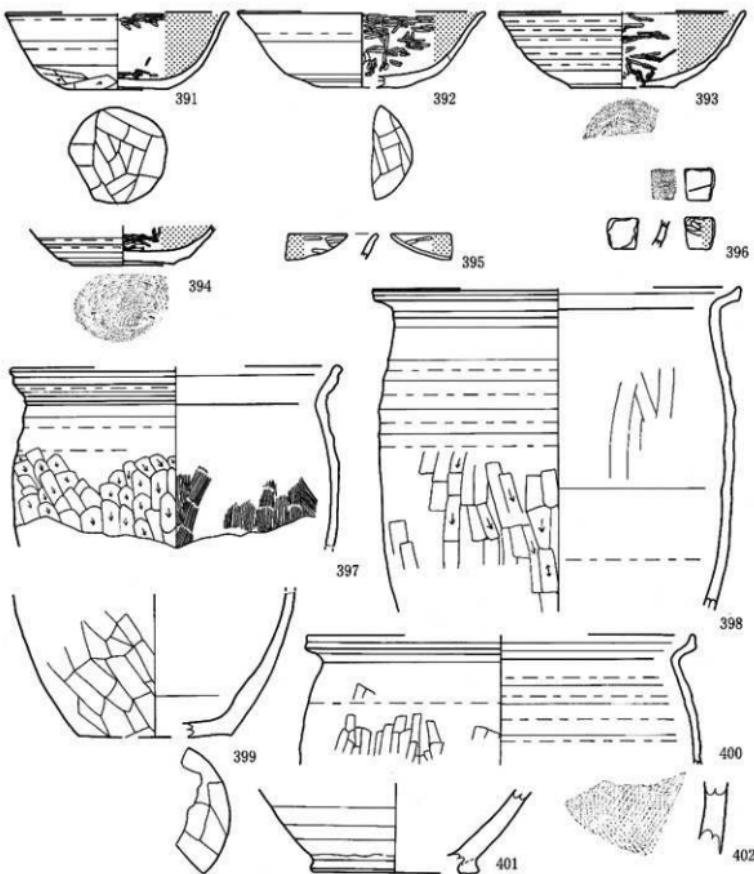
住居跡 SI01111 の南側から検出された、東西 3.6m × 南北 5.4m、南北カマドの竪穴住居跡である。北壁に SX01123、北東隅に T ピット SK01107 との重複があり、重複関係は古いほうから SK01107 → SI01112 → SX01123 となる。この住居は南北壁の長さが東西壁の約 1.5 倍という、長方形プランである。拡張、建て替えを行った痕跡はみられない。深さは 20cm、埋土は褐色土が混じる黒褐色土で、粘性はあるがしまりの弱い土質である。床面は固くしまった黒褐色土で、全体に貼り床が施されている。貼り床からは土器片が比較的多く出土している。床面では向かってカマド右手と南西隅に土壤跡を検出した。南西隅の土壤跡 K2 は開口部 1.15m × 0.75m、深さ 20cm の不整形で、埋土は黒褐色と褐色の混じった单層である。柱穴ピットは検出しなかった。

カマドは南壁東端に作られ、褐色土で構築された袖の残りはよい。煙道はない。住居の大きさに比例して、やや大きめのカマドである。焚き口内では土師器壺の破片が支脚に使われていた。カマド右手の土壙跡 K1 は開口部 50cm × 45cm、深さ 15cm で、埋土は褐色土ブロックと炭化材が少量混じる黒褐色土である。

出土遺物（第92図・写真図版97） 遺物は少ない。土師器、須恵器、須恵系土器があるが、前 2 者を図示できた。土師器は壺と甕がある。壺の底部は糸切り無調整と全面不定方向ケズリがある。内面調整、黒色処理は他の例と同様であるが、395 は口縁部内外面を横位ミガキの後、黒色処理する B 類土器、396 は見込み立ち上がりに直線の線刻がある。甕は胴部を継ないし斜位方向のケズリ。399 は非ロクロ甕で底部粘土板を不定方向ケズリ調整する。須恵器は 401 が長頸瓶底部で、高台貼付痕を残す。402 は器壁が厚い大甕の破片。



第91図 SI01112 壓穴住居跡



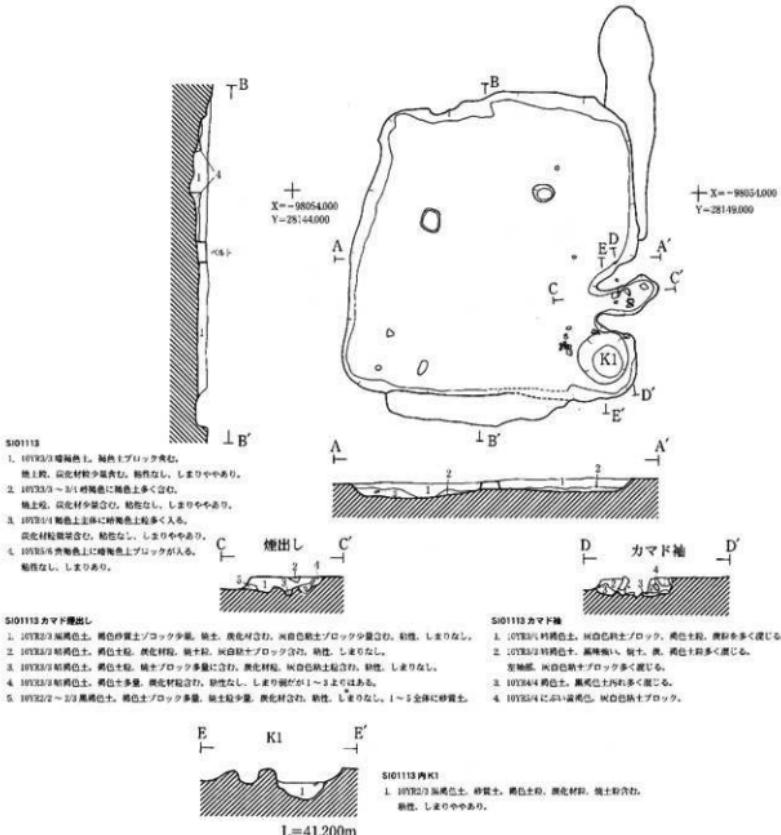
第92図 S101112 積穴住居出土遺物

No.	出上地	器種	口径cm	底径cm	高さcm	底部	胎土	焼成	色調	調査		回収番号	備考
										外曲	内曲		
391	SB01112 カマド	土師器坪	(13.7)	(6.0)	4.75	ケズリ	やや密	普通	淡黄	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黑色處理	92 97	被熱により内面 とぶ
392	SB01112 墓上	土師器坪	(15.2)	(6.2)	4.7	ケズリ	密	固い	にぶい黄	ロクロ	ミガキ後黑色處理	92 97	手扱れ者しい
393	SB01112 墓土	土師器坪	(15.2)	(6.3)	4.75	回転系切	密	固い	橙	ロクロ	ミガキ後黑色處理	92 97	
394	SB01112 墓土	土師器坪	-	(6.2)	(2.45)	回転系切	やや粗 砂質	固い	にぶい黄	ロクロ	ミガキ後黑色處理	92 97	
395	SB01112 墓土	土師器坪	-	-	(1.6)		砂質	固い		ミガキ後黑色處理	ミガキ後黑色處理	92 97	内外黒色
396	SB01112 墓土	土師器坪	-	-	(1.7)		やや粗	固い	にぶい黄	ロクロ	ミガキ後黑色處理	92 97	内面擦削
397	SB01112 墓土	カマド	土師器坪	(20.1)	-	(11.1)	やや粗 石英含	固い	外にぶい黄 内にぶい黄	ケズリ	ハケメ	92 97	内面焼付着
398	SB01112 墓土	土師器坪	(22.8)	-	(19.9)		やや粗 小石含	固い	青透	ロクロ・ケズリ	ロクロ	92 97	
399	SB01112 墓土	土師器坪	-	(9.2)	(8.9)	ケズリ	小石 多含	青透	明透	ケズリ		92 97	薄ロクロ
400	SB01112 墓土	カマド	土師器坪	(24.0)	-	(7.95)	やや粗 石英含	固い	淡黄	ロクロ・ケズリ	ロクロ	92 97	
401	SB01112 墓土	消火器底 筋跡	-	10.2	(5.2)	高台織り付 け盤	やや粗	固い	外：灰 内：黄	回転へケズリ	ロクロ	92 97	
402	SB01112 墓土	消火器底	-	-	4.4		やや密	普通	灰褐	平行タテキ (斜片付)	ケズリか	92 97	

S101113 壁穴住居跡 (第93図・写真図版66・67)

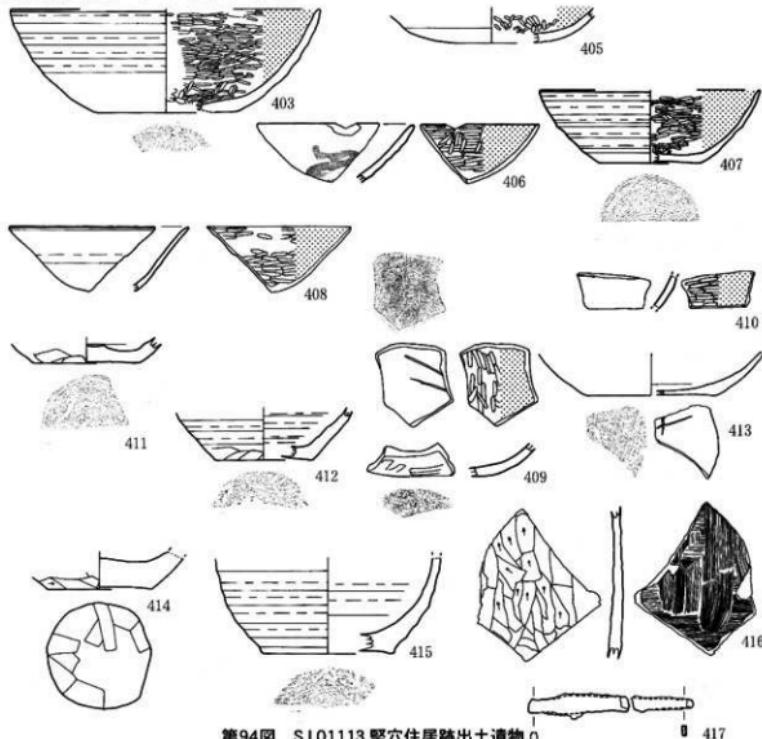
住居跡 S101111 の東側に検出した、東西3.5m×南北3.6m、東カマドの壁穴住居跡である。南壁と、西壁の一部に搅乱を受ける。また、東壁北側はTピット SK01109と重複するが、住居跡が新しい。深さは10cmほどで、埋土は褐色土ブロック混じりの暗褐色土である。床面は褐色土混じりの黒褐色土でやわらかく、厚く貼り床がしてある。貼り床には多量の炭化材が混入しており、厚いところでは20cmほどになる。床面から柱穴は検出されなかった。

カマドは東壁南寄りに作られている。S101111と同じように煙道はなく、カマドからすぐに煙出しとなる。支脚は川原石である。袖の芯材はなく、しまりのある暗褐色粘性土で作られ、一部に灰白色粘土のブロックが混入する。焚き口付近と煙出しには土器片が散乱している。向かってカマド右手に土壤跡K1がある。開口部60cm×60cm、深さは20cmである。埋土は炭化材と焼土を含む褐色の砂質土である。



第93図 S101113 壁穴住居跡

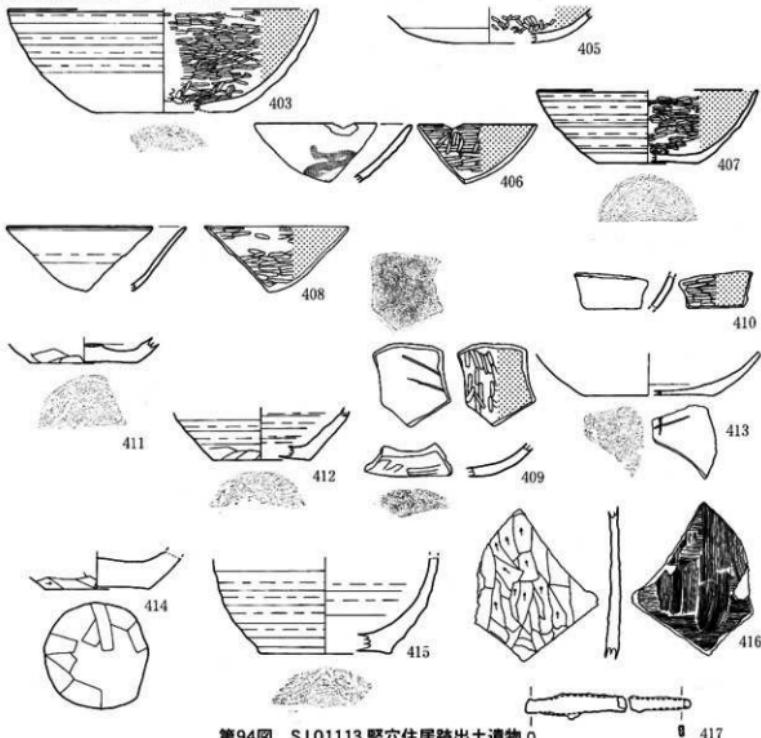
出土遺物（第94図・写真図版97） 遺物は少ない。土師器、須恵器、刀子がある。土師器は壺と甕で、壺の底部は糸切り無調整と不定方向ケズリがある。内面調整、黒色処理は他の例と同様であるが、405は底部全面不定方向ケズリで丸底化とする。403は口径19.0cmの楕ないし鉢形となる。409は見込みに2本の平行直線を線刻し、413は底部外面に「X」状のヘラ書きがある。406の外面「弓」の墨書は、SI0150 壺 252と同じである。墨痕は410にもあるが字形は不明。甕は415が糸切り無調整、414は底部粘土板を不定方向ケズリする。須恵器は壺と甕があり、壺411、412は糸切り無調整、甕416は比較的器壁が薄い。417は刀子である。



第94図 SI01113 積穴住居跡出土遺物 0

No.	出土地	器種	口径cm	底深cm	高さcm	底部	地土	焼成	色調	測量		回転系舟 回転系舟	備考
										外 面	内 面		
403	SI01113 カマド右側	土師壺	(19.0)	(8.0)	6.4	回転糸切	やや粗 石英質	固い	にぶい黄銀	ロクロ	ミガキ後黒色處理	94	97
405	SI01113 カマド下	土師壺	-	(2.0)	-	ケズリ、丸底	やや粗	固い	にぶい黄銀	ロクロ	ミガキ後黒色處理	94	97
406	SI01113 カマド右側	土師壺	-	(3.0)	-	固い	やや粗	固い	にぶい黄銀	ロクロ	ミガキ後黒色處理	94	97
407	SI01113 カマド左側	土師壺	(13.7)	(6.2)	4.55	回転糸切	やや粗 骨合	固い	暗	ロクロ	ミガキ後黒色處理	94	97
408	SI01113 壁土	土師壺	-	(4.0)	-	やや粗	固い	にぶい黄銀	ロクロ	ミガキ後黒色處理	94	97	
409	SI01113 壁土	土師壺	-	(2.0)	-	回転糸切	やや粗	固い	にぶい黄銀	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黒色處理	94	97
410	SI01113 壁土	土師壺	-	(2.0)	-	やや粗	固い	灰青	ロクロ	ミガキ後黒色處理	94	97	
411	SI01113 壁土	須恵器	-	(8.0)	(1.0)	回転糸切	やや粗 石英質	普通	灰青	ケズリ	ロクロ	94	97
412	SI01113 壁土	須恵器	-	(8.0)	(1.0)	回転糸切	粗	固い	外:灰 内:灰	ロクロ・ケズリ	ロクロ	94	97
413	SI01113 壁土	須恵器	-	(8.0)	(1.0)	回転糸切	粗	固い	外:灰 内:灰	ロクロ・ケズリ	ロクロ	94	97
414	SI01113 壁土	須恵器	-	(8.0)	(1.0)	回転糸切	粗	固い	外:灰 内:灰	ロクロ・ケズリ	ロクロ	94	97
415	SI01113 壁土	須恵器	-	(8.0)	(1.0)	回転糸切	粗	固い	外:灰 内:灰	ロクロ・ケズリ	ロクロ	94	97
416	SI01113 壁土	須恵器	-	(8.0)	(1.0)	回転糸切	粗	固い	外:灰 内:灰	ロクロ・ケズリ	ロクロ	94	97
417	SI01113 壁土	刀子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

出土遺物 (第94図・写真図版97) 遺物は少ない。土師器、須恵器、刀子がある。土師器は壺と甕で、壺の底部は糸切り無調整と不定方向ケズリとがある。内面調整、黒色処理は他の例と同様であるが、405は底部全面不定方向ケズリで丸底化とする。403は口径19.0cmの楕ないし鉢形式となる。409は見込みに2本の平行直線を線刻し、413は底部外面に「×」状のヘラ書きがある。406の外面「弓」の墨書は、SI0150 壺 252と同じである。墨痕は410にもあるが字形は不明。甕は415が糸切り無調整、414は底部粘土板を不定方向ケズリする。須恵器は壺と甕があり、壺411、412は糸切り無調整、甕416は比較的器壁が薄い。417は刀子である。



第94図 SI01113 積穴住居跡出土遺物 0

()は復元形。右側番号

No.	出土地	器種	口径cm	底径cm	高さcm	底形	胎土	焼成	色調	調査		回収件数	参考
										外面	内面		
403	SI01113 カマド右袖	土師器壺	19.0	8.2	6.6	上輪削切	やや粗 石英含	固い	にぶい黄褐	ロクロ	ミガキ後黒色處理	94	97
404	SI01113 カマド	土師器壺	—	—	12.0	ケズリ、丸底	やや粗	固い	にぶい黄褐	ロクロ	ミガキ後黒色處理	94	97
405	SI01113 カマド右袖	土師器壺	—	—	13.0	—	金	固い	にぶい黄褐	ロクロ	ミガキ後黒色處理	94	97
407	SI01113 カマド左袖	土師器壺	13.7	6.2	4.55	上輪削切	金 石英含	固い	褐	ロクロ	ミガキ後黒色處理	94	97
408	SI01113 壁土	土師器壺	—	—	14.0	—	やや粗	固い	にぶい黄褐	ロクロ	ミガキ後黒色處理	94	97
409	SI01113 壁土	土師器壺	—	—	12.0	回転削切	やや粗	固い	にぶい黄褐	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黒色處理	94	97
410	SI01113 壁土	土師器壺	—	—	12.0	—	やや粗	固い	灰褐	ロクロ	ミガキ後黒色處理	94	97
411	SI01113 壁土	須恵器壺	—	6.0	1.0	回転削切	やや粗 石英含	普通	灰褐	ケズリ	ロクロ	94	97
412	SI01113 壁土	須恵器壺	—	6.0	3.0	回転削切	粗	固い	外：灰 内：灰	ロクロ・ケズリ	ロクロ	94	97
413	SI01113 壁土	須恵器壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
414	SI01113 壁土	刀子	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
415	SI01113 壁土	須恵器甕	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
416	SI01113 壁土	須恵器甕	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
417	SI01113 壁土	刀子	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

No.	土 壤	基 础	口径 cm	奥深 cm	基高 cm	底 形	地 士	施成	色 質	測 量		回復率%	透 采
										外 面	内 面		
413	SD01113 塗土	土師器坏	—	(4.2)	(2.6)	圓形小切抜 ハラズアリ	やや密	普通	にぶい黄褐色	ロクロ	ロクロ	94	97
414	SD01113 塗土	上部器質	—	6.3	(2.0)	粘土板ケズリ	粗、砂質、 小石含	軟質	外にぶい青褐色 内に赤褐色	ケズリ	ロクロ	94	97
415	SD01113 カマド周辺	上部器質	—	(8.2)	(5.95)	円柱形切 抜	粗、石英 含	中密	内にぶい青褐色	ロクロ	ロクロ	94	97
416	SD01113 塗土	底部器質	—	—	(0.6)	やや粗、 石英含	固い	内に青褐色	ケズリ	ハケメ	ハケメ	94	97
No.	土 壤	基 础	厚さ cm	厚さ cm	重 量 g	材 質	回	写 真 版	その 他				
417	SD01113 塗土	刀子	(0.2)	1.6	0.4	19.32	鐵	94	97	2片			

SI01114 穫穴住居跡 (第95・96図・写真図版67～69)

住居跡 SI01113 の東側から検出された、建て替えが行われた竪穴住居跡である。古いものを A、新しい方を B とする。A、B はほぼ同規模の住居であると考えられる。

SI01114B は東西 4.1m × 南北 4.6m、深さは平均 15cm である。北壁で SI01114A と重複している。埋土は黒褐色土が主体で、下位には大量の焼土と炭化材がある。また一部には灰白色粘土ブロックが混じる。床面には北と西壁際に周溝が巡る。周溝は上幅 10cm、深さ 5cm ほどである。床面は薄い貼り床が見られ、暗褐色・褐色土の混土に灰白色粘土などが混じり合い土器片も多く含まれていた。貼り床の下は砂質の褐色土である。さらに、貼り床の下から土壤跡 K1、K2 を検出した。K1 は開口部径 45cm × 45cm、深さ約 10cm である。K2 は開口部径 60cm × 45cm で深さが 5cm ~ 10cm であるが、不整形で、貼り床下からの検出ということもあり、土壤跡ではなく住居掘削時に他より深く掘った部分の可能性もある。埋土には焼土と炭化材が大量に含まれていた。また、土器器坏も出土している。

この住居のカマドは東壁の南端にあるが、プランははつきりせず、床面検出の段階でも袖の名残と思われる一部が確認できただけであった。土壤跡 K3 はカマドの向かって右手にある土壤跡である。開口部 1.05m × 0.6m、深さ 20cm、埋土は黒褐色と暗褐色土で、炭化材と焼土が混入している。土器が多量に含まれていた。

貼り床をはがしていく過程でカマドの袖の基部らしきものが 3 本現れた。造り替えがあったことを示すものであろう。焚き口部から煙出しにかけて浅い窪みがあるが、床面の高さを考えると使用時にはある程度の深さがあったものと推定される。煙道はない。また、貼り床下からの検出ということは、この住居ははじめにカマドを作つてから貼り床を行つたということを示す。

土壤跡 K4 は K3 の西側にあるが、住居跡の埋土の途中から検出したもので、この住居に伴う土壤跡ではない。開口部 1.3m × 0.9m、深さ 50cm の壠状の土壤跡である。北側で SI01114B 内 p1 と重複している。

柱穴は住居を切る柱穴が 2 個 (EP1・2)、床面から深さ 30cm ほどの柱穴が 2 個、10cm 前後のものが 6 個検出されたが、浅いものは貼り床下からの検出であるため、実際には柱穴として使われたものではない。床面検出の柱穴のうち、p1 には拳大の石が 5 個重ねられていた。また、袖を取り除いた後にも柱穴を 5 個検出したが、うち 1 個には柱当りが認められた。SI01114B に伴うものではないであろう。

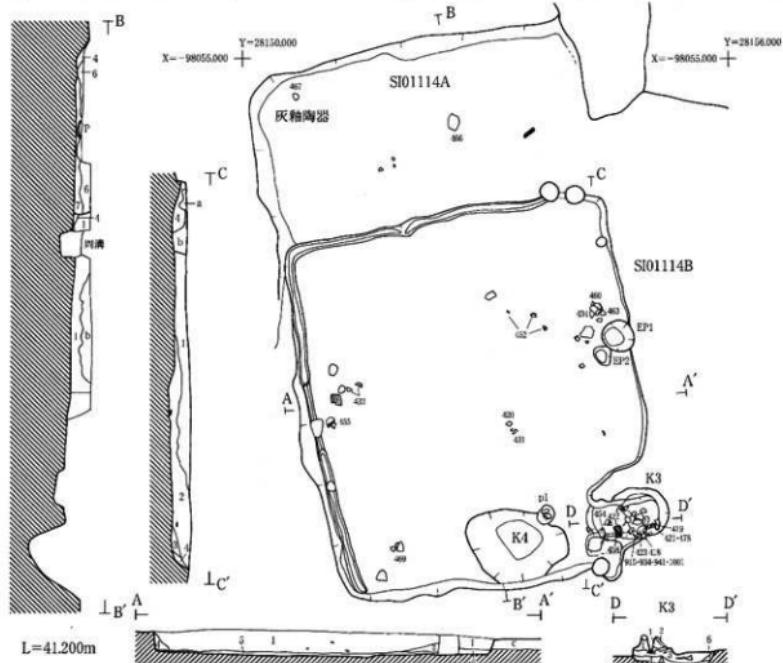
SI01114A は、同 B の北側に重複している。B の北壁から A の北壁までは 2.2m であり、残存は 1/2 であると考えられる。住居の方向と東西幅は B と一致している。検出面からの深さは 15cm から 20cm、東壁は搅乱のため壁は立たない。床面レベルは B と同じである。周溝はなく、全体に薄い貼り床が見られる。柱穴は 10cm ほどのものが 3 個ある (p1・2・3)。

カマドについては、A の北壁から南に 4 m 至った B の東壁際に、固い焼土が 30cm 四方に広がっており、そこがカマドであった可能性が考えられる。しかしカマド袖脇に一般的に見られる土壤跡は確認されず、煙道の痕跡もないため断定できない。

北西壁際の床面に埋もれる形で灰釉陶器の小瓶が出土した (467)。頸部から上が欠損している。

出土遺物 (第96～99図・写真図版97～99) 出土遺物は多く、土師器、須恵器、灰釉陶器、砥石、刀子、釘があり、種類も豊富である。

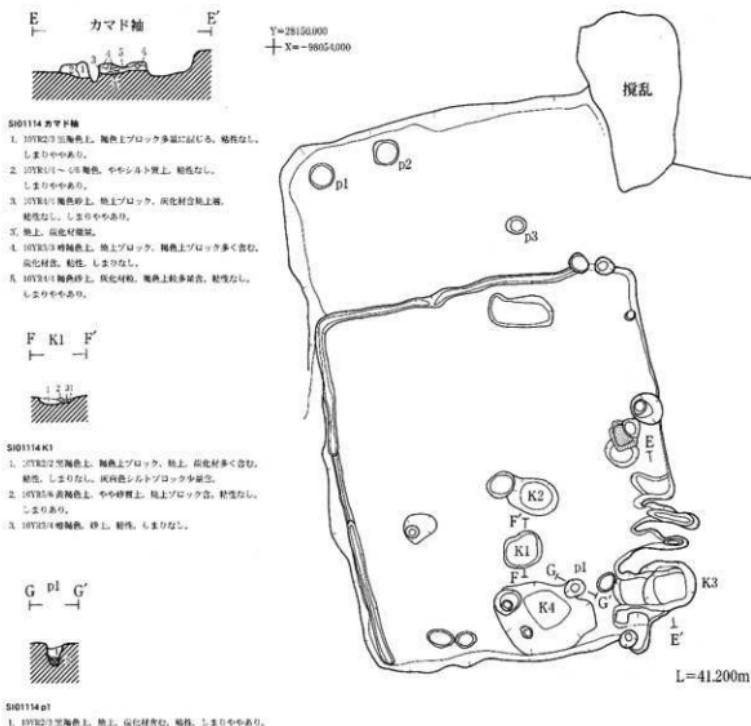
土器組成に土師器の占める割合は90%で、壺、高台壺、鉢、甕がある。壺の底部は糸切り無調整が主体だが、421は全面回転ケズリ、434は糸切り後不定方向ケズリ、452は全面不定方向ケズリを行う。内面調整、黒色処理は他の例と同様であるが、421、426、434は口縁部内面を連弧状ミガキ、428が口縁部を横位と斜位のミガキで調整する。452は非内黒壺。424、443、440は内外面黒色処理のB類上器で、424は底部糸切り後ミガキ、内外面緻密な横位ミガキの灰釉陶器模倣の小壺である。440も底部まで緻密なミガキが及ぶ壺である。418は糸切り無調整の完形の壺で、外面口縁部に「床」の墨書がある。壺ではさらに10点の墨書き器があるが、439の「禾」のほかは字形不明か墨痕のみである。字形と筆の運びの相似からSI0191出土の299壺も「禾」の可能性がある。高台壺451は高台部が剥離した壺で、底部は菊花状文を残す。鉢は内黒で430は口縁部内面横位ミガキだが、453の内面はハケメ状小口の調整で、外面は底部から口縁下部までヘラケズリが及ぶ。甕はすべてロクロ形成で、胴部外面を縦方向ケズリする例が多い。455と457は口縁部と胴部から底部の破片であるが、胎土、色調、



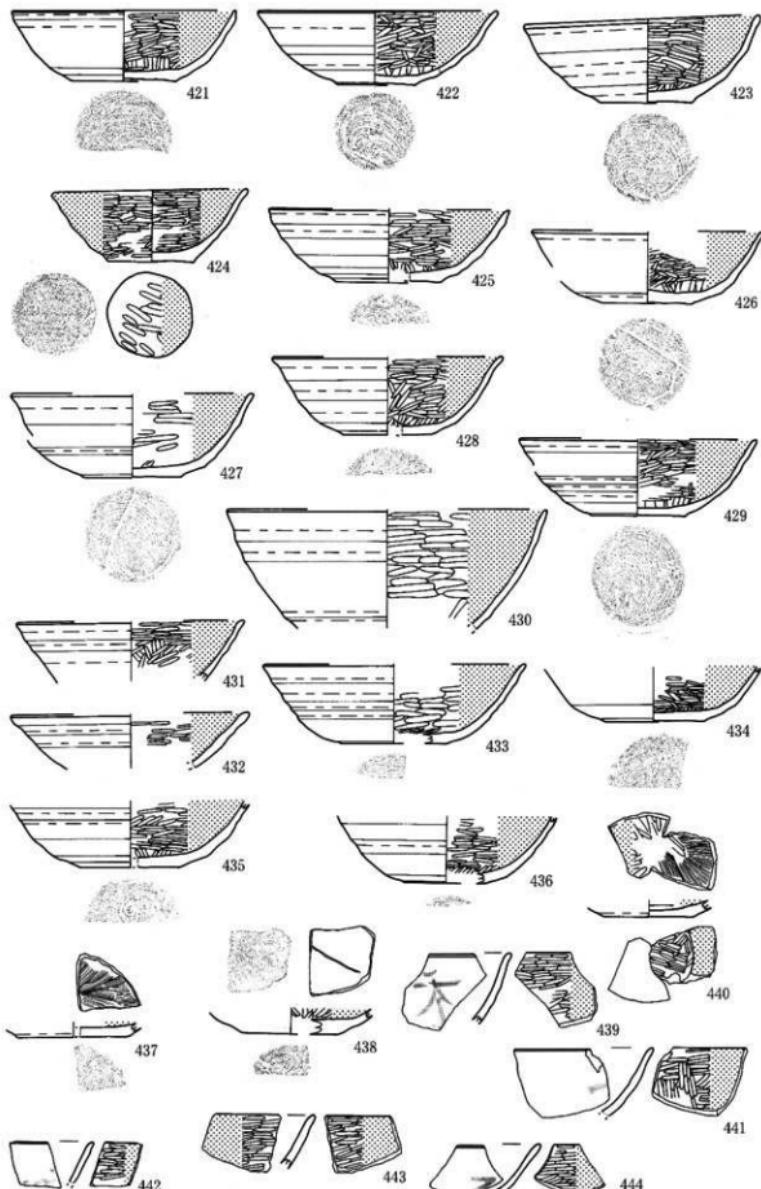
- SI01114
 1. 10Y32/2 黒褐色土。中層以下に焼成小ブロック、焼土塊。
 焼土塊は多く残じる。
 2. 10Y32/2 黒褐色土。生地無い。大量的焼土塊。
 焼成小ブロック、褐色土小ブロック、焼泥じる。
 3. 10Y32/2 黑褐色土。褐、褐色、白色土。焼成多く残じる。
 4. 10Y32/2 黑褐色土。褐色土内れ多く残じる。
 5. 繋り化。焼成土+焼土ブロック、焼白色土+灰から構成される。
 烧泥は出ない。まだ地盤。
 6. 10Y32/2 黑褐色土。焼成無し、焼く地盤。
 7. 焼成。10Y32/2 黑褐色土。焼成小ブロック、褐色土+ブロック若干残じる。
 a. 鍋体の鋸入部。10Y32/2 黑褐色土。全体に茶色がある。
 b. 10Y32/2 黑褐色土。やや空むけ。後後の鋸入部。
 c. 10Y32/2 黑褐色土。下層の方に褐色土+ブロック多く残じる。
 d. 10Y32/2 黑褐色土。より焼成無い。灰化した部分。

第95図 SI01114 穫穴住居跡(1)

調整手法から同一個体と推定される。459は胸部外面斜位ケズリ、内面ハケメ小口によるナデつけ調整だが、底部に砂粒が付着する「砂底土器」である。454は糸切り無調整のロクロ小壺。須恵器は甕と瓶がある。465、466は大甕面部片で、465は内外平行叩き、466は内面に同心円文を残す。464は長頸瓶の底部で高台が付き、高台内はケズリ調整。外表面は自然釉を被る。467は口縁部を欠く灰釉陶器小瓶。底部は糸切り無調整で、肩から胴上半部に淡緑色の透明釉が掛かる。ほかの遺物では砥石468、470、四面に磨面ある磨石469、鉄製品刀子471、釘状製品472がある。



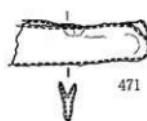
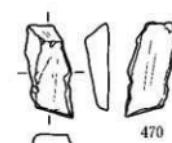
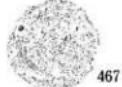
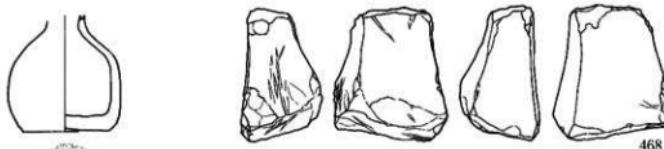
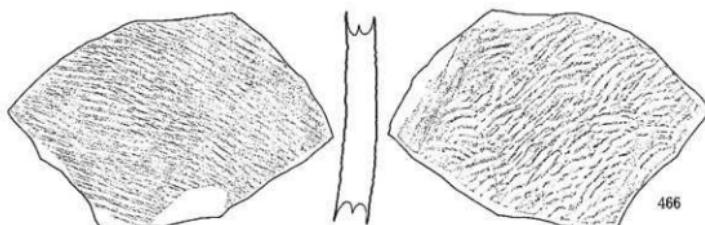
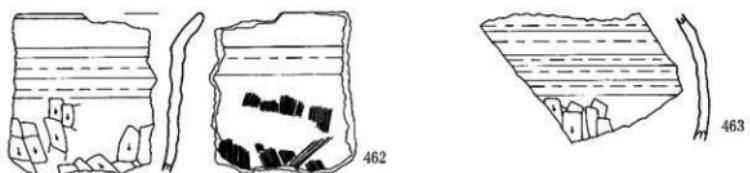
第96図 S101114 積穴住居跡(2)・出土遺物(1)



第97図 SI01114 堅穴住跡出土遺物 (2)



第98図 S101114 穫穴住居跡出土遺物 (3)



第99図 S101114 堪穴住居跡出土遺物 (4)

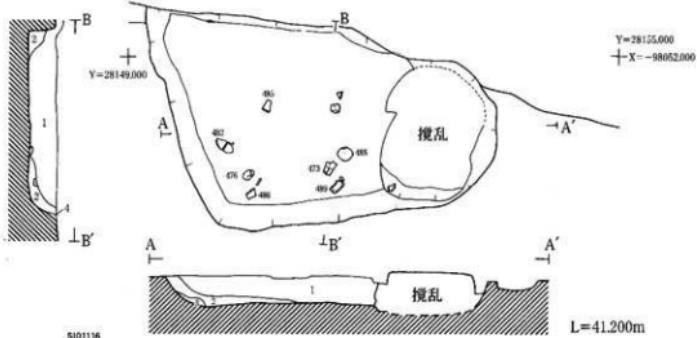
No.	出土地	緯度	经度	標高m	地形	地質	地成	色調	調査		外観判別	備考	
									外観	内面			
418	SD01114 墓土	土塚跡跡	15.0	6.0	5.4	回転系切	やや板石含	黒い にぶい黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	96	97	
419	SD01114 墓土	土塚跡跡	(14.0)	5.5	475	回転系切	やや密	黒い にぶい黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	96	97	
420	SD01114 墓土	土塚跡跡	14.5	5.6	5.3	回転系切	白石英 含	普通	にぶい黒 にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	96	97
421	SD01114 墓土	土塚跡跡	13.7	6.4	44	回転ヘラケツリ	密	普通	にぶい黄 にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98
422	SD01114 墓土	土塚跡跡	14.8	4.9	4.6	回転系切	密 白石英 含	黒い にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98	
423	SD01114 墓土	土塚跡跡	14.7	5.6	5.5	回転系切	やや板 石英含	黒い にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98	
424	SD01114 墓土	土塚跡跡	12.0	5.3	4.6	回転系切 ミガキ	やや板 石英含	黒い にぶい根	ミガキ後黑色地獄	ミガキ後黑色地獄	97	98	
425	SD01114 墓土	土塚跡跡	(14.7)	(6.4)	4.6	回転系切	やや密	黒い にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98	
426	SD01114-B 起点	土塚跡跡	(14.3)	5.7	4.45	回転系切	やや板	普通	にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98
427	SD01114 墓土	土塚跡跡	(15.0)	6.2	5.2	回転系切	やや密	普通	にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98
428	SD01114K2	土塚跡跡	(14.1)	(5.6)	4.9	回転系切	やや板	黒い にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98	
429	SD01114 墓土	土塚跡跡	(14.7)	5.9	4.6	回転系切	やや板 石英含	黒い にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98	
430	SD01114 墓土	土塚跡跡	(19.6)	—	(7.0)	やや板 石英含	普通	浅黃	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98	
431	SD01114B 起点・K2	土塚跡跡	(14.0)	—	(3.2)	やや密	普通	にぶい黒 にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98	
432	SD01114 墓土	土塚跡跡	14.8	—	(3.4)	やや密	普通	にぶい黒 にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98	
433	SD01114K1	土塚跡跡	(16.2)	(6.6)	(4.3)	回転系切	やや密	黒い にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98	
434	SD01114 墓土	土塚跡跡	—	(6.2)	(3.4)	条状切ヘア カズリ	やや密	普通	黒い 根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98
435	SD01114 墓土	土塚跡跡	—	(6.0)	(4.1)	回転系切	密 石英含	普通	にぶい黄 にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98
436	SD01114-B 起点	土塚跡跡	—	(5.0)	(4.2)	不明	やや密	黒い にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98	
437	SD01114 墓土	土塚跡跡	—	(6.0)	(3.9)	回転系切	やや板 石英含	普通	浅黃	ロクロ	ハケメ後黑色地獄	97	98
438	SD01114 墓土	土塚跡跡	—	(6.0)	(1.6)	回転系切	密	普通	にぶい黄 根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98
439	SD01114 墓土	土塚跡跡	—	—	(4.4)	—	密	黒い にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98	
440	SD01114 墓土、駄ナカ	土塚跡跡	—	(5.4)	(1.8)	やや密	黒い 根	普通	ミガキ後黑色地獄	ミガキ後黑色地獄	97	98	
441	SD01114 墓土	土塚跡跡	—	—	(4.2)	やや密	黒い 根	灰黄	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98	
442	SD01114 墓土	土塚跡跡	—	—	(2.8)	—	黒い 根	黒い にぶい黒 根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98	
443	SD01114 墓土	土塚跡跡	—	—	(3.0)	—	やや密	黒い 根	—	ミガキ後黑色地獄	97	98	
444	SD01114B 起点	土塚跡跡	—	—	(3.2)	—	やや密 石英含	黒い にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98	
445	SD01114K1	土塚跡跡	—	—	(2.7)	—	やや密	黒い にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	97	98	
446	SD01114 墓土	土塚跡跡	—	—	(2.1)	物	普通	にぶい黄 根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	98	外観書	
447	SD01114 墓土	土塚跡跡	—	—	(2.7)	—	やや板 石英含	黒い にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	98	外観書	
448	SD01114 墓土	土塚跡跡	—	—	(2.4)	—	やや密	黒い にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	98	外観書	
449	SD01114 墓土	土塚跡跡	—	—	(1.0)	—	やや密	黒い にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	98	外観書	
450	SD01114 墓土	土塚跡跡	—	—	(1.4)	—	やや密	黒い にぶい根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	98	外観書	
451	SD01114 墓土	土塚跡跡	(18.0)	—	(4.3)	菊皮状文	密	黒い にぶい黄 根	ロクロ	ミガキ後黑色地獄	98	高台測定	
452	SD01114 墓土、駄ナカ	土塚跡跡	—	—	(2.6)	ヘラケツリ	やや密	黒い にぶい根	ロクロ	ミガキ	95	98	
453	SD01114 墓土	土塚跡跡	—	—	(7.0)	ケズリ	やや密	黒い にぶい黄 根	ケズリ	ミガキ後黑色地獄	98	98	
454	SD01114 墓土	土塚跡跡	(11.2)	5.8	8.6	回転系切	板 石英含	黒い にぶい根 内：紅色	ロクロ	ロクロ	98	外観書付着	
455	SD01114 墓土	土塚跡跡	(19.1)	—	(9.7)	—	板 石英含	黒い 内：根 内：紅色	ケズリ	ハケメ	98	98	
456	SD01114 駄ナカ	土塚跡跡	(22.0)	—	(7.8)	—	やや板 石英含	黒い にぶい根 内：紅色	ロクロ	ロクロ	98	外観書付着	
457	SD01114 土上	K3	土塚跡跡	—	—	(8.35)	回転系切	板 石英含	普通 内：灰黃	ケズリ	ロクロ	98	外観書付着
458	SD01114 墓土	土塚跡跡	(23.2)	—	(21.0)	—	板 石英含	普通	にぶい黒 内：灰黃	ハケメ状	98	99	
459	SD01114 A・B 駄ナカ	土塚跡跡	(9.8)	(11.0)	移	板 石英含	黒い 内：灰 内：灰黃	ケズリ	ハケメ	98	99		
460	SD01114 墓土	土塚跡跡	(10.0)	(6.3)	不明	やや板 石英含	普通 内：灰黃	外：灰 内：灰黃	ケズリ	ハケメ	98	99	
461	SD01114 墓土	土塚跡跡	—	—	(6.9)	—	やや板 石英含	普通 内：灰黃	ロクロ	ロクロ	98	99	
462	SD01114 墓土	土塚跡跡	—	—	(0.9)	—	板 石英含	普通 内：灰黃	ケズリ・ロクロ	ハケメ、無ナシ。 ロクロ	98	99	

No.	出土地	層級	口径cm	底径cm	高さcm	底部	地土	焼成	色調	側壁		測量名	標高	南北	備考	
										外面	内面					
463	SH01114 墓土	須恵器	—	—	(7.2)	—	やや密	固い	外・内:オーランド 内:灰	ロクロ・ケズリ	ロクロ	99	99			
464	SH01114 墓土	須恵器 破片	—	(10.0)	2.45	直角内ケズリ	密	固い	外・内:オーランド 内:灰黄	ケズリ	ロクロ	99	99			
465	SH01114 D 破片	須恵器	—	—	(6.0)	—	粗	小石	固い	外・内:オーランド 内:灰	タタキ	タタキ	99	99	外表面無	
466	SH01114 墓土	須恵器	—	—	(13.0)	—	粗	固い	灰	タタキ	タタキ	99	99			
467	SH01114 A	灰褐色器 灰褐色器 小瓶	—	5.2	(7.2)	圓錐形切	粗	石英	固い	灰白	施釉	—	99	99		
No.	出土地	層級	直径cm	高さcm	厚さcm	重量g	材質	BB	写真名	その他	—	—	—	—	—	—
468	SH01114	灰石	8.2	7.0	5.1	336.74	—	—	99	99	—	—	—	—	—	—
469	SH01114	奉石	11.8	10.4	9.8	1485.51	—	—	99	99	—	—	—	—	—	—
470	SH01114 墓土	灰石	5.8	2.9	1.2	25.13	—	—	99	99	—	—	—	—	—	—
471	SH01114 墓土	刀子?	8.6	2.8	1.05	38.44	鐵	—	99	99	—	—	—	—	—	—
472	SH01114 墓土	不明鉄製品	2.4	1.3	0.35	1.58	鐵	—	99	99	—	—	—	—	—	—

SI01116 積穴住居跡（第100図・写真図版70）

住居跡 SI01114 の北側に検出した積穴住居跡である。東壁は搅乱で破壊され、北は調査区外に延びている。カマドは検出されていない。現存は東西約3m×南北2.8mである。深さは35cm。埋土は黒褐色土主体のしまりの弱い上で、下位に褐色土ブロック、炭化材がやや多く含まれる。床面は非常に固くしまった地山の褐色土である。一部分、炭化材の混じる黒褐色土でごく薄く貼り床がされている。床面から土壤跡、柱穴は検出できなかった。

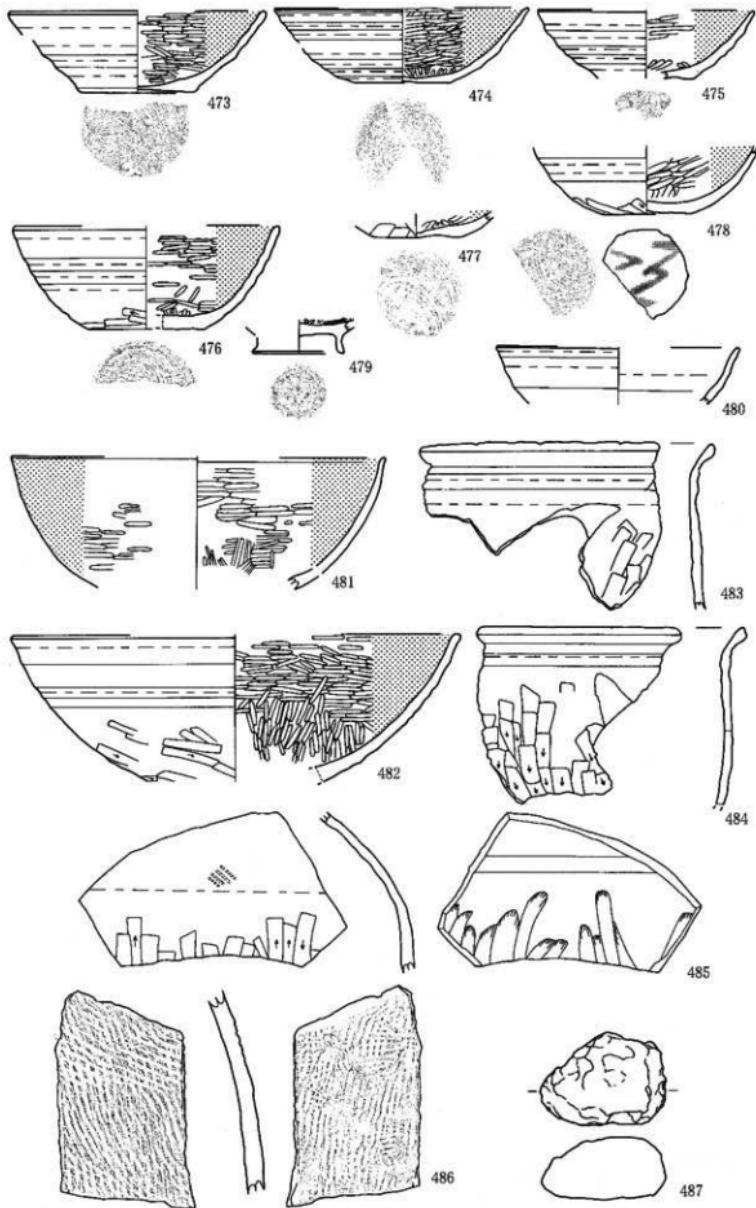
出土遺物（第101・102図・写真図版99・100） 床面付近から大きめの破片が出土しているが、量は多くない。土師器、須恵器、須恵器系土器、磨石がある。土師器は壺、高台壺、鉢、甕がある。壺は底部糸切り無調整で、内面調整、黒色処理は他の例と同様であるが、478のみ糸切り後ケズリ調整を行う。この壺の底部外面には「門」構えに似た墨書きがある。高台壺479の高台内はロクロナデで調整される。鉢482は口径27.6cmの大鉢、481は口縁部内外面を横位ミガキする内外黒色のB類土器である。甕はロクロ成形で外面は継のケズリが施される。480は胎土砂質の須恵器系土器である。須恵器には甕があり、486は大甕の胴部片で、外面叩きは平行文を交差させ、内面は平行文後、蓮蘿文叩きを行う。488と489は磨石で、後者は底石に転用された可能性がある。前者は凹みがある。487は焼成粘土塊である。



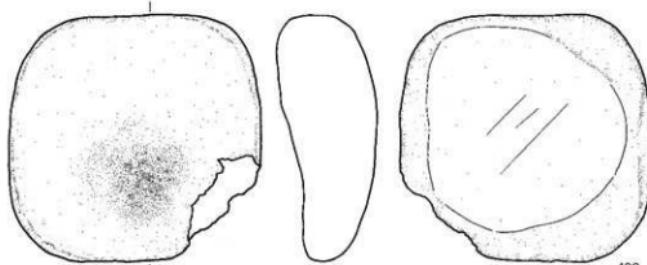
SI01116

1. 1P132/3 黒褐色土。褐色土粘、炭化材、鉢底粘、土被片含む。堅性なし、しりめ。
2. 1P132/2 黑褐色土。褐色土ブロック多くひび、炭化材、鐵、粒合3合。堅性なし、しりめ。
3. 1P132/7 黑褐色土に褐色土ブロック多く入る遺土。堅性やあり、しりめ。
4. 1P132/4 黑褐色土と褐色土の混合土。堅性なし、しりめやあり。

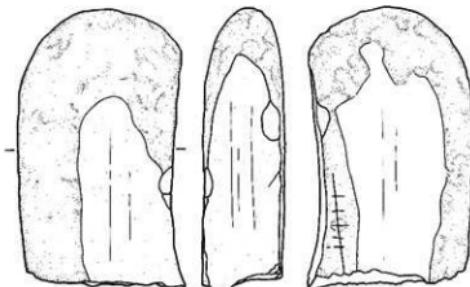
第100図 SI01116 積穴住居跡



第101図 S101116 壁穴住居跡出土遺物（1）



488



489

第102図 SI01116 壁穴住居跡出土遺物 (2)

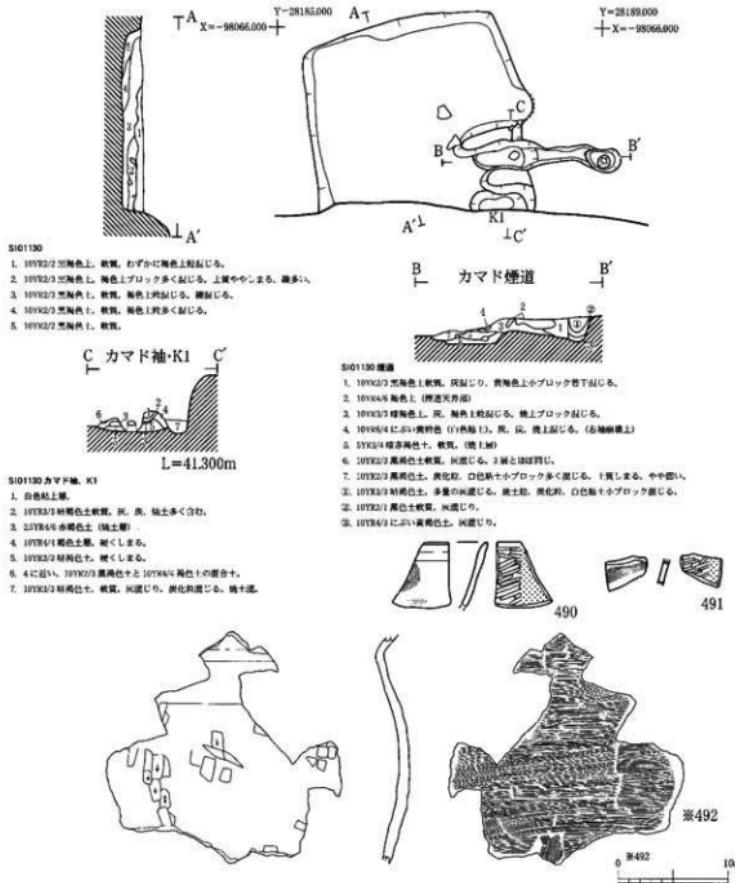
() は推定径、残存高

No.	出 土 地	断 面	口径 cm	底径 cm	断面 cm	成 部	胎 土	焼成	色 調	調 整		回収番号	保 存 高	備 考	
										外 囲	内 围				
473	SI01116 壁上	土師器坏	15.88	7.8	5.0	四輪糸切	やや密	固い	にぶい褐	ロクロ	ミガキ後黑色整理	101	99		
474	SI01116 壁土	土師器坏	15.7	6.0	4.65	四輪糸切	やや密	普通	にぶい褐	ロクロ	ミガキ後黑色整理	101	99		
475	SI01116 壁土	土師器坏	13.4	(8.0)	(4.2)	四輪糸切	やや密	普通	固い	高灰	ロクロ	ミガキ後黑色整理	101	99	
476	SI01116 壁土	土師器坏	16.2	(6.8)	6.4	四輪糸切	やや粗 多空	普通	普通	ロクロ	ミガキ後黑色整理	101	99		
477	SI01116 壁土	土師器坏	—	5.2	1.25	四輪糸切	やや粗	普通	にぶい褐	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黑色整理	101	99		
478	SI01116 壁土	土師器坏	—	5.0	(4.2)	四輪糸切	やや粗 石英合	固い	浅	ロクロ	ミガキ後黑色整理	101	100	底部に墨書	
479	SI01116 壁上	土師器陶片	—	(5.0)	(2.1)	四輪ナデ	やや粗 小石合	普通	灰白	ロクロ	ミガキ後黑色整理	101	100		
480	SI01116 壁土	陶器系土器坏	15.89	—	(3.5)	四輪ナデ	やや粗 小石合	固い	外：淡黄褐 内：にぶい	ロクロ	ロクロ	101	100		
481	SI01116 壁土	土師器坏	23.0	—	(6.1)	—	やや粗 小石合	普通	浅黄褐	ミガキ後黑色整理	ミガキ後黑色整理	101	100	黑色底滅	
482	SI01116 壁土	土師器坏	27.0	—	(6.0)	—	やや粗 小石合	固い	にぶい褐	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黑色整理	101	100		
483	SI01116 壁上	土師器坏	—	—	(10.2)	—	やや粗 小石合	普通	灰白	ロクロ・ケズリ	ロクロ	101	100	外側埋付兼	
484	SI01116 壁土	土師器坏	—	—	(10.0)	—	やや粗 石英合	固い	外：にぶい褐 内：無	ロクロ・ケズリ	ロクロ	101	100	外側埋付兼	
485	SI01116 壁土	直壁器坏	—	—	(9.1)	—	やや粗 小石合	固い	灰白	ケズリ	無ナデ	101	100		
486	SI01116 壁土	直壁器坏	—	—	(12.0)	—	やや粗 小石合	固い	外：暗緑灰 内：綠灰	タタキ	タタキ	101	100		
No.	出 土 地	断 面	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重 量 g	石 質	國	表真面	そ の 他					
487	SI01116	粘土	5.8	7.75	4.0	142.22									
488	SI01116	磨石(凹)	15.1	15.4	6.1	2083									
489	SI01116	磨石	17.1	10.0	5.8	1634.72									

S101130 穫穴住居跡 (第103図・写真図版70・71)

F区中央から検出された、東西2.7m×南北(2.5)m以上の東カマドの竪穴住居跡である。南壁は調査区分外に延びており調査できなかった。深さは25cm。埋土は黒褐色に炭化材と焼土が含まれる、しまりの弱い土である。カマドの残りはよい。煙道の長さは1m。煙出し部分は40cm掘り込まれている。

出土遺物 (第103図・写真図版101) 土師器がある。490と491は壊で、口縁部内面を横位ミガキし黒色処理する。外面に墨痕あるも字形不明。壺492はロクロ成形で外面縦ケズリ、内面ロクロによる細かいハケ目調整。



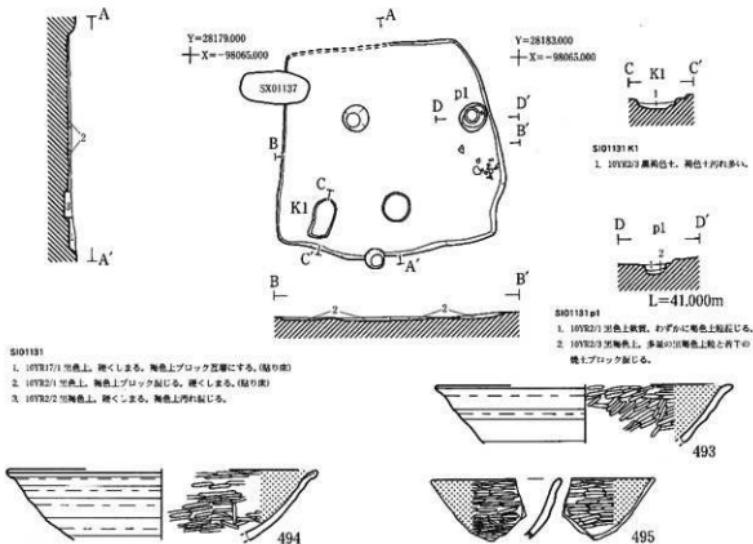
第103図 S101130 穫穴住居跡

No.	出上地	器種	口径cm	底径cm	高さcm	底形	断土	焼成	調査		回収品目	回収品名	参考
									外面	内面			
499	SB01130 K1	土師器坏	-	-	(4.0)	やや密	固い	にかい表面	ロクロ	ミガキ後黑色處理	103	101	外面墨書き
491	SB01130 球セ	土師器坏	-	-	(1.7)	密	固い	にかい表面	ロクロ	ミガキ後黑色處理	103	101	外面墨書き
492	SB01130 球セ	土師器坏	-	-	(1.8)	やや密 石突合	密	外:明褐色 内:白	ケズリ	ハゲメ	103	101	外面墨書き

S101131 壁穴住居跡（第104図・写真図版71・72）

住居跡 S101130 の西側にあり、検出段階で東西 2.7m × 南北 2.25m、深さ 2cm ~ 10cm とほとんど床面であった。宅地化による削平が原因である。平面形は不整形で、カマドはない。北西隅は新しい土壌跡 SX01137 に重複する。床面から柱穴状ピット p1 を検出した。

出土遺物（第104図・写真図版101） 土師器坏がある。495 は内外黒色の B類土器で、口縁部内外面を横位ミガキする小椀であろう。494 は内面を横位ミガキする椀形式の坏で、口縁端部を玉縁状に肥厚させる。493 の口縁部内面ミガキは斜位になされる。



第104図 S101131 壁穴住居跡

No.	出上地	器種	口径cm	底径cm	高さcm	底形	断土	焼成	調査		回収品目	回収品名	参考
									外面	内面			
493	SB01131 球セ	土師器坏	(8.2)	-	(3.5)	やや密 小石合	固い	機	ロクロ	ミガキ後黑色處理	104	101	
494	SB01131 球セ	土師器坏	(8.0)	-	(4.3)	やや密 石突合	固い	灰黃褐色	ロクロ	ミガキ後黑色處理	104	101	口縁玉縁状に肥厚
495	SB01131 東北底皿	土師器坏	-	-	(3.7)	やや密	固い	ミガキ後黑色處理	ミガキ後黑色處理	104	101		

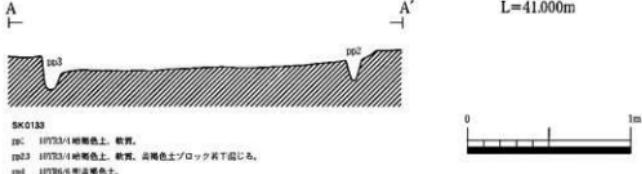
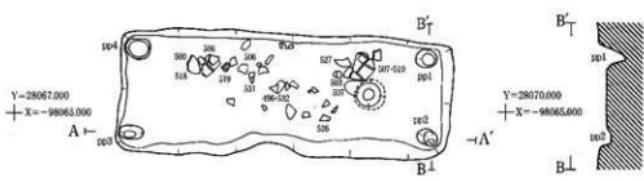
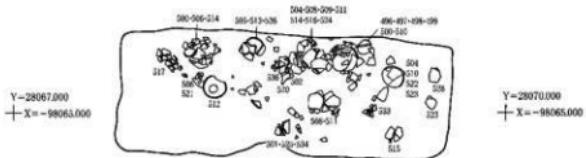
ii) 土壌跡

SK0133 土器溜り（第105図・写真図版72）

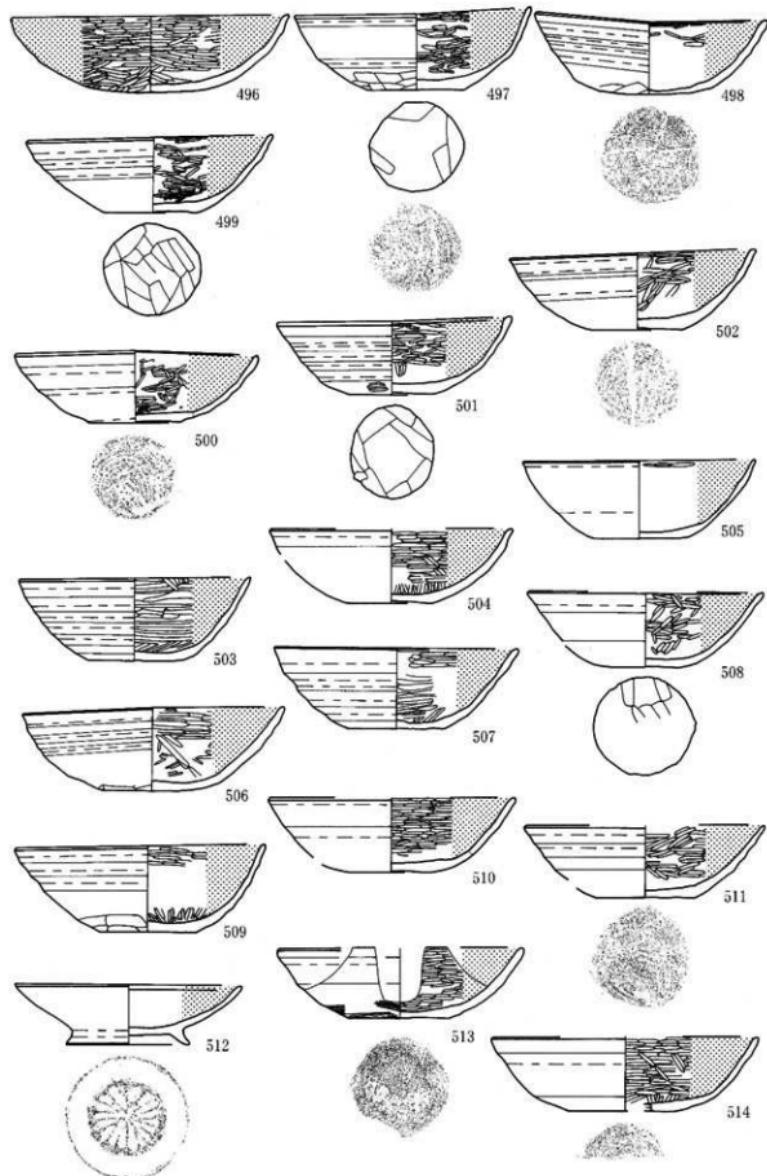
調査区西端に検出した浅い土壌跡である。土壌跡北壁は後述の掘立柱建物跡 SB0144 南側柱と接する

かたちとなるが、直接の重複関係は不明である。表土下 20cm ほどで検出され、この段階から土器片が多量に出土していた。規模は東西 2.05m × 南北 0.75m の隅丸長方形で、深さは現状で 10cm 弱あり、耕作により大方が削平されたと判断した。埋土は黒褐色土で焼土・炭化材・黄褐色土粒が混じる。出土遺物が多かったため埋土を半截して観察することができなかった。土器はすべて内黒の土師器壺で、1 点高台壺がある。壺は正位の状態で何枚も重ねておかれたようである。確認できたところでは、上から 496, 497, 498, 499 の順で 4 枚重なるものがある。土器を取り上げながら精査を進めたところ、四隅に小穴があることが確認された。径 10 ~ 15cm、深さ約 10cm で、底面が狹まる杭穴のような小穴である。土壤跡の四隅に杭状の小柱を立てた可能性がある。

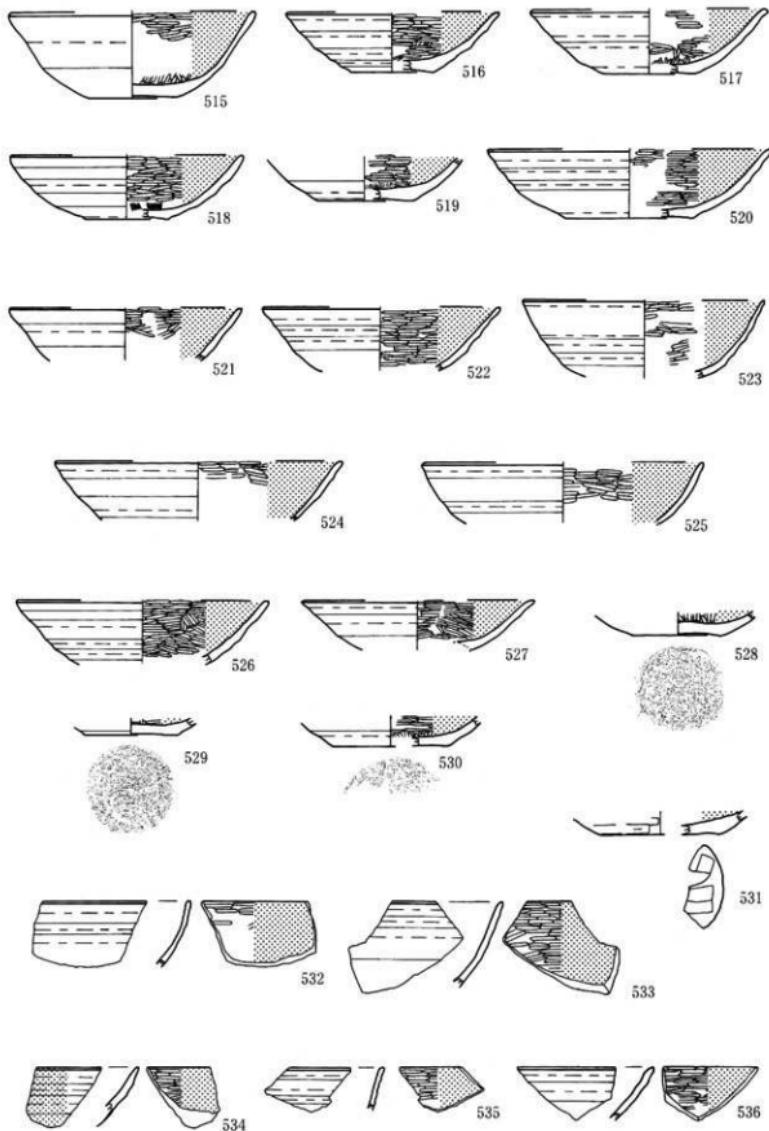
出土遺物 (第 106・107 図・写真図版 101・102) 遺物は高台壺 1 点のほかはすべて土師器壺で、40 個体以上ある。ほとんどの土器が風化を受け、器面が剥落するものが多く、土器が長時間風雨に晒されている状況を示す。壺は底部糸切り無調整とヘラケズリ調整の 2 種があり、約 1/3 がケズリ調整をもつ。内面ミガキは口縁部横位、見込み放射状が基本で、内面は黒色処理される。墨書きはない。このうち 497, 506, 507, 513, 531 の底部は全面不定方向ケズリがなされる。内面ミガキでは連弧状が 527, 526, 519、見込みに及ばない 501, 497, 511, 520、また見込みに不定方向の粗いミガキがなされる 518 がある。524 は口縁部内面ミガキが微密な口径 17.3cm の大椀形式の壺である。496, 534 は内外黒色の B 類土器で、496 は口径 16.9cm の楕形式で、底部をケズリで丸底風にしてミガキを施す。534 は外面ミガキが口縁端部だけで、全面に及ばない。高台壺 512 は高台内に菊花文状を残す完形土器である。



第 105 図 SK0133 土器窪り



第106図 SK0133 土器層出土遺物（1）



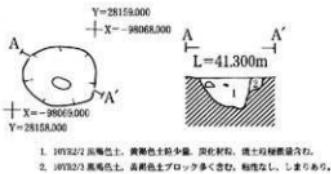
第107図 SK0133 土器溜り出土遺物 (2)

No.	目 土 席	器 形	口径cm	底径cm	器高cm	底 部	胎 土	施 成	色 調	調 性		記録番号	考	
										外 画	内 画			
496	SK0133	土師壺	16.5	-	4.8	ミガキ	素	普通	無	ミガキ後黑色處理	ミガキ後黑色處理	106	101	
497	SK0133	土師壺	14.4	5.7	5.1	回転系切削 ケズリ	やや粗	固い	にふい・黃緑	クロコ・ケズリ	ミガキ後黑色處理	106	101	
498	SK0133	土師壺	14.2	6.0	5.0	回転系切削	やや粗	普通	淡黄緑	クロコ・ケズリ	ミガキ後黑色處理	106	101	
499	SK0133	土師壺	14.9	5.9	4.8	ケズリ	やや粗	普通	淡黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	106	101	
500	SK0133	土師壺	14.8	5.6	4.6	回転系切削	やや粗	軟質	淡黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	106	101	
501	SK0133	土師壺	14.2	5.1	4.8	ヘラケズリ	やや粗	圓い	淡黄緑	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黑色處理	106	101	
502	SK0133	土師壺	15.6	5.5	4.9	回転系切削	やや粗	圓い	淡黄緑	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黑色處理	106	101	
503	SK0133	土師壺	14.1	5.8	5.1	回転系切削	やや粗	圓い	淡黄緑	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黑色處理	106	101	
504	SK0133	土師壺	14.0	5.6	5.0	回転系切削	やや粗	普通	淡黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	106	101	
505	SK0133	土師壺	14.0	5.4	4.7	不明	素	小石 等合	軟質	淡黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	106	101
506	SK0133	土師壺	15.9	6.0	5.2	ヘラケズリ	やや粗	軟質	淡黄緑	ケズリ	ミガキ	106	101	
507	SK0133	土師壺	14.8	5.7	4.9	ヘラケズリ	やや粗	小石等合	軟質	淡黄緑	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黑色處理	106	101
508	SK0133	土師壺	14.0	6.0	4.5	ヘラケズリ	やや粗	普通	淡黄緑	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黑色處理	106	101	
509	SK0133	土師壺	15.2	5.7	5.4	ケズリ	小石 等合	圓い	淡黄緑	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黑色處理	106	101	
510	SK0133	土師壺	11.0	5.8	5.6	回転系切削	小石 等合	普通	淡黄緑	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黑色處理	106	101	
511	SK0133	土師壺	14.0	6.0	4.4	回転系切削	やや粗	普通	にふい・黃緑	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黑色處理	106	101	
512	SK0133	土師壺	13.8	7.5	3.8	垂状文	素	圓い	瘦	ロクロ	ミガキ後黑色處理	106	101	
513	SK0133	土師壺	13.0	6.6	4.2	ケズリ	素	やや硬い	にふい・黃緑	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黑色處理	106	102	
514	SK0133	土師壺	16.0	6.0	4.5	回転系切削	やや粗	軟質	淡黄緑	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黑色處理	106	102	
515	SK0133	土師壺	14.9	6.2	5.2	不明	やや粗	普通	淡黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	
516	SK0133	土師壺	12.0	6.0	3.6	無切削	やや粗	やや硬い	にふい・黃緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	
517	SK0133	土師壺	14.0	6.0	3.9	ケズリ	やや粗	普通	灰白	ロクロ・ヘラケズリ	ミガキ後黑色處理	107	102	
518	SK0133	土師壺	14.0	6.0	3.9	回転系切削	無切 石英等合	やや硬い	淡黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	
519	SK0133	土師壺	14.0	6.0	3.8	回転系切削	無切 石英等合	やや硬い	淡黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	
520	SK0133	土師壺	11.0	-	3.6	ケズリ	無切 石英等合	やや硬い	淡黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	
521	SK0133	土師壺	17.0	6.0	4.2	不明	無切 石英等合	普通	にふい・黃緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	
522	SK0133	土師壺	14.0	-	3.2	ケズリ	やや粗	やや硬い	瘦	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	
523	SK0133	土師壺	14.0	-	3.0	素	小石 等合	普通	にふい・黃緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	
524	SK0133	土師壺	14.0	-	3.7	無切 石英等合	無切 石英等合	軟質	にふい・黃緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	
525	SK0133	土師壺	17.0	6.0	4.2	不明	無切 石英等合	普通	にふい・黃緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	
526	SK0133	土師壺	14.0	-	3.2	ケズリ	やや粗	やや硬い	瘦	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	
527	SK0133	土師壺	14.0	-	3.0	無切 石英等合	素	普通	にふい・黃緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	
528	SK0133	土師壺	14.0	-	3.6	シルト質	やや粗	やや硬い	にふい・黃緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	
529	SK0133	土師壺	-	5.3	3.4	回転系切削	やや粗	やや硬い	にふい・黃緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	
530	SK0133	土師壺	-	5.5	3.0	回転系切削	小石 等合	やや硬い	瘦	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	
531	SK0133	土師壺	-	5.0	3.0	回転系切削	素	良 等合	軟質	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	
532	SK0133	土師壺	-	5.0	3.0	回転系切削	素	良 等合	軟質	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	
533	SK0133	土師壺	-	5.0	3.0	ケズリか	素	良 等合	灰	ケズリ	ミガキ後黑色處理	107	102	
534	SK0133	土師壺	-	-	4.0	無切 石英等合	やや粗	やや硬い	淡黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	
535	SK0133	土師壺	-	-	4.0	無切 石英等合	素	やや硬い	にふい・黃緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	
536	SK0133	土師壺	-	-	3.0	無切 石英等合	素	やや硬い	淡黄緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	107	102	

() は推定値、残存部

SK0120 土壙跡 (第108図・写真図版73)

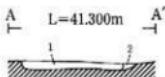
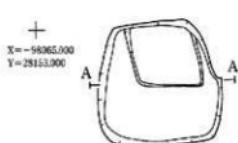
A区に検出した開口部東西90cm×南北75cm、底部径25cm×10cm、深さ40cmの、極端に描鉢状の土壙跡である。埋土は黄褐色土混じりの黒褐色土、遺物は土師器の小破片が数点出土した。



第108図 SK0120 土壙跡

SK0121 土壙跡 (第109図・写真図版73)

土壙跡SK0120の北西方から検出された開口部東西1.5m×南北1.5m、底径1.4m×1.4m、深さ10cmの隅丸方形の土壙跡である。底面にさらに10cmほどの浅い落ち込みが見られる。埋土は黄褐色土混じりの黒褐色土である。土師器・須恵器が少量出土している。

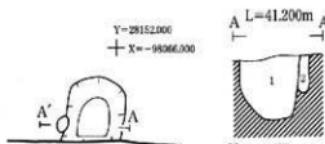


1. 10Y3/2-2 黑褐色土、黄褐色土ブロック多く含む、粘性なし、しまりあり。
2. 10Y3/2-1 黑褐色土、黄褐色土少々含む、粘性なし、しまりややあり。

第109図 SK0121 土壙跡

SK0122 土壙跡 (第110図・写真図版73)

調査区南壁に一部かかる形でSK0121の南西側から検出した。調査区内において開口部東西80cm×南北70cm、底部径45cm×40cm、深さ70cmである。南端は調査区外に延びている。埋土は褐色土ブロック混じりの黒褐色土で、西側でAP15を切っている。土師器の小片がわずかに出土している。



第110図 SK0122 土壙跡

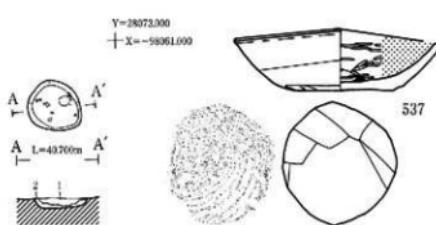
SK0134 土壙跡 (第111図・写真図版73)

B区西側に検出した土壙跡である。

検出段階で遺物の出土がみられたので、土器窯裏かとも考えて調査を進めたが、違うことが判明した。開口部0.65m×0.6mのほぼ円形の土壙跡で、深さは25cmである。埋土は黒褐色土である。

出土遺物 (第111図・写真図版102)

土師器窯537がある。手捏ね土器で、器体は歪む。底部は静止糸切り後一定



第111図 SK0134 土壙跡

方向にケズリを行う内黒土器で、内面ミガキは口縁部に弱い横ミガキがあるが見込みには及ばない。

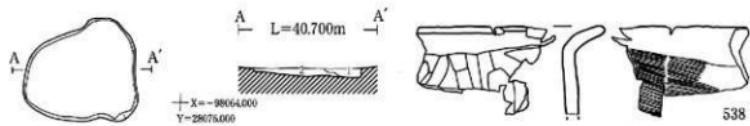
No.	埋土種	基 準	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底 土	焼成	色 調	測量		測量番号	測量員
									外 面	内 面		
537	土師器窯		12.7	7.4	3.75	砂質、粗	普通	浅青灰	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黒色處理	111 102	井口クロ

() は推定値、残存器表

SK0135 土壙跡（第112図・写真図版74）

住居跡 SI0140 の南側に検出したやや楕円形の土壙跡である。開口部は東西 1.35 m × 南北 1.1m、深さは 20cm で、埋土は暗褐色と黄褐色のシルトである。

出土遺物（第112図・写真図版102） 土師器甕 538 がある。非クロクロで口縁部は横ナデ、胸部縱方向ケズリ調整。口縁部が「く」の字に外反する特徴がある。



1. 10YR3/2 黄褐色シルト質土。黄褐色ブロック状。炭化物含む。粘性なし。しまり無し。
2. 10YR2/2 黄褐色シルト質土に暗褐色土ブロックが入る層。炭化物鉱。土器片含む。粘性なし。しまり無し。

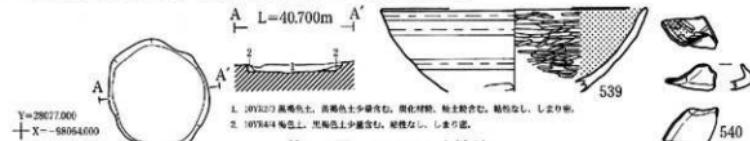
第112図 SK0135 土壙跡

No.	当 土 塚	器 様	口徑 cm	底径 cm	基高 cm	底 深	熱 土	焼成	色 調	調 整		回収番号	回 収 管	備 考
										外 面	内 面			
538	SK0135	土師器甕	—	—	低窓	—	灰	石英 多含	外:10YR4/2 内:10YR4/2	ケズリ	横ナデ・ハケメ状 柱き取り	112	102	

SK0136 土壙跡（第113図・写真図版74）

住居跡 SI0140 と SI0145 の間に検出した土壙跡である。東西 1.15m × 南北 1.35 m のやや楕円形の土壙跡で、深さは 20cm である。埋土は黒褐色土と褐色土であった。

出土遺物（第113図・写真図版102） 土師器甕 539 と耳皿 540 がある。539 は内黒で内面は横ミガキ、540 は内黒で内面ミガキの高台部を欠くもの。外面は無処理。



第113図 SK0136 土壙跡

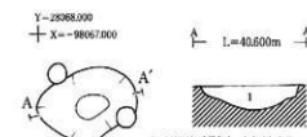
No.	当 土 塚	器 様	口徑 cm	底径 cm	基高 cm	底 深	熱 土	焼成	色 調	調 整		回収番号	回 収 管	備 考
										外 面	内 面			
539	SK0136	土師器甕	10.2	—	(1.0)	—	中や粗	固い	10YR4/2 内:10YR4/2	ロクロ	ミガキ無黒色處理	112	102	
540	SK0136	土師器耳皿	—	—	(1.7)	—	中や粗 石英含	普通	灰白	ロクロ	ミガキ無黒色處理	112	102	

SK0137 土壙跡（第114図・写真図版74）

B 区南西部にある土壙跡で、東西 1.2 m × 南北 0.9m の楕円形の土壙跡である。深さ 30cm、底面は径 40cm ほどの円形で、埋土は暗褐色土である。柱穴ビットとの重複がある。出土遺物はない。

SK0142 土壙跡（第115図・写真図版74）

住居跡 SI0140 のすぐ東側にある土壙跡で、開口部南北 1.0 m × 東西 0.8m、深さ 10cm のやや楕円形である。黒褐色土の埋土である。土師器の破片が少量出土している。



第114図 SK0137 土壙跡



第115図 SK0142 土壙跡

SK0147 土壙跡 (第116図・写真図版75)

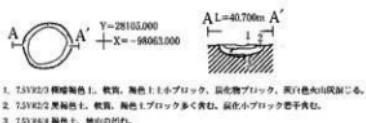
B区中央付近で検出した土壙跡である。形状は方形で、開口部径東西 0.55m × 南北 0.55m、深さ 20cm である。埋土には焼土と炭化材が混じる。土師器の破片が少量出土している。



第116図 SK0147 土壙跡

SK0149 土壙跡 (第117図・写真図版75)

B区東側にある土壙跡で、開口部径 0.6m、深さ 25cm、ほぼ円形である。埋土には灰白色火山灰を含む。土師器坏・甕の破片が少量出土した。



第117図 SK0149 土壙跡

SK0169 土壙跡 (第118図・写真図版75)

Tピット SK0163 の西側に重複する円形の土壙跡である。開口部東西 0.8m × 南北 0.75m、深さ 30cm、黒褐色土が埋土である。

出土遺物 (第118図・写真図版102) 土師器坏・甕の破片と鉄製品がある。541 は長さ 2.4cm の鉄製品だが、形態、用途不明。

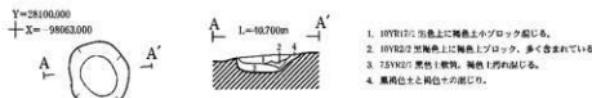


第118図 SK0169 土壙跡

No.	出土地	面積	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	材質	ID	写真	その他
541	SK0169	不明鉄製品	24	18	0.5	285	鉄	118	102	

SK0171 土壙跡 (第119図・写真図版76)

井戸跡 SX0153 と重複する土壙跡である。開口部径南北 0.85m × 東西 0.75m、深さ 30cm である。



第119図 SK0171 土壙跡

SK0174 土壙跡 (第120図・写真図版76)

開口部南北 0.95 m × 東西 0.85m、底径は 0.7 m × 0.55m、深さは 45cm である。土壙跡 SX0175 と重複している。埋土の黒褐色土には焼土が混じる。

出土遺物 (第120図・写真図版102) 土師器坏と甕がある。坏はすべて底部全面不定方向ケズリで、ケズリ調整は体部下端まで及ぶ。内黒の口縁部内面は横位、見込みは放射状ミガキだが、544 は連弧状ミガキである。甕 547 は底部糸切り無調整、外面は綫ケズリで面取りを行い、内面はハケ目状具による搔き取り調整。

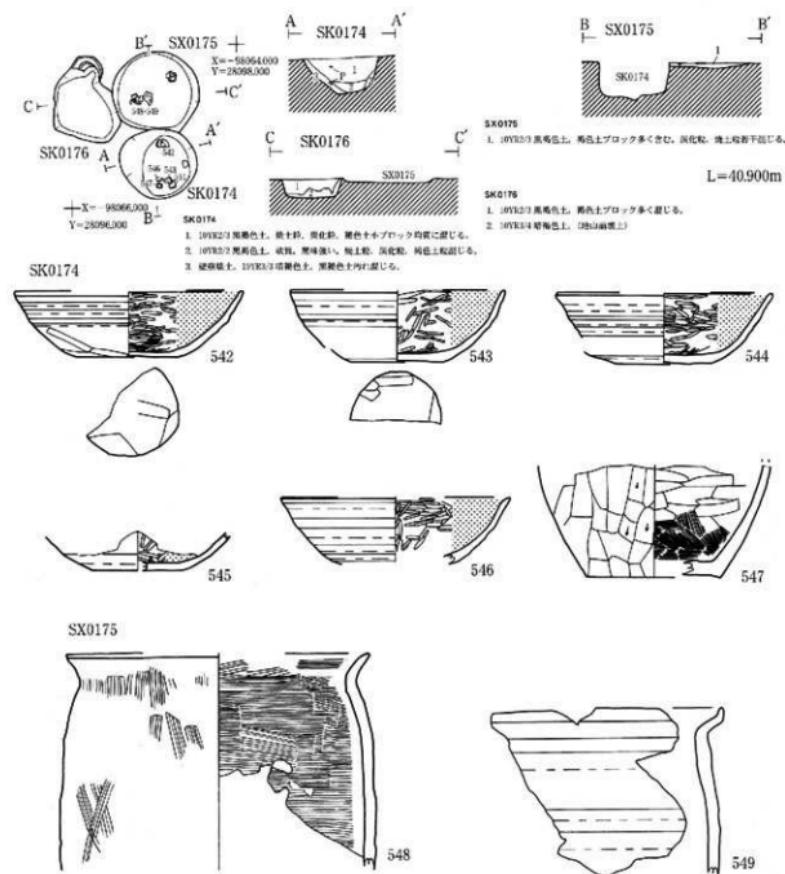
SX0175 土壙跡 (第120図・写真図版76)

開口部東西 1.05 m × 南北 0.95m、深さ 10cm ほどの浅い土壙跡である。焼土の広がりを掘り下げたところ土壙跡になった。埋土は褐色混じりの黒褐色土である。土壙跡 SK0174・0176 との重複する。

出土遺物 (第120図・写真図版103) 土師器壺がある。549 はロクロ成形、548 は非ロクロで、外面は頸部から胴部にかけて縦の細かいハケ目、内面は横に細かいハケ目が施される。

SK0176 土壙跡 (第120図・写真図版77)

開口部南北 1.0 m × 東西 0.8m、底径 0.7 m × 0.65m の不整形の土壙跡である。深さは 20cm で、埋土は褐色混じりの黒褐色土である。土壙跡 SK0175 と重複している。土師器の破片が出土している。

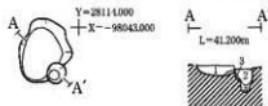


第120図 SK0174・SX0175・SK0176 土壙跡

No.	出土地	基 神	口幅 cm	底深 cm	基高 cm	底 部	地 士	地成	色 調	調 查		測定番号	測定員	備 考
										外 面	内 面			
542	SK0174	土師器跡	(13.0)	16.0	4.85	ケズリ	やや粗	圓い	にぶい黒鐵	ロクロ・ケズリ	ミガキ黒褐色地理	129	102	地熱により内側 とぶ
543	SK0174	土師器跡	(13.0)	15.5	4.4	ケズリ	やや粗	圓い	にぶい黒鐵	ロクロ	ミガキ黒褐色地理	129	102	地熱により内側 とぶ
544	SK0174 墓土	土師器跡	13.2	5.8	4.35	ケズリ	やや粗	圓い	にぶい黒鐵	ロクロ	ミガキ黒褐色地理	129	102	
545	SK0174 墓土	土師器跡	-	(5.0)	(2.3)	ケズリ	やや粗	圓い	にぶい黒鐵	ロクロ	ミガキ黒褐色地理	129	102	
546	SK0174 墓土	土師器跡	-	(4.0)	(4.1)	ケズリ	やや粗	圓い	にぶい黒鐵	ロクロ	ミガキ黒褐色地理	129	102	外面焼付帶
547	SK0174 墓土	土師器跡	-	(0.2)	(0.8)	開掘面切	やや粗	圓い	にぶい黒鐵	ロクロ	ミガキ黒褐色地理	129	102	外側焼付帶
548	SX0175 墓土	土師器跡	(18.0)	-	(13.2)	ケズリ	やや粗	圓い	にぶい黒鐵	ロクロ	ハケメ焼付取り	129	102	
549	SX0175 墓土	土師器跡	-	-	(16.0)	ケズリ	やや粗	圓い	にぶい黒鐵	ロクロ	ハケメ焼付取り	129	102	

SK01103 土壙跡 (第121図・写真図版77)

D区北端寄りに検出した、開口部東西 0.75m × 南北 0.65m、深さ 20cm の不整形の土壙跡である。埋土はしまりのある黒褐色土である。南側を柱穴状ピットに切られている。



第121図 SK01103 土壙跡

SK01135 土壙跡 (第122図・写真図版77)

住居跡 SI01131 の北東方に隣接する、東西 4.5m × 南北 5.5m、深さ 20cm の方形の土壙跡である。埋土は褐色土混じりの黒褐色土である。出土遺物はない。

1. 10Y2/2 黒褐色土に褐色土小プロックや多く混じる。土質や結構くしめる。
2. 10Y2/7 褐色土混じる。褐色土プロック混じる。
3. 10Y4/4 褐色土混じる。
- a. 10Y4/4 褐色土岩内れる。



第122図 SK01135 土壙跡

SX01136 土壙跡 (第123図・写真図版77)

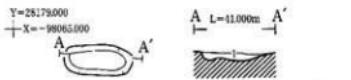
F区北西コーナーに検出した土壙跡で、開口部東西 0.7m × 南北 2.3m、深さ 20cm の長方形である。埋土は黒褐色土主体である。出土遺物はない。



第123図 SX01136 土壙跡

SK01137 土壙跡 (第124図・写真図版78)

住居跡 SI01131 の北西コーナーに重複する、東西 0.85m × 南北 0.4m、深さ 5cm の浅い土壙跡である。埋土は黒褐色土と褐色土の混土である。



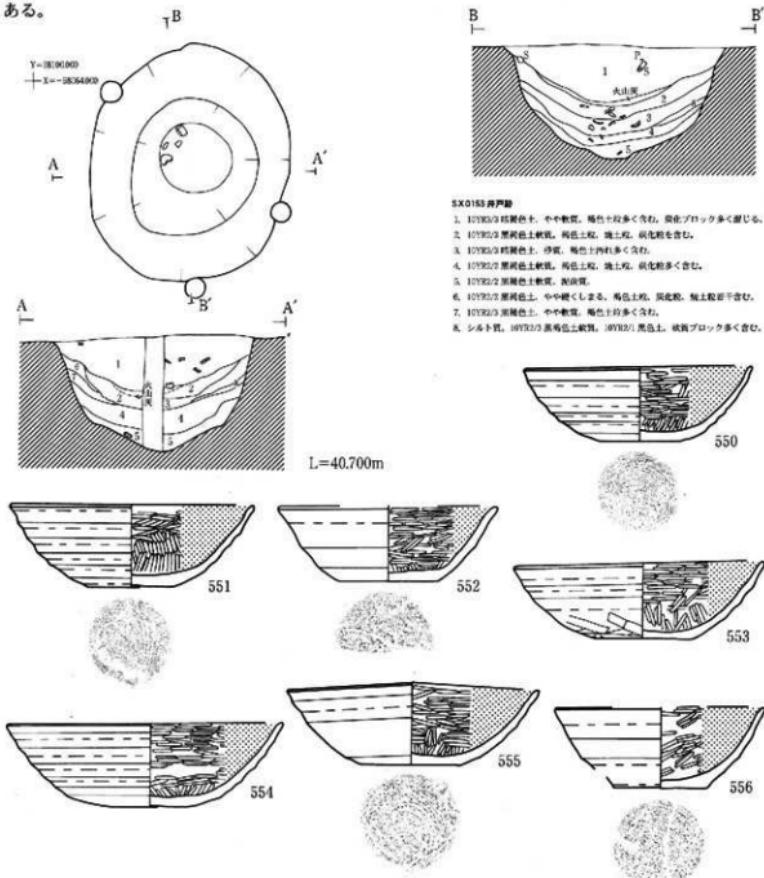
第124図 SK01137 土壙跡

iii) 井戸跡

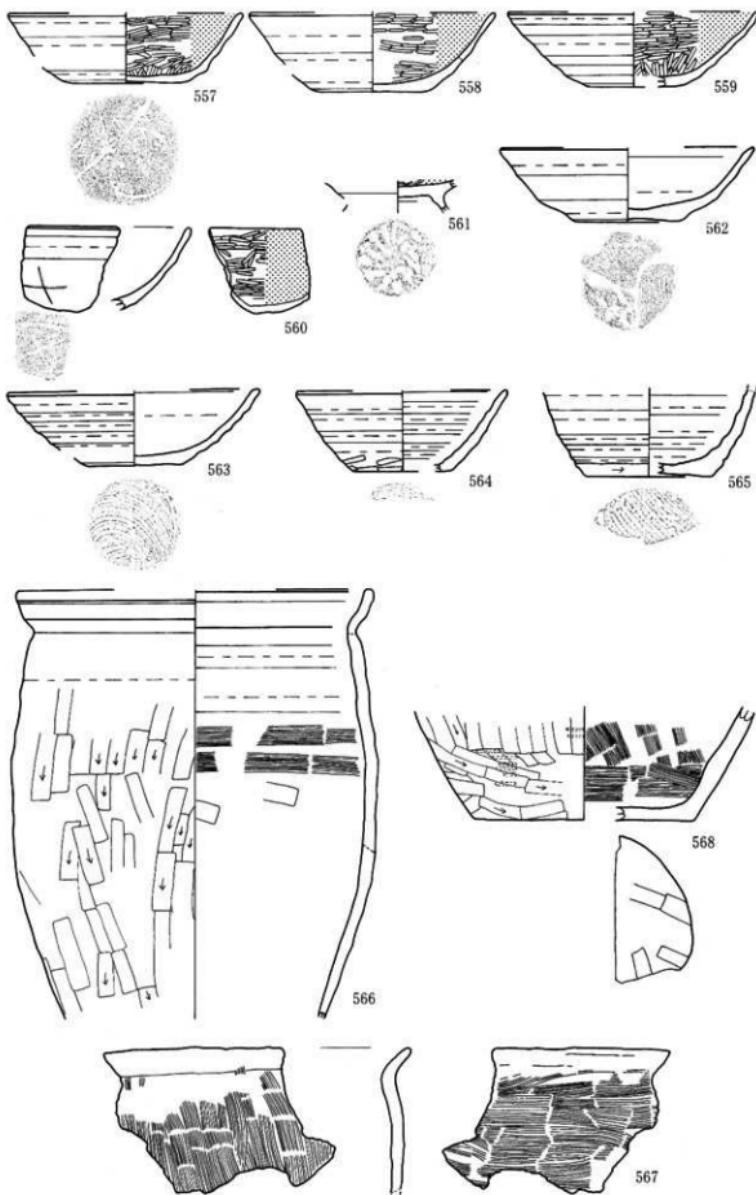
SX0153 井戸跡 (第125図・写真図版78)

B区東側に検出した、開口部 2.9 m × 2.45m のほぼ円形の素掘りの井戸跡である。深さは 140cm だが、底部径が 0.85 m × 0.9m と、擂鉢状を呈する。底面近くの壁は赤褐色の酸化鉄の集積が見られる。埋土は黒褐色土主体で遺物が混入する。井戸枠等の施設はなく、湧き水ではなく、天水を溜めるための井戸であったと考えられる。

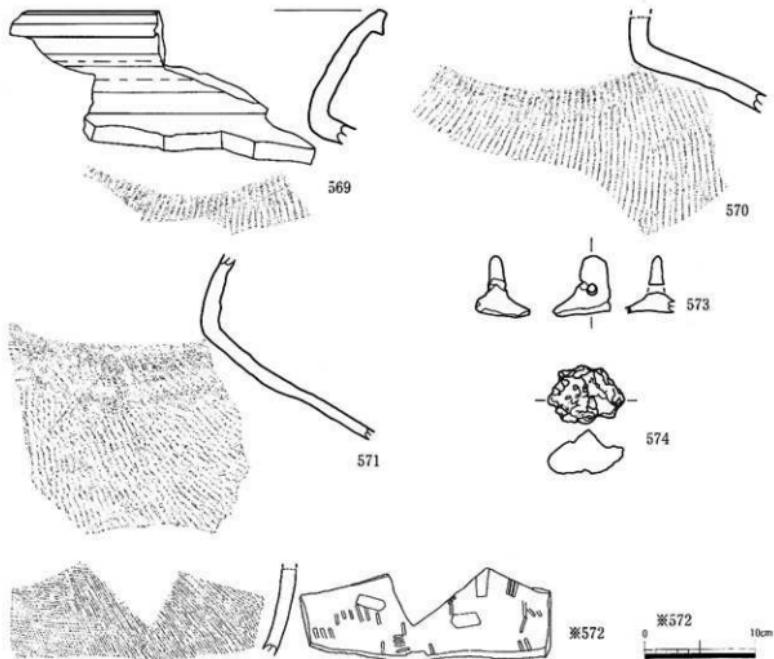
出土遺物（第125～127図・写真図版103・104） 出土遺物は多く、土師器、須恵器、須恵系土器がある。うち土師器が70%を占める。ほかに鉄滓がある。土師器では壺、高台壺、甕、土製品がある。壺は底部糸切り無調整が主体で、内面ミガキは口縁部横位、見込み放射状、黒色処理であるが、553、554、558、559は底部が全面不定方向ケズリ調整で、562は非内黒。554は口径16.7cmの椀形式である。560の外面部口縁部下端には焼成後に付けられた「X」の線刻がある。高台壺561は高台内に菊花状文を残す内黒だが、高台部と身の胎土と色調に極端な差がある。甕は566がロクロ大甕、567が内外ハケ目調整の非ロクロ甕で、成形、調整はSX0175出土の548と同じである。565は残存高5.3cmのロクロ小甕で底部は静止糸切り無調整である。須恵器には壺、甕があり、壺564は糸切り無調整。569、570は大甕の頸部と口縁部の破片で、外面は平行叩き、内面はナデによる磨り消し調整。須恵系土器壺563は内面は比較的平滑に仕上げられている。土製品573は土鈴の頂部であろうか。574は鉄滓である。



第125図 SX0153 井戸跡・出土遺物（1）



第126図 SX0153 井戸跡出土物 (2)



第127図 SX0153 井戸跡出土遺物 (3)

No.	出土地	器種	口径cm	底径cm	基高cm	底部	胎土	焼成	台脚	調査		回収番号	備考
										外面	内面		
550	SX0153 2層	土師器	14.0	5.0	4.5	圓軸系切	やや密	固い	にぶい質	ロクロ	ミガキ後黒色處理	125	103
551	SX0153 横上	土師器	14.8	5.1	5.2	圓軸系切	石高 青	固い	同質面	ロクロ	ミガキ後黒色處理	125	103 外面油灰付着
552	SX0153 1層	土師器	(13.0)	6.0	4.5	圓軸系切	やや密	固い	にぶい質	ロクロ	ミガキ後黒色處理	125	103
553	SX0153 3層	土師器	15.3	5.8	4.8	ケズリ	やや密	普通	にぶい質	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黒色處理	125	103
554	SX0153 横上	土師器	16.7	4.9	5.2	ケズリ	やや粗	普通	にぶい質	ロクロ	ミガキ後黒色處理	125	103 内面剥離
555	SX0153 横上	土師器	15.3	6.0	5.0	圓軸系切	やや密	普通	浅黃質	ロクロ	ミガキ後黒色處理	125	103 手擦れ
556	SX0153 横下	土師器	(12.0)	5.7	4.9	圓軸系切	やや密 小石合	作造	粗	ロクロ	ミガキ後黒色處理	125	103
557	SX0153 2層	土師器	14.6	6.6	4.3	圓軸系切	やや密	普通	にぶい質	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黒色處理	126	103 外面擦付着
558	SX0153 2・4層	土師器	(15.0)	6.5	4.9	ケズリ	やや密	普通	にぶい質	ロクロ	ミガキ後黒色處理	126	103
559	SX0153 2層 底下附	土師器	(15.0)	(5.0)	4.6	ケズリ	やや粗 石高合	普通	にぶい質	ロクロ	ミガキ後黒色處理	126	103
560	SX0153 3層上	土師器	-	-	(5.2)	-	やや密	普通	にぶい質	ロクロ	ミガキ後黒色處理	126	103 外面キズ有り
561	SX0153 1・2層	土師器	-	-	(2.0)	葵花状文	やや密 高・頭石 多合	杯・固い	にぶい質	ロクロ	ミガキ後黒色處理	126	103
562	SX0153 1・2層	土師器	(13.0)	6.0	4.6	圓軸系切	やや粗	普通	にぶい質	ロクロ	ロクロ	126	103 背内壁
563	SX0153 1層	漆山系上 器	(15.0)	5.8	4.6	圓軸系切	やや粗 小石合	固い	浅黃質	ロクロ	ロクロ	126	103
564	SX0153 横土上	漆山系	(13.0)	(5.0)	5.0	圓軸系切	やや密 砂上	四邊	灰質	ロクロ・ケズリ	ロクロ	126	103
565	SX0153 1・2層	土師器	-	(7.0)	(5.0)	靜止系切	やや粗	普通	灰白	ロクロ・ケズリ	ロクロナデ	126	103
566	SX0153 2層	土師器	20.9 22.0	-	26.4	盤 小石合	固い	浅黄	ロクロ・ケズリ	ロクロナデ	126	103	

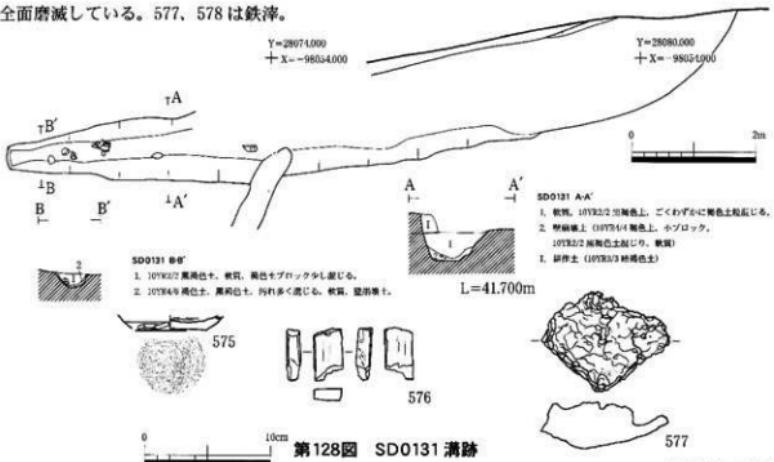
No.	出土地	基種	口徑cm	底径cm	基高cm	底 高	動土	焼成	色調	調査		回収場所 標 印	備考	
										外面	内面			
567	SD0131 棚土	土師器底	-	-	(8.8)	-	中や粗 石英含	普通	外：浅褐色 内：灰白	ハケス	ハケス	126	103	森クロ
568	SD0131 棚土	直腹器底	-	-	(13.6)	(7.8)	ケズリ	中や粗 石英含	固い 灰	タタキ・ケズリ	ハケス	126	103	
569	SD0131 棚土	直腹器底	-	-	(8.7)	-	密	固い 青灰	ロクロ・タタキ	ロクロ	ロクロ	127	103	内面直角無
570	SD0131 棚土	直腹器底	-	-	(6.1)	-	中や粗 石英含	固い 灰	ロクロ・タタキ	ロクロ	ロクロ	127	104	
571	SD0131 棚土	直腹器底	-	-	(10.6)	-	粗	固い 灰	ロクロ・タタキ	ロクロ	ロクロ	127	104	
572	SD0131 墓土	直腹器底	-	-	(7.8)	-	中や粗 石英含	固い 灰	タタキ			127	104	
573	SD0131 墓土	土器	-	-	(3.8)	-	中や粗 石英含	普通 淡黄褐		ケズリ		127	104	
No.	出土地	基種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	材質	同	写真回数	その他				
574	SD0131 4号	鉄滓	35	415	22	4525	鉄	127	104					

iv) 溝跡

SD0131 溝跡（第128図・写真図版78・79）

調査区北西端に検出した素掘りの溝跡である。調査区内では東から西に流れる溝で、西端は完結する。調査区が切れるあたりから大きく北にカーブして調査区外に延びているため全体プランは不明である。底面には一部小礫がみられる。調査の都合上、B区検出部分のみ掘り下げたため、東側の底面や深さは不明である。計測できた限りでは、東西の長さ12m、幅は東で1.6m、西に行くほど細くなり、西端では0.5m以下になる。下端も上端と同じように西に行くほど狭くなると考えられるが、掘り下げた部分においては幅30cm、深さ50cmである。溝の両岸とも掘削は丁寧である。

出土遺物（第128図・写真図版104）ほとんどが土師器底の破片で、遺物は少ない。須恵器底575は糸切り無調整の底部で、体部下端は横方向のケズリが行われる。576は長さ4.2cmの長方形の砾石で、全面磨滅している。577、578は鉄滓。



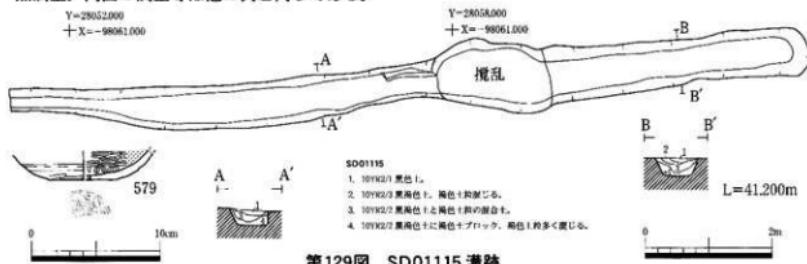
第128図 SD0131 溝跡

No.	出土地	基種	口徑cm	底径cm	基高cm	底 高	動土	焼成	色調	調査		回収場所 標 印	備考	
										外 面	内 面			
575	SD0131	直腹器底	-	5.6	(1.2)	回転角切	中や粗 石英含	固い 褐灰	ケズリ		ロクロ	128	104	
No.	出 土 地	基 種	長さcm	幅cm	厚さcm	重 量g	材 質	同	写真回数	その 他				
576	SD0131	砾石	42	2.3	1.0	15.8				128	104			
577	SD0131 棚土	鉄滓	7.9	10.3	3.7	311.96	鉄	128	104					
578	SD0131 棚土	鉄滓	2.4	3.0	1.9	15.42	鉄		写真複数					

SD01115 溝跡 (第129図・写真図版79)

E区東寄りに検出した東西溝である。西方は住居跡SI01114Bの南壁をかすめて発掘区外に延びる。検出した全長は12.5m、幅は上端で60cm～75cm、下端は45cm、深さは20cm～40cm、東から西へ下る溝で両岸の掘削は比較的丁寧である。底面の東と西のレベル差は10cmである。途中、1m幅の方形に擾乱を受けている。埋土は褐色土粒が混じる黒褐色土である。

出土遺物 (第129図・写真図版104) 遺物は少なく、土師器が中心である。579は壺の底部で糸切り無調整。内面の調整等は他の例と同じである。



No.	山 土 地	器 物	口径 cm	底径 cm	基高 cm	底 部	胎 土	焼成	色 調	調査			回収量目	回 収 量	備 考
										外 围	内 围	壁 厚			
579	SD01115	土師器壺	-	(6.2)	(2.0)	圓盤条切	中や密	硬	にぼい黄	ロクレ	ミガキ後層色	129 184			

SD01126 溝跡 (第130図・写真図版79)

E区の中央部付近に検出した南北溝である。北、南共に調査区外へ延びている。埋土上位を全体に、また南側で大きく擾乱を受ける。南北長8.8m、幅は上端75cm、下端30cm～40cm、深さ25cm～35cmである。両岸の掘削は比較的丁寧である。南側東壁でTピットSK01108と重複する。埋土は黒褐色土主体の軟らかい土で、褐色土の混じり方が上位と下位で若干違う。

出土遺物 (第130図・写真図版104) 遺物は少ない。580は土師器質の台部で、外面口クロ調整、台内面はケズリである。



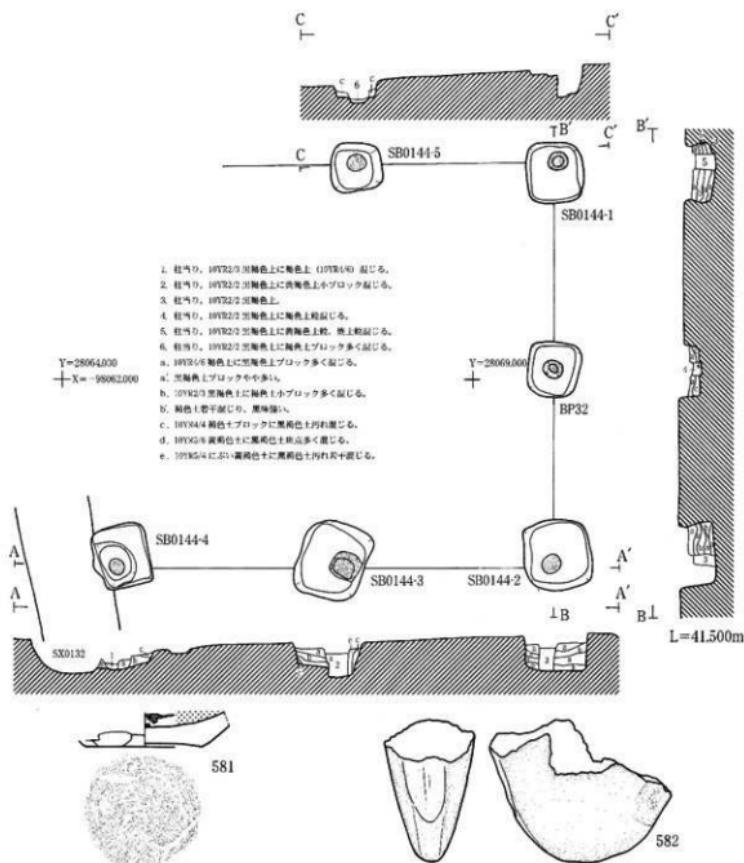
No.	山 土 地	器 物	口径 cm	底径 cm	基高 cm	底 部	胎 土	焼成	色 調	調査			回収量目	回 収 量	備 考
										外 围	内 围	壁 厚			
580	SD01126	土師器台か	-	-	(2.1)		中や粗	固い	褐		ケズリ		129 104		

v) 挖立柱建物跡

SB0144 挖立柱建物跡 (第131図・写真図版80)

調査区西端の北寄りに検出した、東西2間(5.378m)以上×南北2間(4.928m)の東西棟である。建物方位は発掘基準線にほぼ一致する。柱間寸法は桁行南側柱で東から2.593m, 2.785m、梁行は東妻で北から2.541m, 2.387mである。柱掘り方は、一辺0.55m~0.8mの方形で、検出できた6個すべてに径15~20cmの柱当りが認められる。掘り方は褐色土と黒褐色土を互層する埋土で、深さは遺存のよいところで35~45cmである。

出土遺物 (第131図・写真図版104) いくつかの掘り方内から遺物が出土している。SB0144-2では根固石に利用した磨石の破片582が、同一-3では糸切り無調整の土師器鉢581が、同一-5では須恵器甕胴部片231がある。



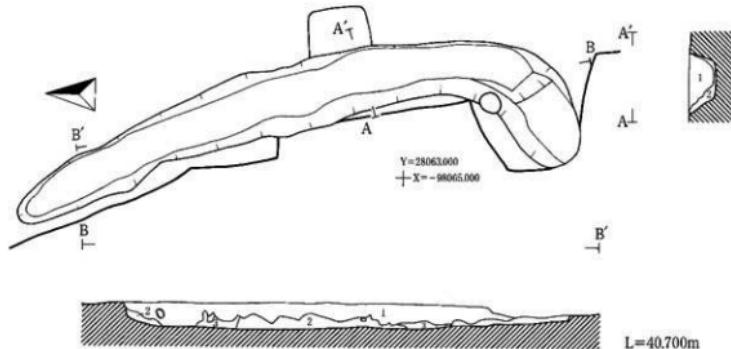
第131図 SB0144 挖立柱建物跡

No.	出土地	基 種	口径 cm	底径 cm	基高 cm	地 帯	動 土	発 成	色 調	調査		回収番号	備 考
										外 面	内 面		
581	SB0144-3 棚うち	上断面斜	-	7.0	(2.1)	同軸切	砂質、粗	普通	浅黄棕	ロクロ・ケズリ	ミガキ後深褐色透	131	104
No.	出 地	基 種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重 量 g	材 質	固	浮真四版	その他の			
582	SB0144-2	横穴	8.8	11.2	5.5	479.86				131	104		

vi) その他不明遺構

SX0132 (第132図・写真図版81)

調査区西端に検出した、南北に長い逆L字形の溝状遺構である。北側は完結している。南側は西に向かって折れ調査区外に延びる。地形から考えると北から南に緩やかに傾斜しているのだが、底面のレベルは中ほどが最も低い。溝岸の掘削はていねいである。埋土は黒褐色主体である。東岸で掘立柱建物跡SB0144-4の掘り方を切っている。土器片の破片が出土した。

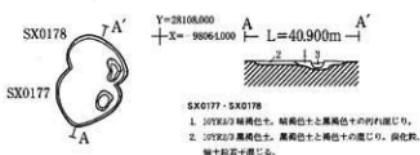


第132図 SX0132

SX0177・0178 (第133図・写真図版81)

SX0177はB区中央部、SX0178と重複する円形の土壤状遺構である。開口部東西0.8m×南北0.7m、深さ5cmである。

SX0178はほぼ円形の土壤跡で、時期は不明である。開口部東西0.75m×南北0.5m、深さは10cm。どちらからも出土遺物はない。



第133図 SX0177・0178

SD01120・SK0167(第134図・写真図版81)

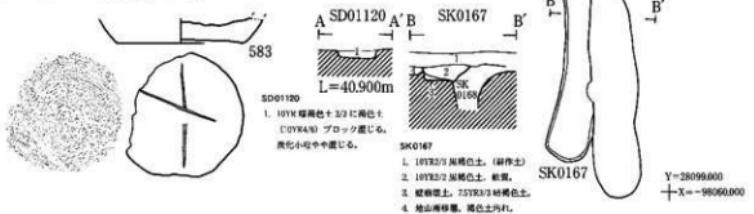
SD01120はD区に検出した浅い溝跡である。現在の住宅を造成する際に掘られた搅乱かと考えたが、わずかな出土遺物もあり、時代は不明だが溝跡とした。この溝は南でTピットSK0168の上部を切り、中ほどに搅乱を受ける。

SK0167は、検出時はTピットと考えたが、深さ10cmと浅く、東側に重複するSK0168を切ってい

るため不明遺構にした。その後、調査区を北に広げたところ、SK0167の続きと考えられるSD01120を検出した。溝跡と考えられる。途中ブロック層の基礎によって切断されている。

出土遺物（第134図・写真図版104）

SD01120から土師器が数点出土している。SK0167の埋上部からは土師器が出土したが、583の甕の底部には「×」のヘラ書きがある。



第134図 SD01120, SK0167

No.	出上地	器種	口径cm	底径cm	高さcm	底部	断上	焼成	色調	断面		図版番号	測定高
										外面	内面		
583	SK0167 墓土	土師器甕	-	(7.6)	1.5	粘土質砂質	直	灰石 等含	灰質	外:褐 内:灰褐色	押注調整	ロクロ	134 104

(3) 中世

i) 堀跡

SD0190 堀跡（第135図・写真図版82）

方形館の東辺を区画する堀跡で、第20次発掘調査の東西堀跡SD0104と同一の遺構である。検出できた南北方向の長さは15mで、南北端は調査区外に延びる。第20・21次発掘調査を通じて堀の幅を確認できたのは、今次調査区内のSD0190に限られる。それによると、上端では幅4m、堀底では0.3m～0.6m、深さ1.3mある。堀跡の断面は、東岸の傾斜の緩い箱堀状を呈する。両岸の掘削はていねいで、西岸は約50°の急傾斜で立ち上がるが、東岸は約27°の傾斜角で上端に至る。上端周辺及び両岸には柵列や土塁などの痕跡は認められない。

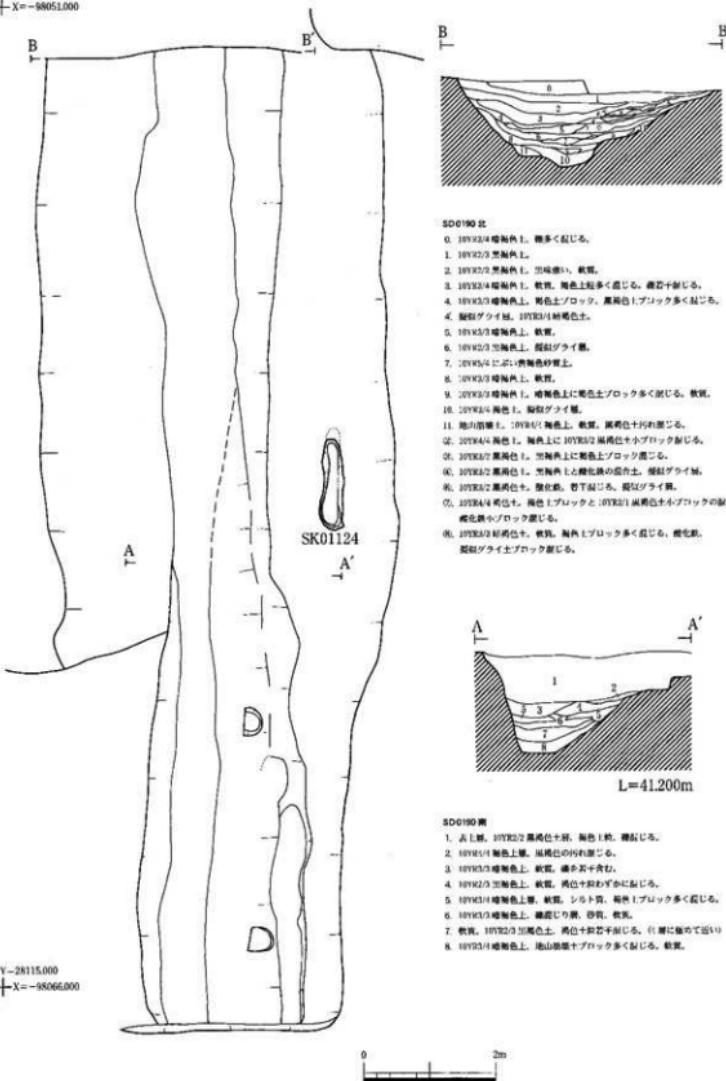
埋土は一部のみられる岸の崩壊土を除くと、10層前後に分かれる。埋土の堆積は基本的にシメントリード、両岸からの土塁などの崩壊土による流れ込みは観察されなかった。最下層の10層は、厚さ20cm前後の擬似グライ層であり、一定の条件下では堀底に滲水があったことが窺える。東岸でTピットSK01124と重複する。

既述のように、第20次発掘調査の北辺を区画する東西堀SD0104は東端で南に屈曲し、今次調査区の南北方向に延びるSD0190堀跡に接続する。そしてSD0190はさらに南へ延びて西に折れ、第13次発掘調査で検出されたSD06堀跡¹⁾となり、全体的に「コ」の字プランを検出したことになる。

1) 高橋千晶・佐々木千鶴子『水沢遺跡群範囲確認調査—平成8年度発掘調査概報—』水沢市文化財報告書第31集

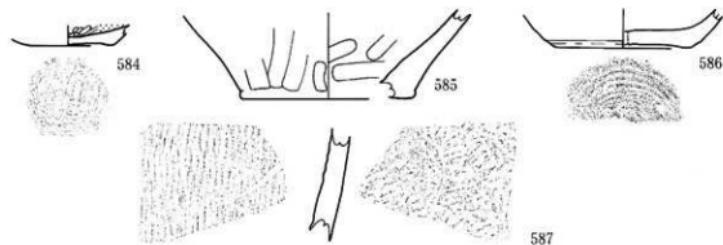
(水沢市教育委員会 1997)

Y=28115.000
X=-98051.000



第135図 SD0190 堀跡

出土遺物 (第136図・写真図版104) 出土遺物は少ない。土師器、須恵器、中世陶器がある。584は土師器坏の底部で、糸切り無調整、見込みは放射状ミガキである。587は須恵器壺の胴部で、外面平行叩き、内面は粗めの平行条痕をアテ具痕跡として残す。585は中世陶器鉢で、底部糸切り、胴部下半は縦のケズリである。



第136図 SD0190 堀跡出土遺物

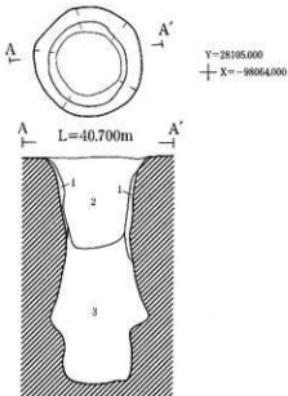
No.	出土地点	器種	口径cm	高さcm	器底	底土	形成	台詞	調査		国歴番号	現存番号	備考	
									外側	内側				
584	SD0190上層	土師器坏	-	5.4	12.5	回転糸切	やや薄	軟質	ロクロ	ミガキ後黑色處理	136	104		
585	SD0190	中世陶器鉢	-	(10.4)	(5.3)	平削	やや密	回り	外：灰分 内：にじみ	ヘラケズリ	指ナゾか?	136	104	
586	SD0190	上層基盤	-	(8.4)	(2.0)	回転糸切	やや密	軟質	ロクロ	ロクロ	136	104		
587	SD0190下層	須恵器壺	-	0.9		合	小孔	圓孔	外：灰 内：灰	平行タキ		136	104	

i) 井戸跡

SK0148 井戸跡 (第137図・写真図版82)

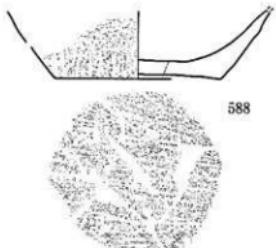
古代井戸跡 SX0153 の北東側に検出した、開口部 1.3 m × 1.25m の円形の井戸跡で、深さは 2.7m ある。壁は開口部でやや外傾するほかはほぼ直線気味に掘削され、井戸底に至る。底面は平らで、曲物などを埋設した痕跡は認められない。周壁下位方はオーバーハングしている。埋土は 2、3 層とも黒褐色主体で、下位に礫が多く混じる。また埋土からは井戸枠の残骸と思われる木片が何点か出土したが、いずれもほとんど腐食しており、取り上げは不可能であった。

出土遺物 (第138図・写真図版105) 須恵器片が数点出土している。588は繩文土器深鉢の底部で、外面には半裁竹管状の直線的な条痕文が胴部下半から底部にかけて施文される。時期不詳。



1. 灰褐色土、107314 黑色土。
2. 107322 黑褐色土、軟質。
3. 灰、比較的多く含む、軟質、粘質、107323 黑褐色土。

第137図 SK0148 井戸跡



第138図 SK0148 井戸跡出土遺物

No.	出土地	層構	凸深cm	底径cm	底高cm	式形	地土	造成	色調	測量		（ ）は推定値、実存値
										外面	内面	
588	SK0148 井戸下層、中層	礎文深鉢	—	10.3	(14.3)	半深	粘、砂質 石英	板質	外：褐 内：土褐色	138	105	外側埋付着

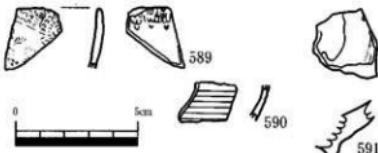
iii) 溝跡

SD0146 溝跡 (第139図・写真図版83)

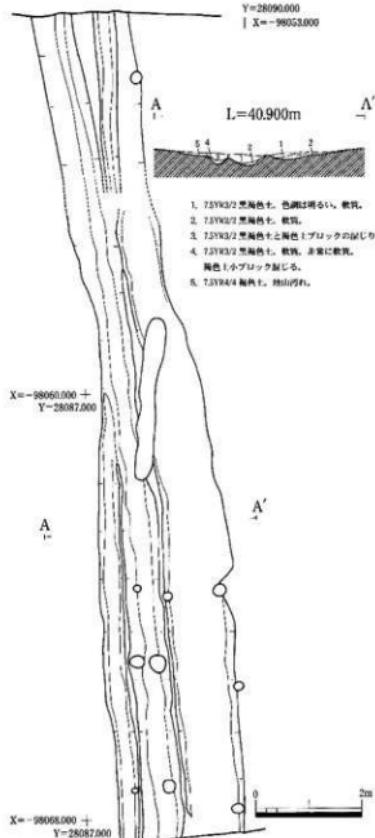
西側調査区の中央部にある、北から南に緩やかに流れる溝跡で、新旧2本に重複する。検出できたのは南北約15.6mの範囲である。溝の端はなだらかに立ち上がっており、明確ではない。幅2.5m、深さ30cm。溝の中央部ではTピットSK0162のプランを破壊している。柱穴状ピットとの重複も多いが、この溝を掘り込んでいるため溝のほうが古い。

出土遺物 (第139図・写真図版105)

少量の遺物がある。土師器片と陶磁器片である。陶磁器には碗591、鉢590、皿589がある。碗は削り出し高台、鉢外面にはラセン文がめぐる。皿はコバルト色の染め付け文。すべて国産陶磁器である。



第139図 SD0146 溝跡



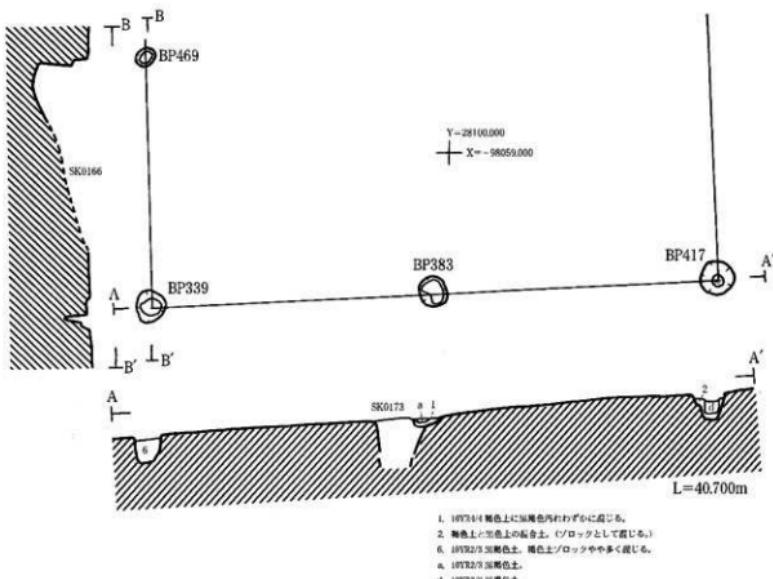
No.	出土地	基脚	口径cm	高さcm	基盤cm	東 部	西 部	構成	色 調	測量		地盤番号	深さ(cm)	備考
										外面	内面			
389	SD0146 北壁上	鉛錠脚	-	-	(2.5)				灰白			139	105	
590	SD0146 北壁土	鉛錠脚	-	-	(1.7)				に赤い鉛錠			139	105	
591	SD0146 北壁下	鉛錠脚	-	-	(2.0)				灰白			139	105	

iv) 挖立柱建物跡 (第140～156図)

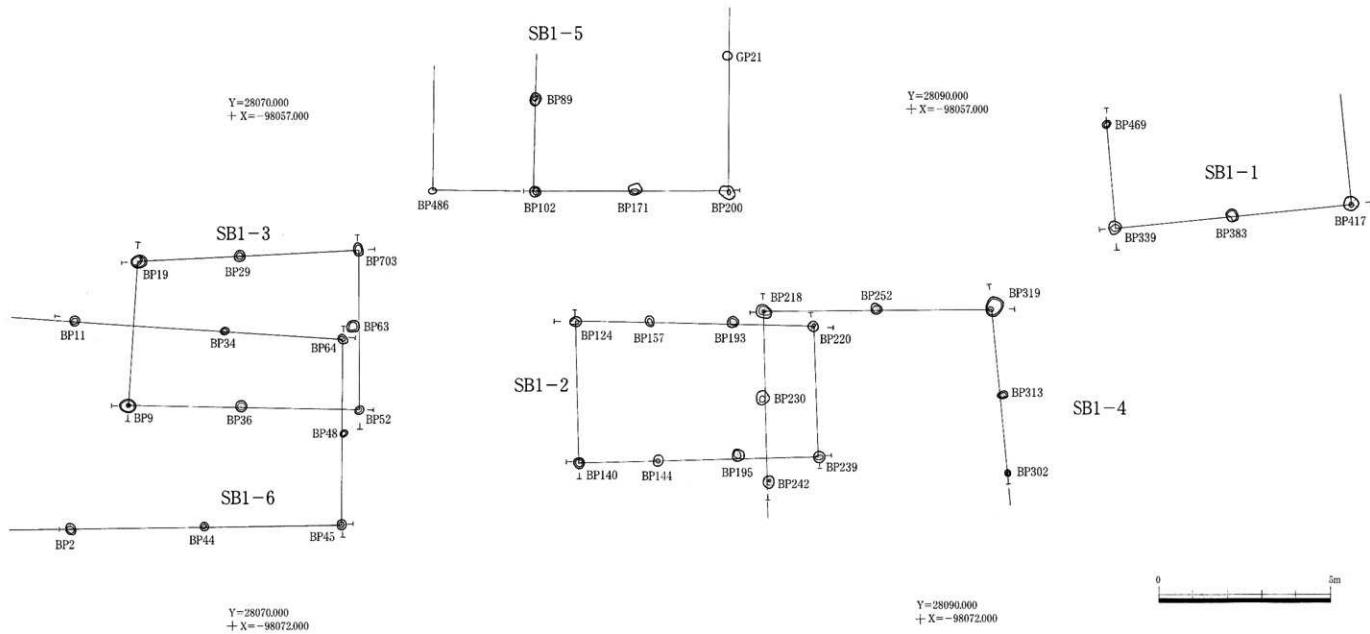
検出された造構群の中ではもっとも新しい一群の造構で20棟ある。すべて堀跡SD0190に開続された内側(B-D区)にあり重複関係、建物方位、柱間寸法、柱掘り方などの特徴からa～eの5群に分けられる。なお柱間寸法は現場で掘り方内の柱当りの芯々距離を計測した実測数値を示した¹³⁾。

a群 SB1-1～1-6の6棟がある。SB1-1は調査区東側北寄りにある東西2間(6.985m)×南北2間以上の南北棟建物跡で、SB2-1・2-6・3・4-1と重複する。建物方位は発掘基準線に対し、梁行が南側でE 0° 30' S傾く。柱間寸法は梁行南側柱で西から3.464m、3.521mである。柱掘り方は直径35～42cmの円形で、ほぼ同一の規模である。東妻東端掘り方内に径22cmの柱当りが認められる。掘り方の深さは14～37cmある。埋土は主に黒褐色土混じりの褐色土である。出土遺物はない。

- 1) 柱当りの芯々距離の算出にあたっては、同距離を3回計測し、その平均値で表わした(3回の芯々距離の総和÷3=芯々距離の平均値)。柱当りの認められない掘り方については、便宜的に掘り方内中心点を柱位置と仮定して計測した。なお、柱間総長と各柱間寸法の総和とは柱筋の出入りの関係で、数mmから数cmの差が生じる場合がある。これについては、柱間総長を優先し、各柱間寸法は差を均等に調整した数値で示した。

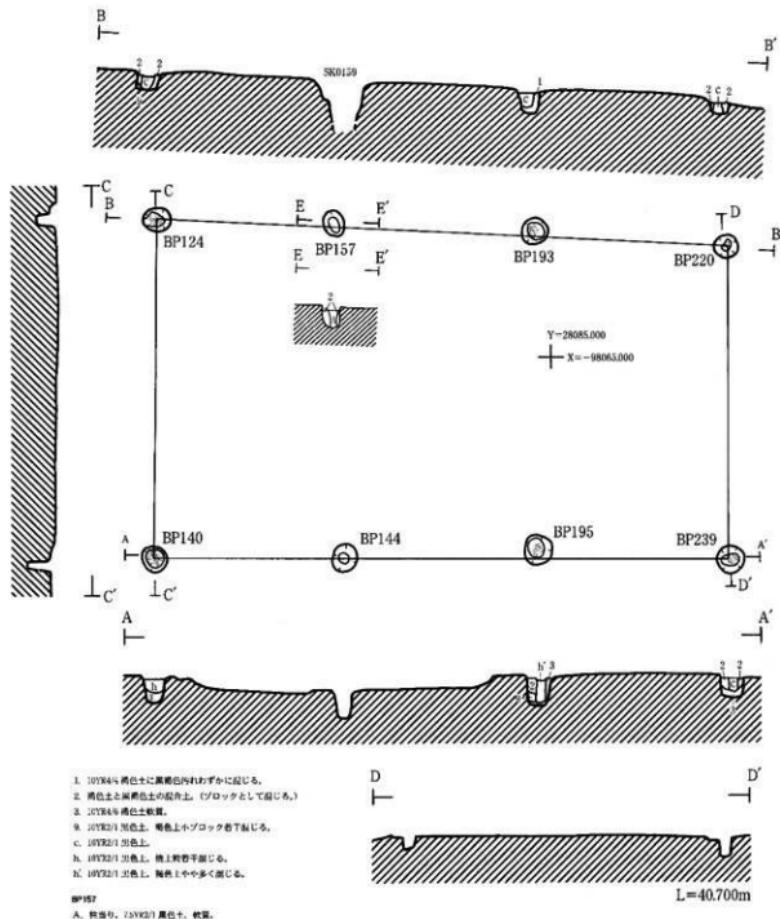


第140図 SB1-1 挖立柱建物跡



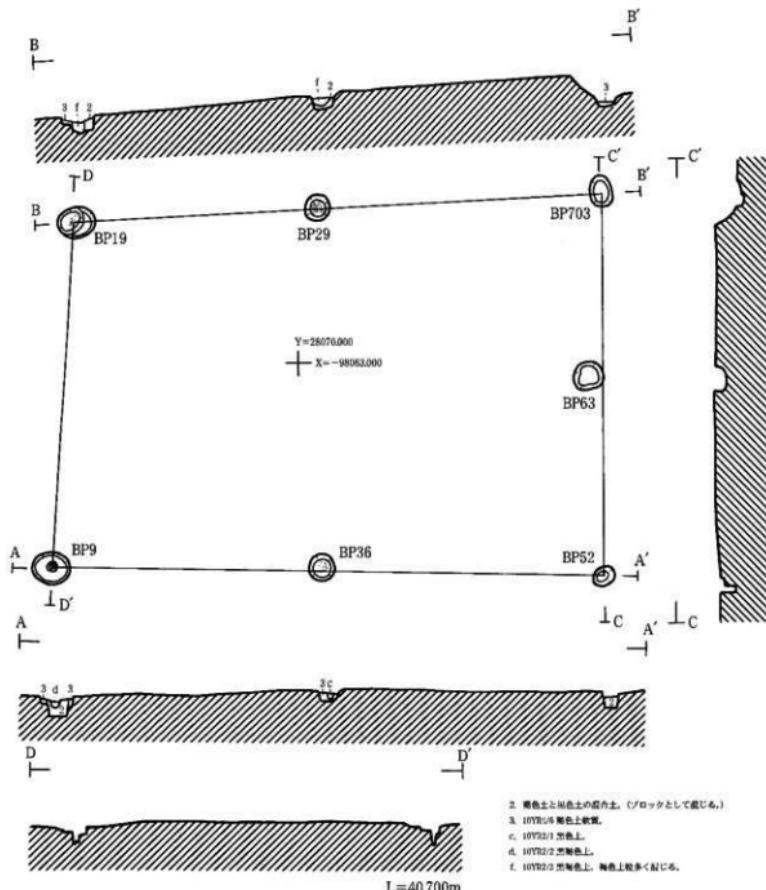
第141図 SB1群全体図

SB1-2は発掘区中央やや西寄りにある東西3間(7.070m)×南北1間(4.227m)の東西棟建物跡で、SB1-4・2-2・2-3・5-4と重複する。建物方位は発掘基準線に一致するが、北側柱は西に向かって開く構造となる。柱間寸法は桁行南側柱で西から2.291m, 2.440m, 2.339mである。柱掘り方は直径21~34cmの円形で、径30cm前後が多い。掘り方内に径15cm前後の柱当りが認められるものがある。掘り方の深さは17~39cmある。埋土は掘り方褐色土、柱当り黒色土主体である。出土遺物はない。



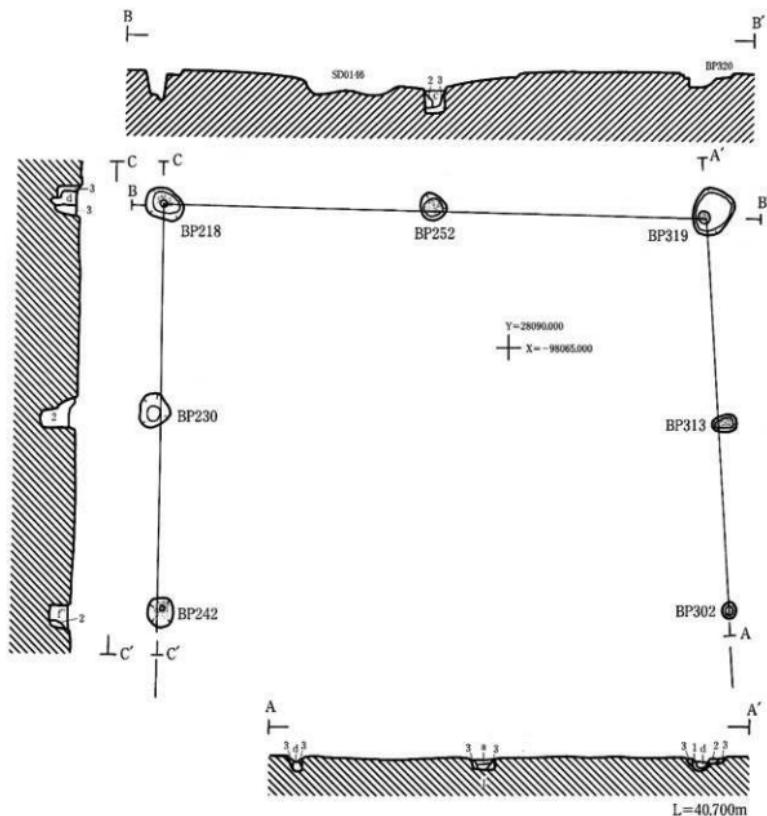
第142図 SB1-2 掘立柱建物跡

SB1-3は調査区西寄りにある東西2間(6.788m)×南北2間(4.750m)の総柱東西棟建物跡で、SB1-6・5・5、SB0144、SI0140と重複し、SB0144、SI0140を破壊する。建物方位は発掘基準線に対し、桁行が南側でE $3^{\circ} 15'$ S傾くが、梁行は東側で基準線に一致する。北側柱は東に向かって開き、SB1-2と左右が対称的形態をとる。また、西妻棟持ち柱が側柱筋より外に出る構造をとる。柱間寸法は桁行南側柱で西から3.317m、3.471m、梁行東側柱で北から2.245m、2.505mである。柱掘り方は直径24~36cmの円形で、径32cm前後が多い。西妻の3つの掘り方内には径9~23cmの柱当りがみられる。掘り方の深さは11~30cmあるが、15cm前後が多い。埋土は掘り方が褐色土主体、柱当りは黒色土である。出土遺物はない。



第143図 SB1-3 堀立柱建物跡

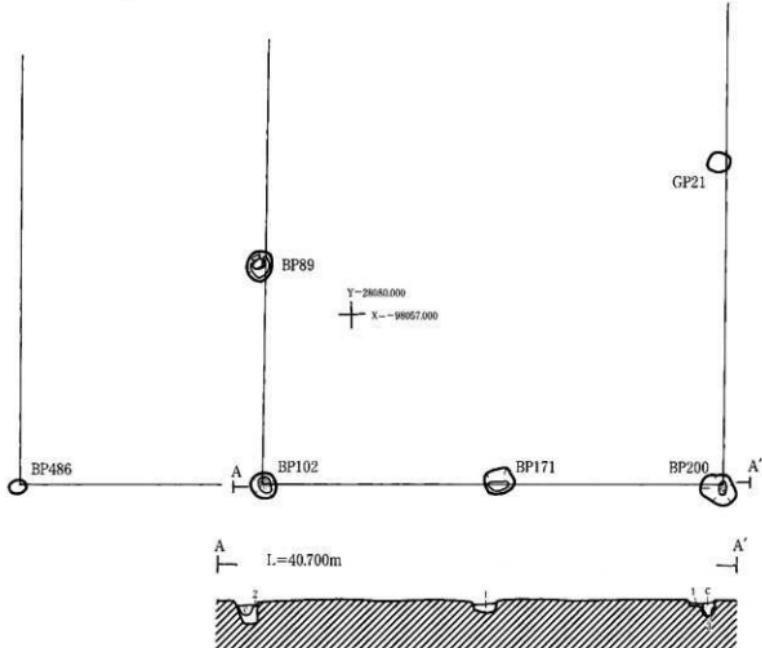
SB1-4は調査区中央南寄りにある東西2間(6.760m)×南北3間以上の南北棟建物跡で、SB1-2・2-2-2-3-6と重複する。建物方位は桁行が東側柱のみN $2^{\circ}45'$ W傾き、ほかは発掘基準線に一致する。柱間寸法は梁行北側柱で西から3.282m、3.478mである。桁行は西側柱北側2間分が北から2.584m、2.464mある。柱掘り方は最小直径16cm、最大が50cmあるが、平均35cm前後の円形である。西側柱北から1間目の掘り方内に径13cmの柱当りが残る。掘り方の深さは19~42cmまであり、比較的深い例が多い。埋土は掘り方褐色土、柱当り黒褐色土主体である。出土遺物はない。



- 1. 10YR4/4 褐色土に黒褐色内れわずかに混じる。
- 2. 褐色土と黒褐色土の混合土。(ブロックとして握じる。)
- 3. 10YR4/6 黄褐色土。
- a. 10YR2/7 黑褐色土。
- b. 10YR2/7 黑褐色土。
- c. 10YR2/2 黑褐色土。
- d. 10YR2/2 黑褐色土、褐色土ブロック混じる。

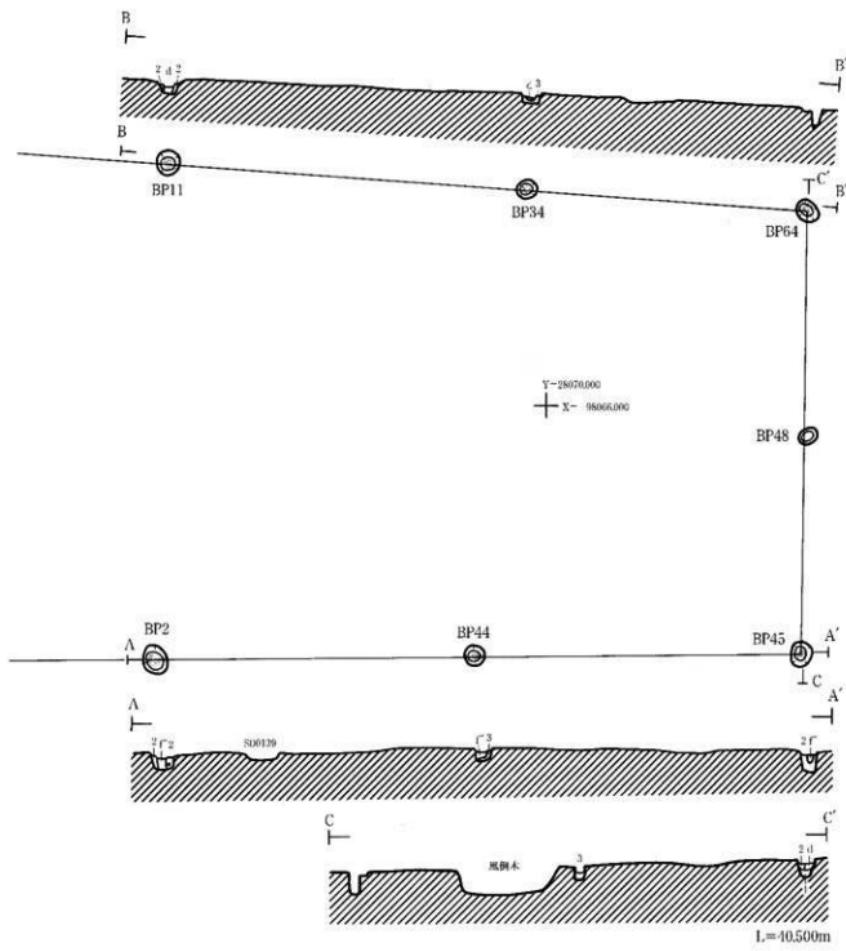
第144図 SB1-4 掘立柱建物跡

SB1-5はSB1-2の北側に並列してある、東西2間(5.585m)×南北2間以上の身舎に西に1間の庇が付く南北棟建物跡で、SB2-4・4-3、SI0140と重複し、うちSI0140を破壊する。建物方位は南側柱で発掘基準線に一致する。柱間寸法は身舎梁行南側柱で西から2.903m、2.682mである。桁行は身舎西側柱南1間が2.737mある。庇の出1間は3.120mである。柱掘り方は直径26~31cmの円形で、径27cm前後が多い。西庇南端の掘り方はSI0140床面にわずかに柱底の痕跡を残す程度であった。掘り方の深さは14~41cmとばらつきがある。埋土は掘り方が褐色土主体、柱当りは黒色上で、出土遺物はない。



第145図 SB1-5 据立柱建物跡

SB1-6は調査区南西端にある東西3間以上×南北2間(5.490m)の東西棟建物跡で、SB1-3、5-5と重複する。建物方位は発掘基準線に対し、桁行が南側でE 0° 45' S、梁行が東側でN 0° 45' Eと同じ傾きである。北側柱は西に向かって開き、SB1-2と相似形の構造を示す。柱間寸法は梁行東側柱で北から2.838m、2.652mである。桁行は南側柱東側2間分が西から3.906m、4.038mある。柱掘り方は直径20~30cmの円形で、径22~23cm前後が多い。東妻の南北端掘り方を除くすべてに径11~16cmの柱当りが認められる。掘り方の深さには9~12cmと16~27cmの2種がある。埋土は掘り方褐色土、柱当り黒褐色土主体で、出土遺物はない。



第146図 SB1-6 掘立柱建物跡

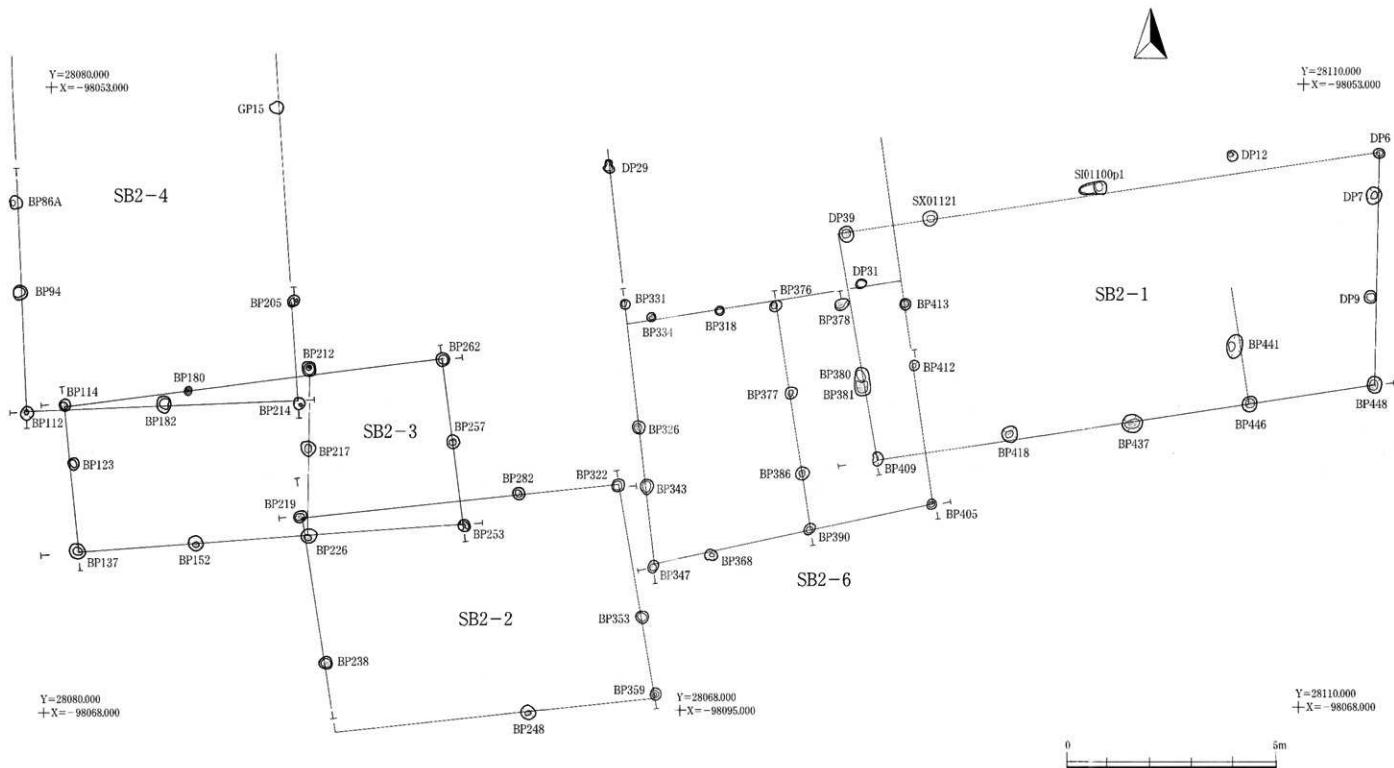
b群 SB2-1～2-4と2-6の5棟がある。SB2-1は調査区東端、堀のすぐ内側にある東西4間(11.980 m)×南北2間(5.510 m)の東西棟建物跡で、東妻は3間取りの可能性がある。SB1-1・3・4-1・2-6、SI01100、SI0151と重複し、SI01100・0151の床面、北壁を破壊する。建物方位は発掘基準線に対し、桁行が南側でE 7° 15' N傾く。東妻側柱は北に向かって開く構造となる。柱間寸法は桁行南側柱で西から3.24 m、2.862 m、2.848 m、3.030 m、梁行西側柱で北から3.415 m、2.095 mである。柱掘り方は、東妻のみ直径21～29cmで、他は30～46cmの円形である。掘り方内の柱当りは約半数に認められるが、径9～30cmとばらつきがある。掘り方の深さは30cm前後が多い。埋土は掘り方が褐色土、掘り方が黒褐色土主体である。SX01121から592の須恵器甌が出上している。

SB2-2は調査区中ほど南寄りにある東西3間(7.847 m)×南北2間(5.173 m)の東西棟建物跡で、SB1-2・1-4・2-3・6と重複する。建物方位は発掘基準線に対し、桁行が北側でE 7° 55' N、梁行が東側でN 11° 30' W傾く。東西妻部棟持ち柱が南に偏する特徴がある。柱間寸法は桁行北側柱で西から3.295 m、1.989 m、2.563 m、梁行東側柱で北から3.250 m、1.923 mである。柱掘り方は直径25～38cmの円形で、北東寄り3つの掘り方内に径15～23cmの柱当りが認められる。掘り方の深さは10～31cmまであるが、ほとんどは20cm未満である。埋土は掘り方褐色土、柱当り黒褐色土主体で、出土遺物はない。

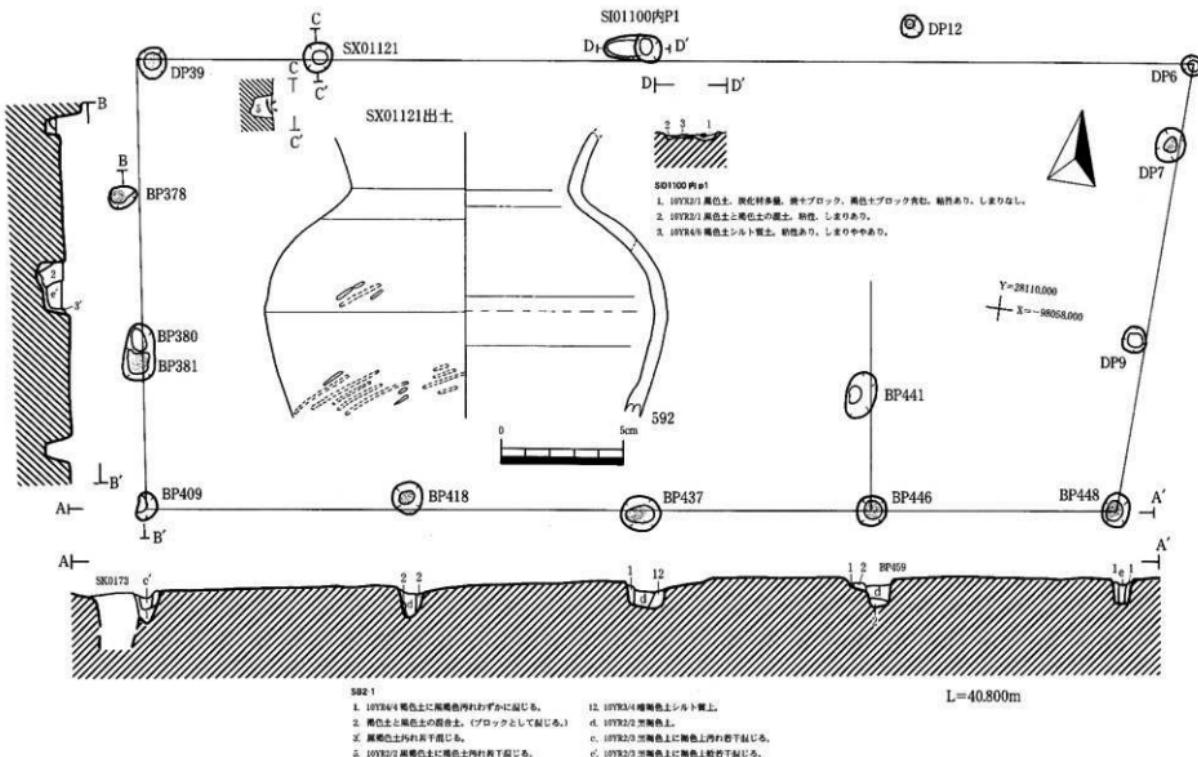
SB2-3はSB2-2の北側柱と一部重複してある、東西3間(9.330 m)×南北2間(4.107 m)の身舎に東1間に間仕切りのある東西棟建物跡で、ほかにSB1-2・2-4・5-4と重複する。建物方位は発掘基準線に対し、桁行が南側でE 7° 05' N、梁行が東側でN 9° 50' W傾く。柱間寸法は桁行南側柱で西から2.863 m、2.710 m、3.757 m、梁行東側柱で北から2.058 m、2.049 mである。柱掘り方は直径20～36cmの円形で、半数以上の掘り方内に径12～20cmの柱当りがある。掘り方の深さは44～48cmと深いものもあるが、25～26cm前後が多い。埋土は褐色と黒褐色で、出土遺物はない。

SB2-4は調査区中央西寄り北側にある、東西2間(6.515 m)×南北3間以上の南北棟建物跡で、SB1-5・2-3・4-3・5-4と重複し、うち西側柱掘り方がSB4-3掘り方に切られる。建物方位は発掘基準線に対し、梁行が南側でE 4° 20' N傾く。柱間寸法は梁行南側柱で西から3.315 m、3.200 mである。柱掘り方は直径24～34cmの円形で、南妻東端掘り方内に径12cmの柱当りが認められる。掘り方の深さは西側柱南1間の掘り方16cmを除くと、ほかは26～40cmと比較的深い。埋土は褐色と黒褐色土で、BP86-Aから593の須恵器甌の破片が出土している。

SB2-6は調査区中央やや東寄りにある、東西2間(7.062 m)×南北3間以上の南北棟建物跡で、南北2間に東西の間仕切りをもち、内部をさらに東西に2分する構造である。SB1-1・2-1・3・4-1・5-2・5-3と重複する。建物方位は発掘基準線に対し、桁行が西側でN 7° 05' W、梁行が南側でE 10° 30' N傾く。柱間寸法は梁行南側柱で西から4.123 m、2.939 mある。桁行は西側柱で南から2間目までが3.449 m、3.041 mを測る。柱掘り方は直径20～31cmの円形で、半数以上の掘り方内に径12～22cmの柱当りがある。掘り方の深さは浅いもので6～13cm、ほかは16～30cmあり、後者が4分の3を占める。埋土は褐色土と黒褐色土が主体で、出土遺物はない。

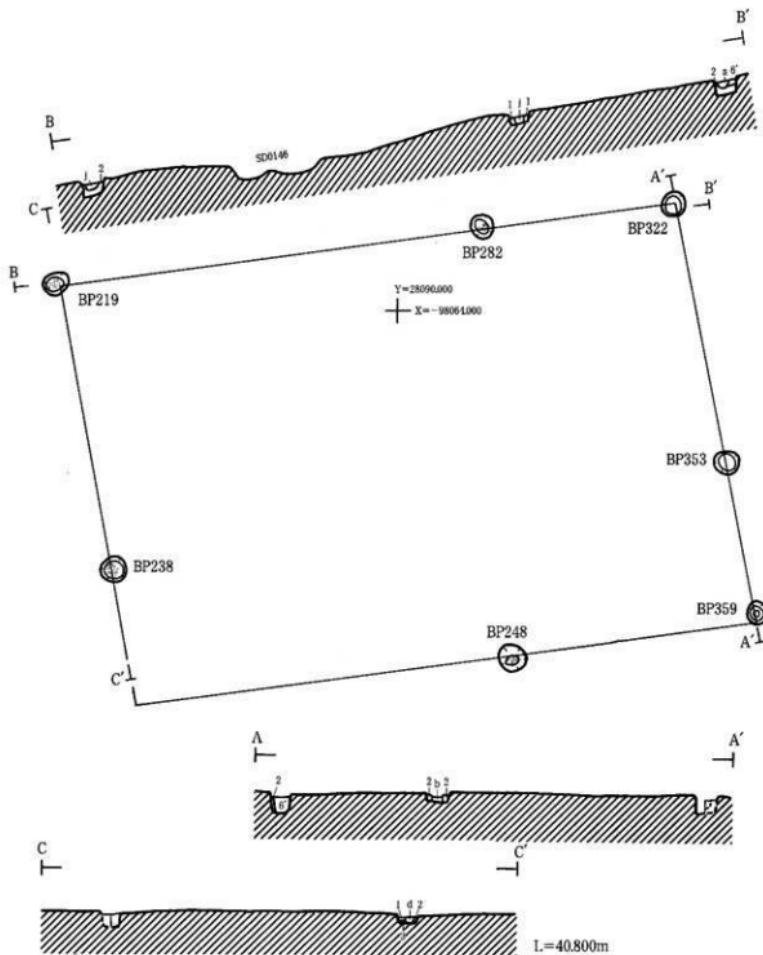


第147図 SB2群全体図



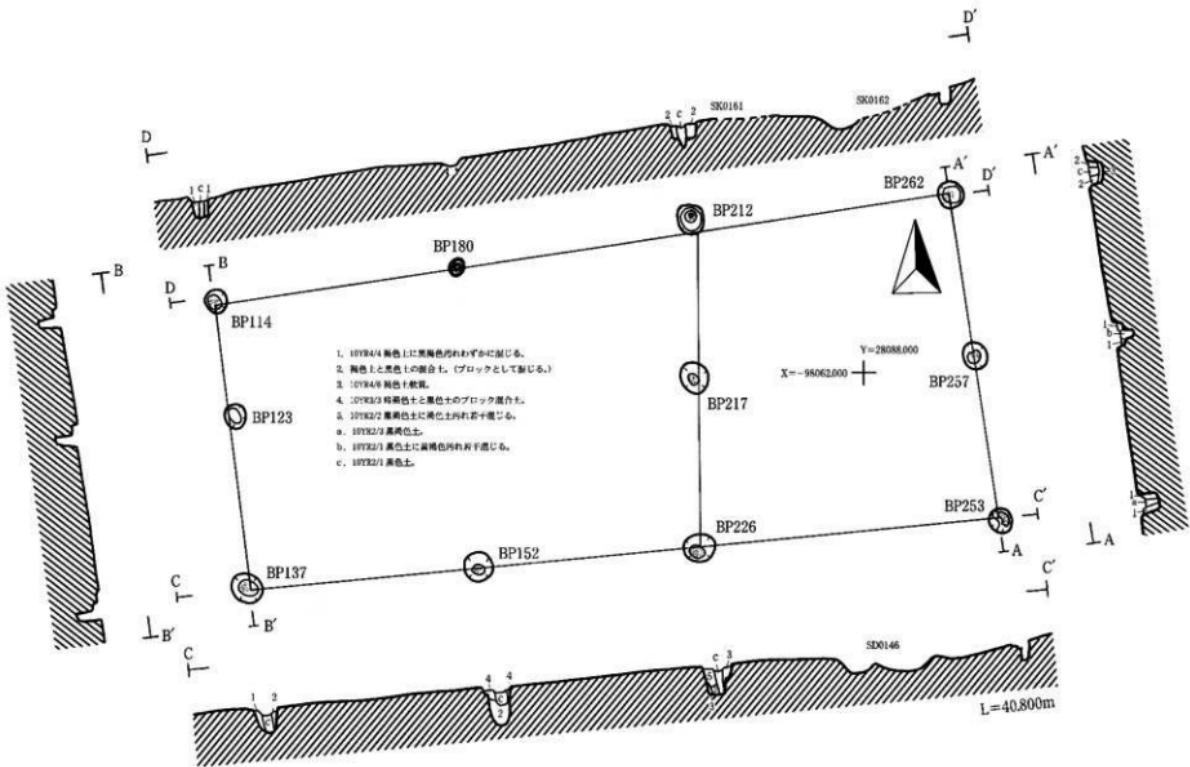
第148図 SB2-1 挖立柱建物跡

No.	出 土 種	基 構	口径 cm	底径 cm	深 底 cm	底 部	地 士	焼 成	色 调	断 面		回収番号	標 真点	備 考
										外 面	内 面			
592	SB2-1 SB01121	漆面漆板	-	-	(173)		小石 含	焼 成	浅黄	ロクロ・タタキ	ロクロ	148	105	

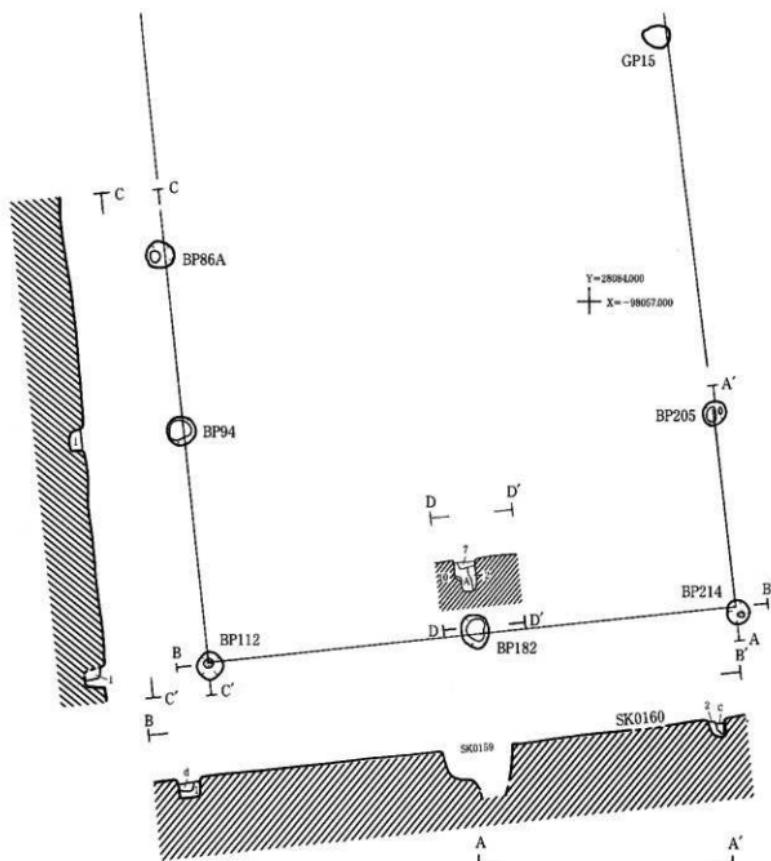


1. 10YR4/4 黄色土に黒褐色均れわずかに混じる。
2. 黄色土と黒褐色の混合土。(ブロックとして混じる。)
3. 10YR4/6 黄色土軟質。
4. 10YR2/3 黄褐色土。黒色土ブロック若干混じる。
- a. 10YR2/3 黄褐色土。
- b. 10YR2/1 黄色土に黒褐色均れ若干混じる。
- c. 10YR2/2 黄褐色土。
- d. 10YR4/3 黑褐色土。

第149図 SB2-2 掘立柱建物跡



第150図 SB2-3 挖立柱建物跡

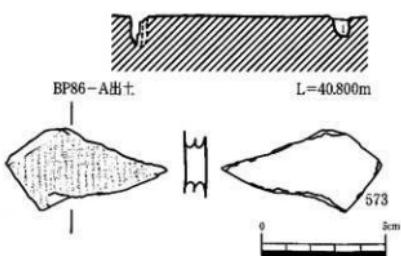


SB2-4

1. 10YR4/4 黄色土に黒褐色汚れわずかに混じる。
2. 黄色土と黒褐色の複合土。(ブロックとして扱じる。)
3. 10YR4/6 黄褐色土、黒褐色ブロック若干混じる。
4. 10YR4/6 黄色土に黒褐色土ブロック若干混じる。
- c. 10YR10/1 黑色土。
- d. 20YR2/2 黑褐色土。

BP182

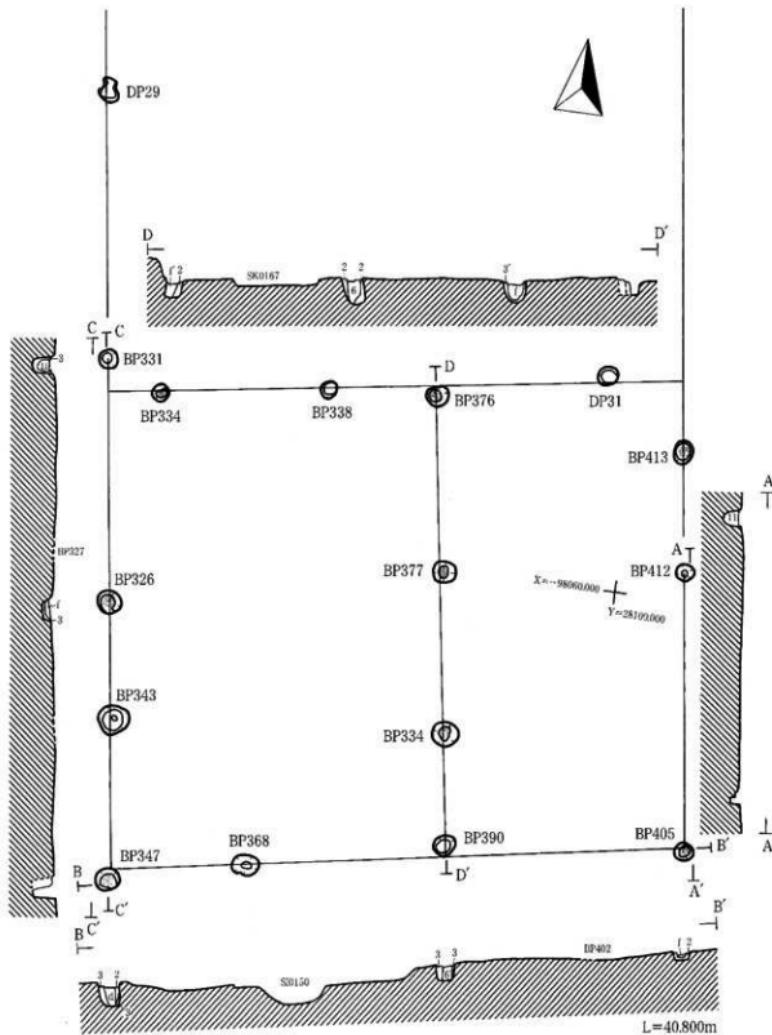
A. 世帯り、7SYR2/ 黒色土、軟質、黄色土ブロックわずかに混じる。



第151図 SB2-4 挖立柱建物跡

() は推定体、残存器高

No.	測上地	深 種	口径cm	底径cm	留高cm	底 形	胎 土	施成	色 調	測 高		測定場所	測 容	備 考
										外 面	内 面			
593	SB2-4 BP86A	須恵器裏	-	-	(3.0)	密	糊	タタキ	外:灰灰 内:灰灰	すり消し	151 105			



2. 錫色土と田舎土の混合土。(ブロックとして盛じる。)
 3. 1993年6月生土軟質。
 4. 黒褐色土(黒れ土)下記じる。
 5. 1993年7月生土上。錫色土ブロックやや多く混じる。
 6. 1993年4月生土上。錫色土ブロック多く混じる。
 7. 1993年4月生土上。錫色土(飼料干し)下記じる。
 8. 1993年7月生土上。
 9. 1993年2月生土上。錫色土多く混じる。
 10. 1993年2月生土上。錫色土(飼料干し)、錫色土粘、灰化粘わずかに混じる。

第152図 SB2-6 掘立柱建物跡

c 群 SB4-1～4-3の3棟がある。SB4-1は調査区東側にある東西4間(12.560m)×南北2間(5.234m)の東西棟建物跡で、SB1-1・2-1・2-6・3・5-2・5-3と重複する。建物方位は発掘基準線に対し、桁行が南側でE 14° 15' N、梁行が西側でN 15° 30' W傾く。東西妻部棟持ち柱が南に偏する特徴がある。柱間寸法は桁行南側柱で西から2.866m、3.131m、3.102m、3.461m、梁行西側柱で北から2.854m、2.380mである。柱掘り方は円形で、直径13～35cmまであるが、平均径22～25cmである。柱当りをもつ掘り方は2個で、径9～20cmある。掘り方の深さは1個のみ9cmで、ほかは20～29cmある。出土遺物はない。

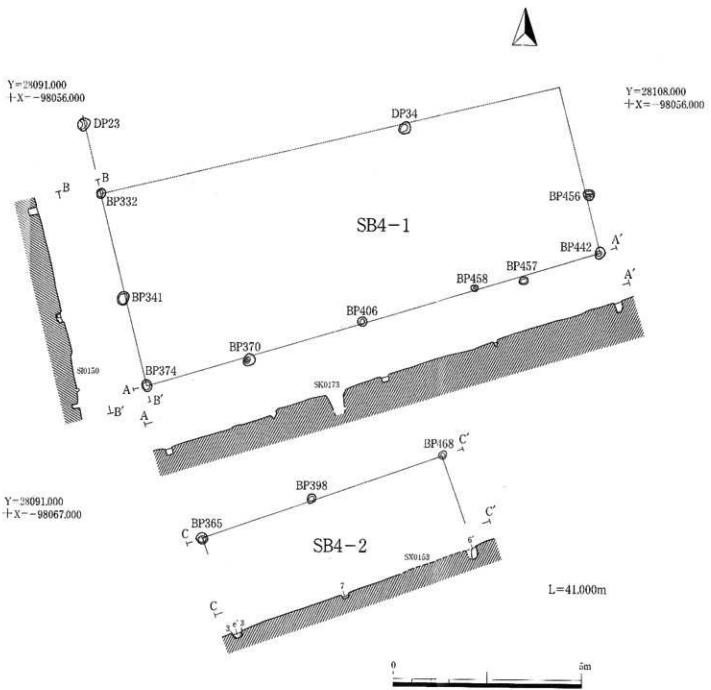
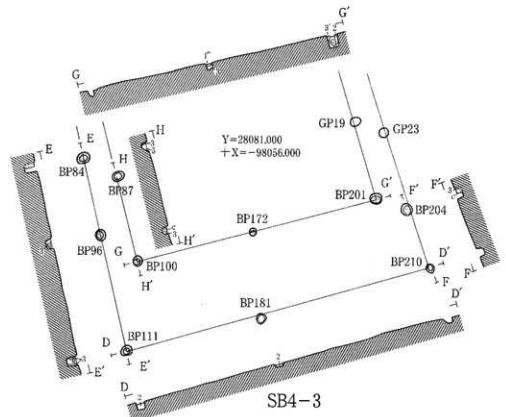
SB4-2は調査区東側SB4-1の南側にある東西2間(6.610m)×南北1間以上の南北棟建物跡と推定され、SB5-2と重複する。建物方位は発掘基準線に対し、梁行が北側でE 15° 30' N傾く。桁行方向はほとんどが発掘区外に延びる。柱間寸法は梁行北側柱で西から2.990m、3.620mである。柱掘り方は直径19～28cmの円形で、柱当りは認められない。掘り方の深さは9～15cmある。埋土は褐色土と黒褐色土で、出土遺物はない。

SB4-3は調査区西側北寄りにある東西2間(6.182m)×南北2間以上の身舎に三面に1間の庇が付く南北棟建物跡で、SB1-5、2-4、5-4と重複し、うち身舎西側柱掘り方がSB2-4掘り方を破壊する。建物方位は発掘基準線に対し、桁行が西側でN 13° 05' W、梁行が南側でE 14° 45' N傾く。柱間寸法は身舎梁行南側柱で西から3.139m、3.043mあり、南庇(総長8.300m)では西から3.636m、4.664mを測る。桁行は大半が発掘区外に延びるが、西庇では南2間分が南から3.161m、2.093mある。庇の出は南庇が2.200mと広いが、桁行方向では極端に狭くなり、あるいは上庇の可能性もある。柱掘り方は直径18～31cmの円形だが、径20～29cmが多い。身舎南妻東端柱掘り方内に径14cmの柱当りがみられる。掘り方の深さは8～16cmと、20～32cmの2種があり、主体は後者である。埋土は掘り方褐色土、柱当り黒色土主体で、出土遺物はない。

d 群 SB5-2～5-5の4棟がある。SB5-2は調査区中央やや東寄りにある東西2間(5.367m)×南北4間以上の南北棟建物跡で、SB2-6・3・4-1・4-2と重複する。建物方位は発掘基準線に対し、桁行が西側でN 4° 15' W、梁行が北側でE 4° 45' N傾く。柱間寸法は梁行北側柱で西から2.948m、2.419m、桁行は南側が発掘区外にあるが、現状西側柱で北から1.991m、2.225m、1.340mを測る。柱掘り方は直径18～28cmの円形で、北妻西端掘り方のみ径30cm前後ある。北妻西寄り2つの掘り方内に径12～17cmの柱当りが認められる。掘り方の深さは11～20cmある。埋土は掘り方褐色土、柱当りは暗褐色土と黒色土主体で、出土遺物はない。

SB5-3は調査区中央北寄りにある東西2間(4.416m)×南北3間(6.790m)の南北棟建物跡で、SB2-6と重複する。建物方位は発掘基準線に対し、桁行が西側でN 5° 20' W、梁行が南側でE 1° 50' N傾く。柱間寸法は桁行西側柱で北から2.775m、1.623m、2.392m、梁行南側柱で西から2.255m、2.161mある。柱掘り方は直径24～34cmの円形で、半数の掘り方内に径13～15cmの柱当りがみられる。掘り方の深さは削平によるものを除くと、19～43cmと比較的深い。埋土は褐色土と黒褐色土主体で、出土遺物はない。

SB5-4は調査区中央西寄りにある東西2間(5.898m)×南北4間以上の南北棟建物跡で、北から3間目に東西に間仕切りを持つ。SB1-2・2-3・2-4・4-3・6と重複する。建物方位は発掘基準線に対し、桁行が西側でN 3° 30' W、梁行が北側でE 5° 35' N傾く。柱間寸法は梁行北側柱で西から2.949m、2.949mの等間、桁行は間仕切りまでが西側柱で北から2.344m、2.538m、3.364mを測る。柱掘り方は直径20～31cmの円形で、ほとんどの掘り方内に径12～17cmの柱当りがみられる。



584
 2. 黒色上に光沢土の複合土。(ブロックとして成る。)
 3. 1872年堆積土と一致。
 4. 堆積土の内部分十面じら。

5. 1872年 黒色土十に黑色上位の砂質層じら。

6. 1872年 堆積土、
 7. 1872年 堆積土、黒色土ブロックを含むじら。

c. 1972年 堆積土。

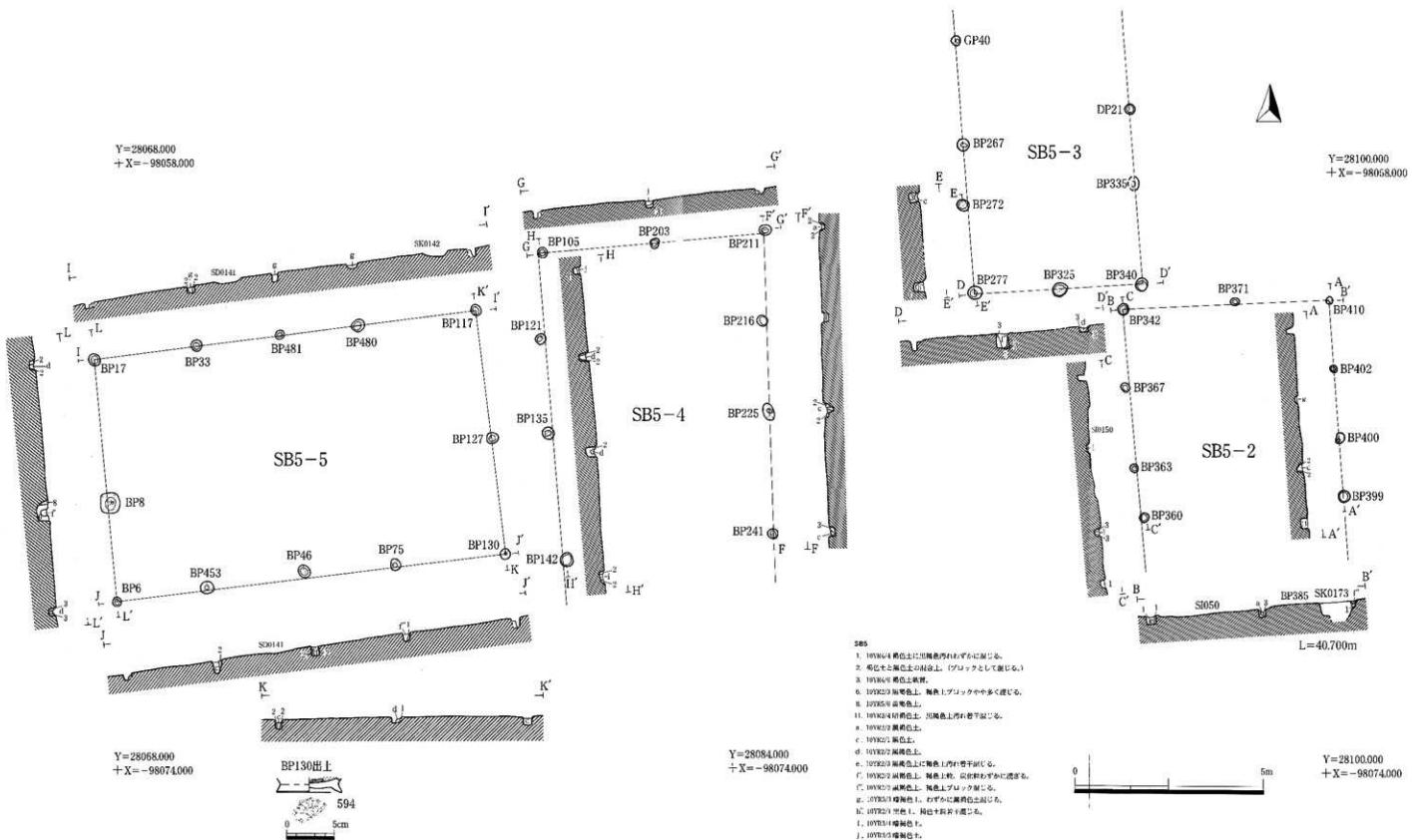
d. 1872年 黑色土。

e. 1872年 黑色土に黑色上位を下限じら。

f. 1872年 黑色土十、黑色上位ブロックじら。

g. 1872年 堆積土、わずかに黒色土出る。

第153図 SB4群全体



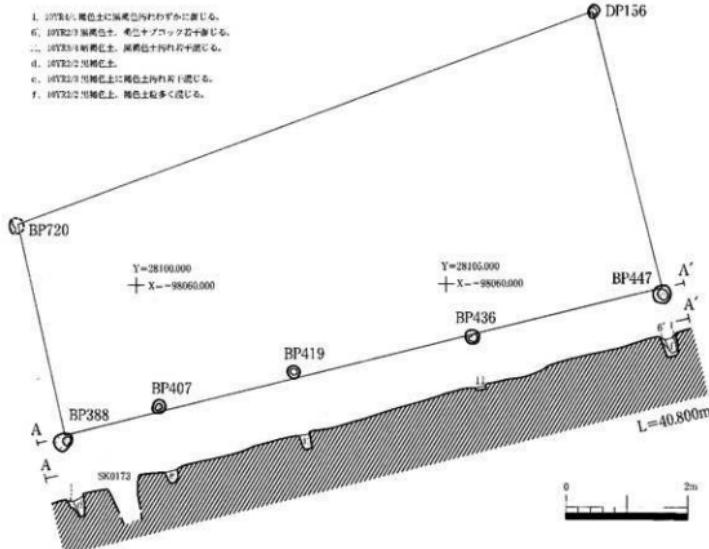
第154図 SB5群全体図

掘り方の深さは 11 ~ 32cm ある。埋土は褐色土、黒褐色土、暗褐色土で、出土遺物はない。

SB5-5 は調査区西寄りにある東西 4 間 (10.339 m) × 南北 2 間 (6.574 m) の東西棟建物跡で、SB1-3・1-6 と重複する。建物方位は発掘基準線に対し、桁行が南側で E 5° 55' N、梁行が西側で N 5° 00' W 傾く。柱間寸法は桁行南側柱で西から 2.388 m、2.625 m、2.414 m、2.912 m、梁行東側柱で北から 3.453 m、3.121 m である。柱掘り方は直径 13 ~ 19cm、21 ~ 29cm、31 ~ 51cm の円形 3 種があるが、径 20cm 代が主体である。1/3 の掘り方内に径 9 ~ 20cm の柱当りがみられる。掘り方の深さは西妻棟持ち柱の 46cm を除くと、14 ~ 34cm ある。埋土は掘り方褐色土、柱当り黒褐色土と暗褐色土主体で、東妻南端 (BP130) 掘り方内から上師器高台坏片が出土している。

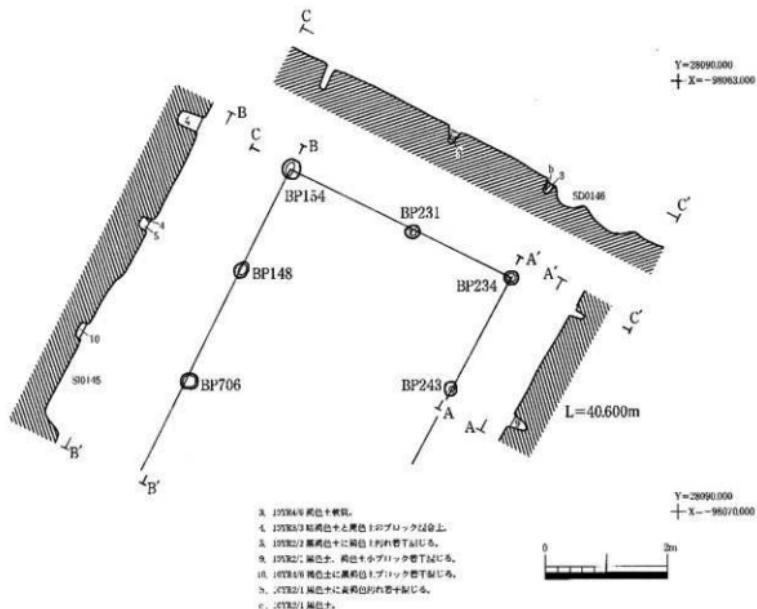
No.	出 土 地	基 準	柱径 cm	柱距 cm	基高 cm	部	地 壤	土 壤 成	色 調	調 型		地盤荷重 t/m ²	地 号
										外 面	内 面		
SB4	SB5-5 BP130	上地窓高台序	-	16.5	16.5	高台貼り付け 柱	褐色	普通	にぶい黄褐色	ロクロ	ミガキ接黒褐色	154	165

e 群 SB3 と SB6 の 2 棟がある。SB3 は調査区東側にある東西 4 間 (10.000 m) × 南北 1 間 (3.720 m) の東西棟建物跡で、SB1-1・2-1・2-6・4-1 と重複する。建物方位は発掘基準線に対し、桁行が南側で E 12° 15' N、梁行が西側で N 12° 05' W 傾く。北側柱は東に向かってやや聞く構造となる。柱間寸法は桁行南側柱で西から 1.620 m、2.228 m、2.957 m、3.195 m ある。北側柱掘り方はほとんど削平され、不明である。柱掘り方は直径 16 ~ 27cm の円形で、掘り方内の柱当りはみられない。掘り方の深さは 5cm と浅い 1 つを除くと、16 ~ 38cm ある。埋土は褐色土と黒褐色土で、出土遺物はない。



第155図 SB3 掘立柱建物跡

SB6は調査区中央やや西寄りにある東西2間(3.999m)×南北3間以上の南北棟建物跡で、SB1-2・1-4・2-2・5-4と重複する。建物方位は発掘基準線に対し、桁行が西側でN 25° 50' Eと東側へ大きく偏する。柱間寸法は梁行北側柱で西から2.224m、1.775mあり、桁行は西側柱で北から2間目まで1.842m、2.014mある。柱掘り方は直徑19~28cmの円形で、掘り方内の柱当りはみられない。掘り方の深さは19~39cmある。埋土は黒褐色土と黑色土で、出土遺物はない。



第156図 SB6 堀立柱建物跡

第3表 中世掘立柱建物跡規模一覧表

建物 No.	総長(m)		寸方(尺)		桁行方位(座標軸) 梁行方位(座標軸)	建物方位	備考
	桁行(間)×梁行(間)		桁行×梁行(単位尺cm)				
1-1		6.985		23尺	(東)	南北棟	
	2間以上	2		30.03cm			
1-2	7.070	4.227	23.5	14	0°(東西妻側)	東西棟	1-6と相似形
	3	1	30.08	30.18	0°(南側柱)		
1-3	6.788	4.750	22.5	15.5	E3° 15' S(南側柱)	東西棟	総柱建物
	2	2	30.16	30.64	0°(東妻側)		
1-4	6.761		22.5	0°(西側柱)	南北棟	東東側柱 N2° 45' W	1-2相似形
	3間以上	2		30.04			
1-5	5.585 + ?		18.5 + ?		南北棟	西に1間底	
	2間以上	2		30.19			
1-6	5.490		18	E0° 45' S(南側柱)	東西棟	1-2相似形	
	3間以上	2		30.5			
建物2群では 建物の近似 建物をなさ ない。							
2-1	11.980	5.510	40	18	E7° 15' N(南側柱)	東西棟	建物1のグループは、いずれかの建物 の方位が基準間に一致するか、1°未 満のものが多め、一致しない場合でも 既往の例より2°～3°差を示す事 が多い。
	4	3 (2)	29.95	30.61			
2-2	7.847	5.173	26	17	E7° 55' N(南側柱)	東西棟	東西棟持ち柱が南に偏 する
	3	2	30.18	30.42			
2-3	9.330	4.107	31	13.5	E7° 05' N(南側柱)	東西棟	東1間に間仕切り
	3	2	30.09	30.42	N9° 50' W(東妻柱)		
2-4	6.515		21.5	N9° 00' W(西側柱)	南北棟	4-3側方に切られる	
	3間以上	2		30.30	E4° 20' N(南妻側)		
2-5	7.062		23.5	N7° 05' W(西側柱)	南北棟	南2間に間仕切りをも ち、内部を東西に二分 する	
	3間以上	2		30.05	E10° 30' N(南妻側)		
3	10.000	3.720	33	12	E12° 15' N(南妻柱)	東西棟	振れが10°以上西側に 偏する
	4	1	30.30	31.00	N12° 05' W(西妻側)		
4-1	12.560	5.234	41	17	E14° 15' N(南側柱)	東西棟	東西棟持ち柱が南に偏 する
	4	2	30.63	30.78	N15° 30' W(西妻側)		
4-2	6.610		22			南北棟 (推定)	
	1間以上	2		30.04	E15° 30' W(北妻側)		
4-3	6.182(身内)		20.5		N13° 05' W(西側柱)	南北棟	一面庇付建物 延南北8.300m 2～4振り方に切る
	2間以上	2		30.15	E14° 45' N(南庇)		
5-2		5.367		17.5	N4° 15' W(西側柱)	南北棟	
	4間以上	2		30.66	E4° 45' W(北妻側)		
5-3	6.790	4.416	22.5	14.5	N5° 20' W(西側柱)	南北棟	
	3	2	30.17	30.45	E1° 50' W(南妻側)		
5-4		5.898		19.5	N3° 30' W(西側柱)	南北棟	北から3間口に間仕切 りをもつ
	4間以上	2		30.24	E5° 35' N(北妻側)		
5-5	10.339	6.574	34	21.5	E5° 55' N(南側柱)	東西棟	
	4	2	30.34	30.57	N5° 00' W(西妻側)		
6		3.999		13	N25° 50' E(西側柱)	南北棟	建物方位が東へ大き く偏する
	3間以上	2		30.76			